

# 上見遺跡

—— 県営圃場整備事業に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ——

1991

茅野市教育委員会

# 上見遺跡

—— 県営圃場整備事業に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ——

1991

茅野市教育委員会

## 序 文

茅野市は国の特別史跡である「尖石遺跡」、同じく国の史跡である「上之段遺跡」をはじめ、縄文時代を中心とする多くの遺跡が発見されており、その数は最近の成果で300を越えるものとなっています。泉野地区にも20遺跡が確認されていますが、発掘調査が行なわれたものは日鶴寺遺跡だけで、多くの遺跡はその性格が分らないままとなっています。泉野地区はこれまで大きな開発から免れましたが、この度、棚木地区で140haにおよぶ県営団地整備事業が行なわれることとなりました。この地区には上見遺跡をはじめ、中原遺跡、稗田頭A・B遺跡が存在することが確認されていますが、やむを得ず記録保存することとなりました。今回の上見遺跡の調査を手始めに、今後数年間に中原遺跡、稗田A・B遺跡の調査が行なわれる予定です。貴重な財産である埋蔵文化財が失われることは、まことに残念ではありますが、今まであまり知られていなかった、泉野地区の歴史の解明に貢献できるものと思われます。

上見遺跡は、先土器時代と縄文時代中期初頭の小さな遺跡でした。茅野市では、白樺湖周辺や、蓼科周辺で先土器時代の遺跡が発見されていますが、どれも和田岬や麦草岬などから黒曜石を運ぶルート上にある遺跡と考えられています。それらの遺跡は規模も大きく、出土する遺物もかなりな量に上りますが、この上見遺跡は八ヶ岳山麓に生活した、人々の遺跡と考えられます。このような遺跡は先土器時代の遺跡の多い茅野市においても数が少なく、実際の生活を知る上に貴重であると言えます。また、縄文時代についても、集落遺跡の発掘例の多い茅野市において、住居址のない土坑群だけの発見は、集落とそれ以外の場所を明確に分けていた、縄文時代の人々の生活の一端を明らかにするものでした。

最後に、今回の調査、報告書刊行に尽力頂いた、関係者に深く感謝するとともに、本報告書が、研究者を始め、多くの人々に活用されることを願っております。

平成3年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角昭二

## 例　　言

1. 本書は、長野県茅野市泉野下樋木上見遺跡の県営廣場整備事業に伴う、発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成2年9月11日から9月19日までと、11月14日から12月12日までの2回に分けて行なった。
4. 発掘現場における記録及び遺物整理は下記の調査員及び調査補助員が行なった。
5. 出土品、諸記録は茅野市尖石考古館で保管している。
6. 本書の原稿執筆は、第II章第1節を守矢昌文が、第IV章第1節・第V章第1節を功刀司が、その他を小林深志が行なった。

発掘調査関係者名簿

調査員 鵜飼幸雄、守矢昌文、小林深志、伊東みゆき、功刀司

調査補助員 矢嶋恵美子、武居八千代、占部美恵、間喜子、小松とよみ、矢崎つな子、原敏江、小林淳子

発掘参加者 佐久邦子、牛山市弥、牛山徳博、平沢壯春、平沢美知、矢島のぶ子、朝倉とよ志、内村双美子

整理作業参加者

矢島恵美子、武居八千代、占部美恵、牛山市弥、牛山徳博、赤堀彩子、細田一子、竹村鈴子、

中島薰、竹村京子、石田享子、中川和也、森沢悟、この他尖石考古館植松幸子、伊野文子、米山美代子の協力を得た。

報告書の作成にあたって森山公一氏他に御教示を賜った。ここに記して深く感謝の意を表したい。

# 目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境.....	1
第Ⅱ章 調査経緯.....	3
第1節 調査に至るまでの経過.....	3
第2節 調査の方法と経過.....	4
第Ⅲ章 遺跡の層序.....	7
第Ⅳ章 造構と遺物.....	8
第1節 先土器時代.....	8
(1) 器種構成と遺跡における石器群の広がり.....	8
(2) 先土器時代の遺物.....	8
第2節 繩文時代.....	23
(1) 土 坑.....	23
(2) ロームマウンド.....	55
(3) 遺構外の遺物.....	61
1) 土 器.....	61
2) 石 器.....	62
第V章 まとめ.....	64
第1節 先土器時代.....	64
第2節 繩文時代.....	65
(1) 土 坑.....	65
(2) 土 器.....	73
(3) 周辺遺跡との関連.....	78

# 挿図目次

1 第1図 遺跡位置図 (1/25,000) .....	2
2 第2図 地形と発掘区域 (1/2,000) .....	5
3 第3図 遺跡の層序 (1/40) .....	7
4 第4図 先土器時代遺物の分布と接合 (1/80) .....	9・10
5 第5図 先土器時代の遺物(1) (2/3) .....	11
6 第6図 先土器時代の遺物(2) (2/3) .....	12
7 第7図 先土器時代の遺物(3) (2/3) .....	13

8	第8図 先土器時代の遺物(4) (2/3)	14
9	第9図 先土器時代の遺物(5) (2/3)	15
10	第10図 先土器時代の遺物(6) (2/3)	16
11	第11図 遺構分布図 (1/400)	25・26
12	第12図 縄文時代の土坑(1) (1/40)	38
13	第13図 縄文時代の土坑(2) (1/40)	39
14	第14図 縄文時代の土坑(3) (1/40)	40
15	第15図 縄文時代の土坑(4) (1/40)	41
16	第16図 縄文時代の土坑(5) (1/40)	42
17	第17図 縄文時代の土坑(6) (1/40)	43
18	第18図 縄文時代の土坑(7) (1/40)	44
19	第19図 縄文時代の土坑(8) (1/40)	45
20	第20図 縄文時代の土坑(9) (1/40)	46
21	第21図 縄文時代の土坑(10) (1/40)	47
22	第22図 縄文時代の土坑(11) (1/40)	48
23	第23図 縄文時代の土坑(12) (1/40)	49
24	第24図 縄文時代の土坑(13) (1/40)	50
25	第25図 縄文時代の土坑(14) (1/40)	51
26	第26図 縄文時代の土坑(15) (1/40)	52
27	第27図 ロームマウンド (1/40)	56
28	第28図 縄文時代の土器(1) (1/4)	57
29	第29図 縄文時代の土器(2) (1/3)	58
30	第30図 縄文時代の土器(3) (1/3)	59
31	第31図 縄文時代の土器(4) (1/3)	60
32	第32図 縄文時代の石器 (1～5は2/3、6は1/2、7～9は1/4)	63
33	第33図 I類 (陥し穴) 土坑の配置 (1/400)	67

## 図版目次

図版1	上空から遺跡を望む	図版4-2	先土器時代遺物出土状況 (南から)
図版2-1	遺跡遠景 (西から)	図版5-1	先土器時代遺物出土状況 (東から)
図版2-2	第1次調査 (東から)	図版5-2	先土器時代の接合資料(1)
図版3-1	第1次調査遺構分布 (東から)	図版6-1	先土器時代の接合資料(2)
図版3-2	第2地点遺構分布 (南から)	図版6-2	先土器時代の接合資料(3)
図版4-1	先土器時代の調査 (南から)	図版7-1	先土器時代の石器(1)

- |        |                        |        |                          |
|--------|------------------------|--------|--------------------------|
| 図版7-2  | 先土器時代の石器(2)            | 図版19-3 | 28号土坑（西から）               |
| 図版8-1  | 2号土坑                   | 図版20-1 | 34号土坑（西から）               |
| 図版8-2  | 5・6・15号土坑（南から）         | 図版20-2 | 8号土坑（北から）                |
| 図版8-3  | 22号土坑（坑底ピット検出状態）（北東から） | 図版20-3 | 13号土坑（北から）               |
| 図版9-1  | 22号土坑（光擬状態）（北から）       | 図版21-1 | 19号土坑（北から）               |
| 図版9-2  | 22号土坑（壁面ピットの状態）        | 図版21-2 | 24・25号土坑（西から）            |
| 図版9-3  | 22号土坑（壁面ピットに杭を差してみる）   | 図版21-3 | 36・37号土坑（西から）            |
| 図版10-1 | 23号土坑                  | 図版22-1 | 50号土坑（西から）               |
| 図版10-2 | 26号土坑（北から）             | 図版22-2 | 51・52号土坑                 |
| 図版10-3 | 39号土坑                  | 図版22-3 | 21号土坑                    |
| 図版11-1 | 43号土坑（西から）             | 図版23-1 | 33号土坑（西から）               |
| 図版11-2 | 49号土坑（西から）             | 図版23-2 | 44号土坑（北から）               |
| 図版11-3 | 54・55号土坑（西から）          | 図版23-3 | 57号土坑（西から）               |
| 図版12-1 | 58・59号土坑（西から）          | 図版24-1 | 62号土坑（北西から）              |
| 図版12-2 | 61号土坑                  | 図版24-2 | 1号ロームマウンド（西から）           |
| 図版12-3 | 63号土坑（北西から）            | 図版24-3 | 1号ロームマウンド（東から）           |
| 図版13-1 | 4号土坑（西から）              | 図版25-1 | 2号ロームマウンド（東から）           |
| 図版13-2 | 7号土坑（南から）              | 図版25-2 | 2号ロームマウンド（西から）           |
| 図版13-3 | 12号土坑（東から）             | 図版26-1 | 3号土坑出土土器                 |
| 図版14-1 | 9・10・14・27号土坑（北から）     | 図版26-2 | 5・8号土坑出土土器               |
| 図版14-2 | 14号土坑遺物出土状態（南から）       | 図版27-1 | 12号土坑出土土器                |
| 図版14-3 | 16・17・18号土坑（北から）       | 図版27-2 | 14号土坑出土土器                |
| 図版15-1 | 29・56号土坑（西から）          | 図版28-1 | 13・15・16・17号土坑出土土器       |
| 図版15-2 | 32号土坑（北から）             | 図版28-2 | 18号土坑出土土器                |
| 図版15-3 | 35号土坑（西から）             | 図版29-1 | 21・23・29・31・48号土坑出土土器    |
| 図版16-1 | 38・46号土坑（西から）          | 図版29-2 | 40号土坑出土土器(1)             |
| 図版16-2 | 42・53号土坑               | 図版30-1 | 40号土坑出土土器(2)             |
| 図版16-3 | 48号土坑（西から）             | 図版30-2 | 42号土坑出土土器                |
| 図版17-1 | 64号土坑（西から）             | 図版31-1 | 41・42・47・49号土坑出土土器       |
| 図版17-2 | 11号土坑（北から）             | 図版31-2 | 51・53・57・63・64・65号土坑出土土器 |
| 図版17-3 | 31号土坑（西から）             | 図版32-1 | 1号ロームマウンド出土土器            |
| 図版18-1 | 31号土坑遺物出土状態（西から）       | 図版32-2 | 2号ロームマウンド・Aトレンチ出土土器      |
| 図版18-2 | 40号土坑                  | 図版33-1 | A・B・Cトレンチ出土土器            |
| 図版18-3 | 41号土坑                  | 図版33-2 | 表様土器                     |
| 図版19-1 | 45・47・60号土坑（東から）       | 図版34-1 | 縄文時代の石器(1)               |
| 図版19-2 | 20号土坑（北から）             | 図版34-2 | 縄文時代の石器(2)               |

## 第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

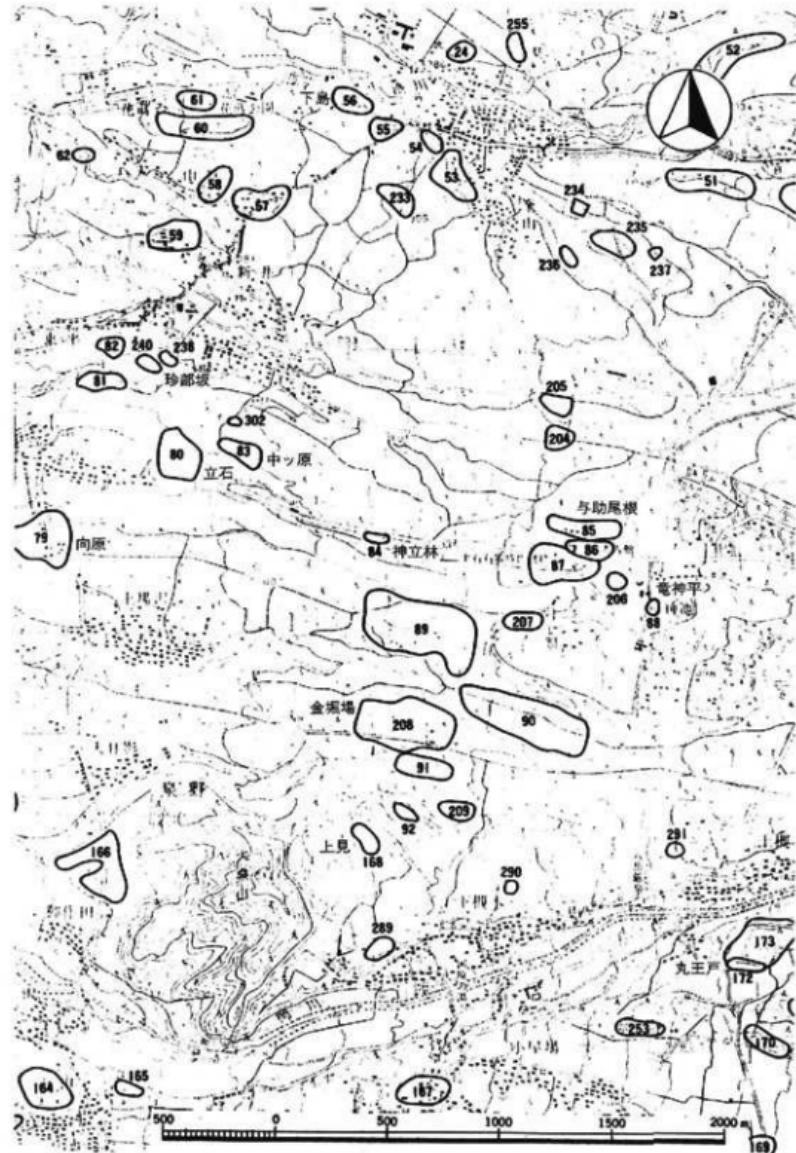
茅野市は、東に連なる八ヶ岳連峰、北の霧ヶ峰山塊から延びる永明寺山塊、西の赤石山脈から続く守屋山塊に囲まれ、諏訪地方の中でも諏訪湖周辺とは違った地形の中に形成されている。また、八ヶ岳の山麓台地も南八ヶ岳の山麓は西に傾斜しているのに対し、北八ヶ岳の山麓は北西に傾斜している。これは北八ヶ岳の火砕流が北西に流れた関係によるもので、北八ヶ岳から流れ出た河川は、北西に流れた後、上川と合流して西流し、諏訪盆地に至って北へ向きを変え、諏訪湖に至っている。一方、南八ヶ岳から流れ出た河川は、西流し、宮川と合流して北へ向きを変え、やがて諏訪湖に至っている。

また、茅野市のほぼ中央に小泉山と大泉山があり、地形を一層複雑なものにしている。

本遺跡は、茅野市泉野下根木に所在し、茅野市の地形区分では、北山浦と呼ばれる地域にある遺跡の一つである。遺跡の標高はほぼ1040mで、八ヶ岳山麓に近い大泉山の東に位置する。本遺跡の南側を流れる柳川は、大泉山の南側を通った後、大泉山と小泉山の間を抜け、小泉山の北を西に向い、上川に合流する。一方、北側を流れる上場沢川は、西に向って流れ、小泉山手前で柳川に近付き、並走して上川に合流する。また、柳川と上場沢川の間を大口影川が流れ、小さな谷を作っているが、やはり大泉山の北側を通り、上川に合流している。

本遺跡から柳川までは約500mあり、40mの段差をもつた台地上にある。前述のように台地が北西に傾斜していることもある、柳川以南とは地形的に関係が薄いものとなっている。

周辺の縄文時代中期の遺跡としては、中原遺跡、稗田頭A・B遺跡、金堀場遺跡、鶴田遺跡が知られる。また、大泉山を挟んで西側に上の平遺跡、師岡平遺跡、威力不動尊東遺跡がある。



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

## 第II章 調査経緯

### 第1節 調査に至るまでの経過

概木地区の県営圃場整備事業は平成2年度から平成6年度にかけて、140haを対象に行なわれることが計画され、これに伴い当該事業の実施区域内の遺跡についての保護方法の検討に入った。

茅野市教育委員会では大規模な公共事業計画については、事前に実態調査を実施し、事業地内の埋蔵文化財の有無についてチェックする体制を年度当初にとっている。そこで県営圃場整備事業概木地区に関しては、上見遺跡・中原遺跡・稗田頭A遺跡・稗田頭B遺跡の存在することを確認していた。

平成元年7月7日付元教文第130号、平成2年度の農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護について（通知）が長野県教育委員会から出された。この通知に対し、茅野市教育委員会では平成元年7月24日付元教生第242号に於いて県営圃場整備事業概木地区の事業地区内に上見遺跡・中原遺跡・稗田頭A遺跡・稗田頭B遺跡が位置していることを回答した。

平成元年8月23日付元教文第130号平成2年度の農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護協議について（通知）が長野県教育委員会より提出され、9月11日に長野県教育委員会小林秀夫指導主事、児玉卓文指導主事、諏訪地方事務所土地改良課、茅野市耕地林務課圃場係、茅野市教育委員会生涯学習課で協議がもたらされた。その協議結果とし、平成元年10月31日付元教文第7-70-6号県営圃場整備事業概木地区事業にかかる上見遺跡の保護について（通知）が長野県教育委員会より提出された。それによると、上見遺跡の保護については、発掘調査による記録保存とし、発掘調査に伴う経費は諏訪地方事務所の負担とするが、農家負担分については文化財保護側で負担する。また、発掘調査は茅野市教育委員会に委託されるというものであった。発掘調査計画書によると、3,000m<sup>2</sup>以上を発掘調査し、記録保存をはかるというもので、その経費は総額で21,000,000円であった。この計画を受け茅野市教育委員会では平成2年度文化財補助事業計画をあげ事業に備えた。

平成2年度に入り平成2年5月28日付2教文第113号平成2年度文化財関係国庫補助事業計画の内定について（通知）が長野県教育委員会から提出された。これを受けて5月31日付2教生第125号平成2年度文化財補助金申請を提出したが、文化庁補助金が減額となって内示された。それによると発掘調査の経費は総額で12,992,000円というものであった。

平成2年8月13日付諏地1-第239号埋蔵文化財包蔵地発掘調査計画書及び経費の見積りについて（通知）が諏訪地方事務所長より茅野市長宛に提出され、この見積り・計画書を8月18日付で提出した。これを受けて平成2年8月20日付2諏地土第239号をもって諏訪地方事務所長と茅野市長との間に「埋蔵文化財包蔵地発掘委託契約書」を取交わし業務に入った。

平成2年9月1日付2教生第346号で埋蔵文化財発掘通知を提出し、9月11日より発掘調査に入った。

発掘調査の結果、当初の予定より遺跡の規模等が縮小となつたため、平成2年11月5日付2教生第475号をもって文化財国庫補助金事業の計画変更承認申請書を提出した。農政部局についても平成2年12月3日付2教生第516号上見遺跡発掘調査計画変更に伴う工事施工協議書を提出し計画変更を行なつた。それによると総額7,270,000(農政部局負担5,270,000円、文化財負担2,000,000円)で事業を行なうこととした。

## 第2節 調査の方法と経過

### 第1次調査

#### 第1地点の調査

調査は9月11日から行なつた。本遺跡の立地する台地は、畑の他、多くは水田として活用されているため、傾斜地を削平し、あるいは埋立てることにより、遺跡内の遺構が壊されている個所の多いことが予想された。そこで、本調査に先立つて、トレンチによる遺物の出土状態、遺構の有無についての確認を行なつた。トレンチは約2m幅で2~4m間隔で開けていった。その結果、最初行なつた第1地点では遺構・遺物の検出はなかつた。

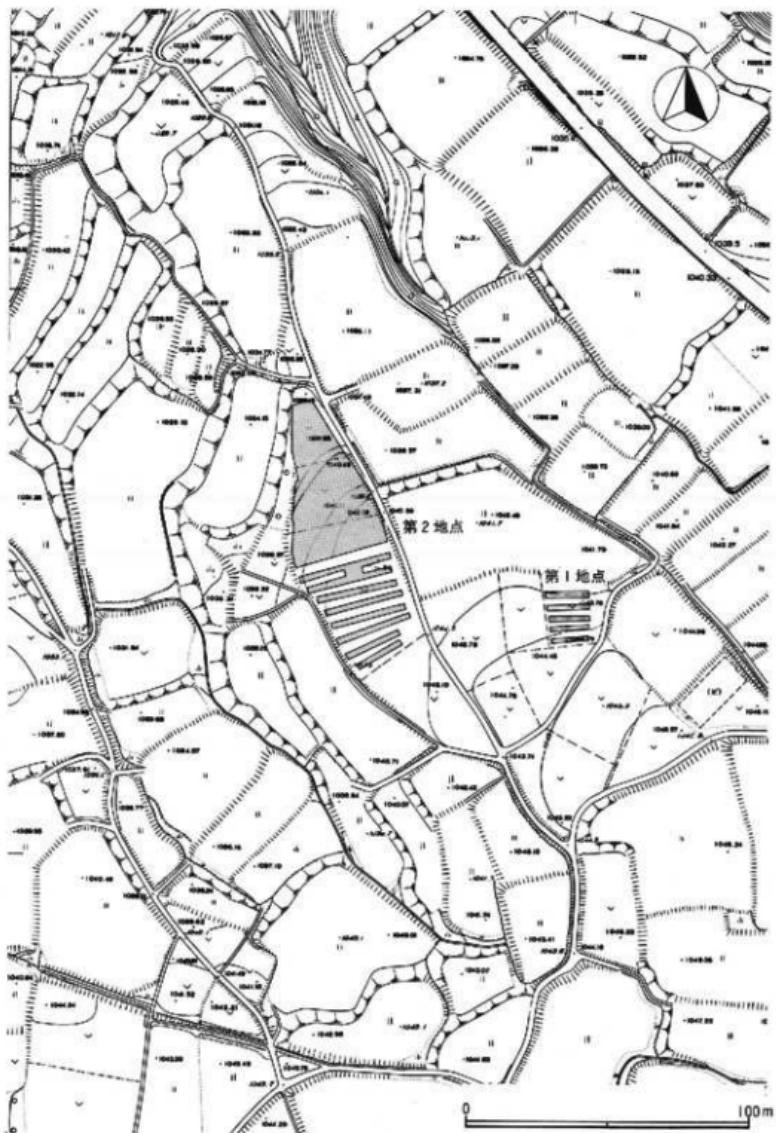
#### 第2地点の調査

第2地点の調査も第1地点と同じく、当初約2m幅のトレンチを2~4mの間隔で掘り下げ、遺構の有無を確認し、必要に応じて調査区を拡張する方法をとつた。トレンチは、北からA~Jトレンチと呼称した。しかし、調査区北側のA・Bトレンチで、遺構の検出が予想以上に見られたため、遺構の集中して確認された個所については全面の表土層を剥ぎ、遺構の検出に努める事にした。その結果、住居址は確認されなかつたものの、土坑が22基検出された。土坑には階穴と考えられる土坑2基の他、繩文時代中期初頭の一括土器を覆土内に持つ円形の土坑も幾つか検出された。遺構は調査区の北側に分布の集中が見られ、当初予定した範囲のさらに北側に住居址を含む遺跡の中心があることが予想されたが、作物の取入れ時期の関係で、9月19日には一旦調査を打ち切り、作物の取入れを待つた。遺構分布図では、26ライン途中から南側までが第1次調査範囲である。

調査区は、トレンチ調査を行なつた個所も含めた全体に、南北隅を基準とし、2mを1単位として、東西をアルファベット、南北を数字で呼称するグリッドを設定した。なお、調査区のY軸(南北軸)の軸線方向は、N-12°-Wを指す。

#### 第2次調査

調査は、畑の作物の取入れが終つた11月14日に再開した。調査の方法については、調査対象区域の全面の表土層を、重機を用いて剥ぎ、遺構の検出を行なう方法を取つた。その結果、住居址の検出はなかつたものの、調査区域内のほぼ全面に土坑が検出された。第1次調査を含む土坑の



第2図 地形と発掘区域 (1/2,000)

総数は、65基である。

また、調査を再開した直後の11月17日から黒曜石の剥片が出土し始め、先土器時代の遺物包含層の存在が予想されたが、表土層の下が直ちにローム漸移層となるため、耕作による歴がローム層中まで達しており、調査者の間でも確実に先土器時代の遺物であるかどうか疑問視する者も多かった。

確実に先土器時代の遺物と考えられるようになったのは、調査終了予定日の前日である12月7

日である。朝の霜取り作業の為ローム層上面を清掃していくとローム中からいくつかの遺物の出土を見たため、急遽調査終了を延期し、先土器時代の遺物包含層の調査に入った。その為、調査期間が若干伸び、霜が降りるなどの困難はあったが、天候にも恵まれ、12月12日には無事調査を終了した。

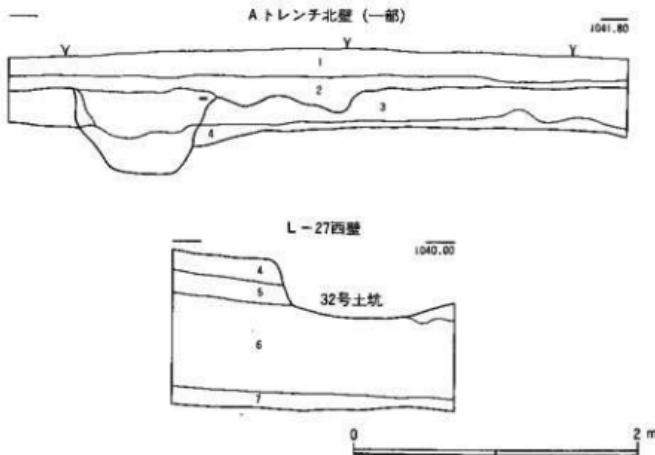
第1次・第2次調査を合せた調査面積は、第1地点が $135\text{m}^2$ 、第2地点が $699\text{m}^2$ であった。

遺物整理・報告書作成については、発掘調査期間中の雨天の日を利用しての遺物の洗浄のほか、12月中旬からの遺物整理・報告書作成期間を利用して行なった。

### 第III章 遺跡の層序

本遺跡の層序は、耕作土である表土層以下、遺物包含層、ローム漸移層、ソフトローム、ハードロームと続く。縄文時代の遺物包含層は2層下部から3層上面である。また、本遺跡からは先土器時代の遺物が出土している。この時期の遺物の出土は、ローム漸移層からソフトローム下部までで、ハードロームまでには至っていない。

- ①表土層 耕作土で色調は灰褐色を呈する。
- ②黒色土 下部に縄文時代中期初頭の土器を包含する。
- ③暗褐色土 上部に縄文時代中期初頭の上器を包含する。
- ④暗褐色土 ローム漸移層。先土器時代の遺物を包含する。
- ⑤ソフトローム 明褐色土。先土器時代の遺物を包含する。
- ⑥ハードローム 1 やや白みを帯びた明褐色土。2~3cmの安山岩の小礫を稀に含む。微細な白色の粒子を混入する。層高は約65cm。
- ⑦ハードローム 2 やや白みを帯びた明褐色土。3cm程の暗褐色のバミスが斑状に入る。



第3図 遺跡の層序 (1/40)

## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 先土器時代

#### (1) 器種構成と遺跡における石器群の広がり

上見遺跡からは、総数182点の石器が出土した。このなかから縄文時代の定形石器と土坑およびローム・マウンドから出土した石器、表面採集資料を除く105点の石器が、先土器時代に属する石器群である可能性が高いものと考えられた。この石器群は、ローム漸移層である暗褐色土層からソフトローム層にかけて出土したが、暗褐色土層中からは、石鐵や縄文土器と混在し、また土坑内出土の剝片と接合する資料があり、純然たる先土器時代の石器群であるとは言い難い。本報告においては、縄文時代の石器を分離することができなかったため、とくに剝片の数量的な分析はほとんど行ないえなかった。

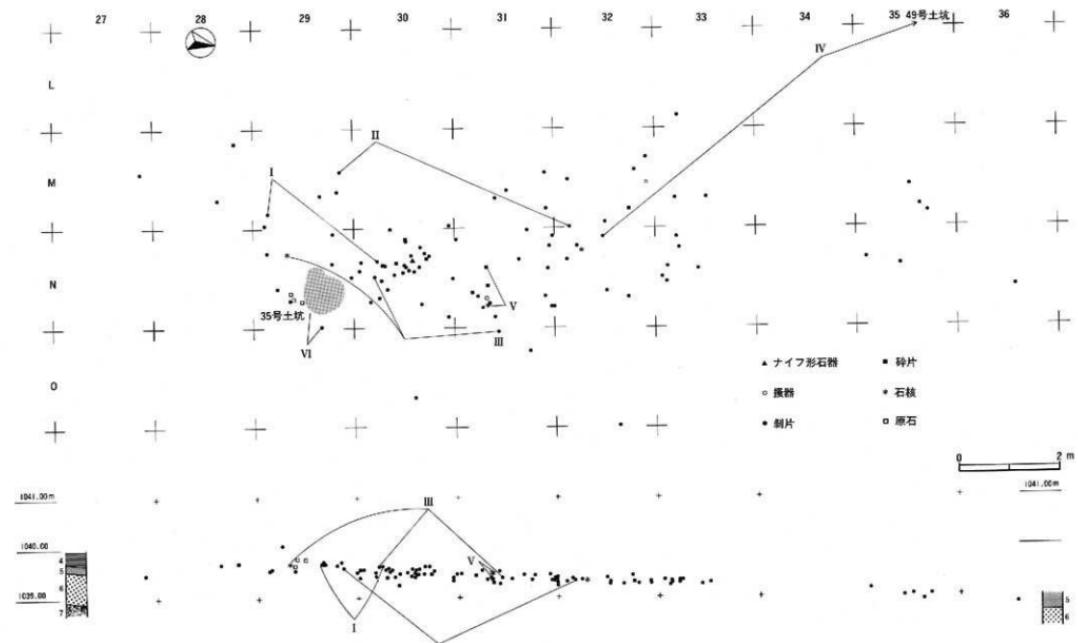
石器群の器種構成は、ナイフ形石器1点、搔器2点、調整加工のある剝片11点、剝片67点、碎片10点、石刻調整剝片8点、石核3点、原石3点がある。

石器群は、第2地点調査区のL・O-27・36グリッドの範囲から出土している。その広がりと主な器種の分布、石器の接合関係を示したものが第4図である。平面的な広がりからみると、北側の剝片6点からなる極めて規模の小さなブロックと、南側に広がる規模の大きなブロックの二つのまとまりが認められる。2つのブロックは、暗褐色土層とソフト・ローム層の境を中心として分布し、2つのブロックの間に層位の差は認められない。石器が接合した例は第5図Iから第7図VIまでの6例であるが、そのうちI、II、III、Vの4例が南側のブロック内に集中し、強いまとまりがみられる。

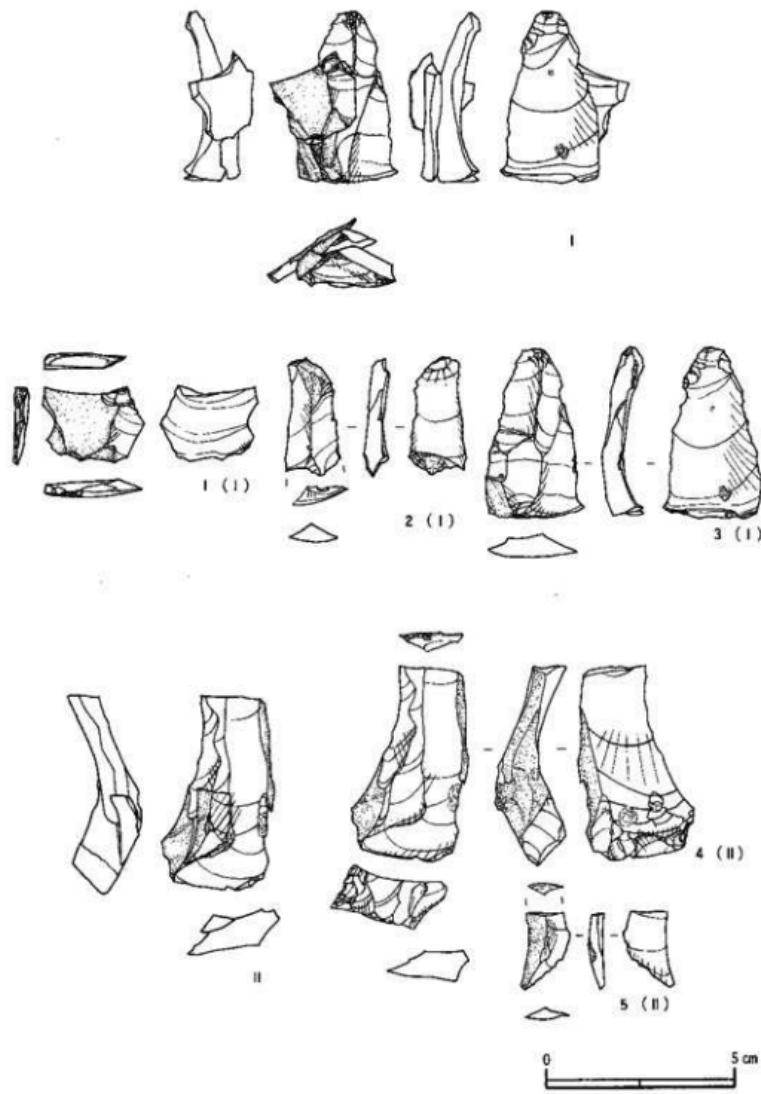
#### (2) 先土器時代の遺物

接合資料Iは、石核の上下両面に打面をもつ両設打面石核から打ち剝がされた剝片3枚が接合したものである。剝片剝離に先立って、第5図1の下側の打面を作り、さらに細かい調整加工を加えた後、第5図1・2を含む3枚の剝片を打ち剝がしている。つぎに、石核をさかさまにし、第5図3の剝片を含む6枚ほどの剝片を打ち剝がしている。接合資料Iではもっとも外側の剝片である第5図1の表面に図の上から下へむかう剝離痕が観察されることから、接合資料を都合2回、180度回転して剝片剝離を行なっていることがわかる。

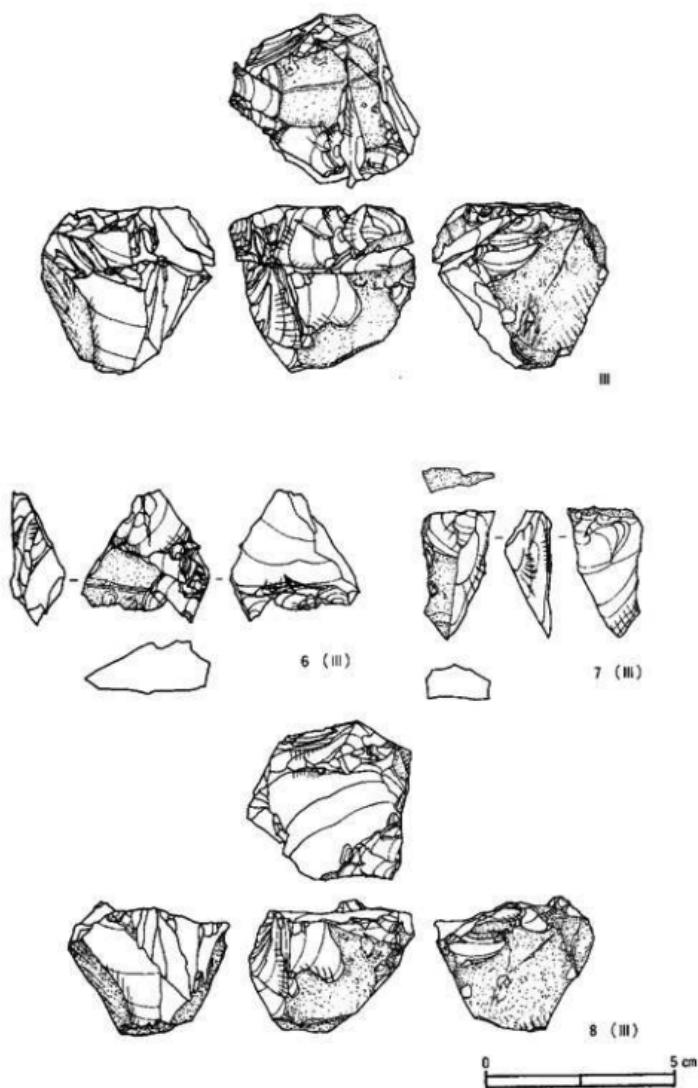
接合資料IIもIと同様に、剝片どうしが接合した例である。第5図4・5とも、打面の部分が欠けている。第5図4の剝片末端には、表面および主要剝離面よりも古い剝離面が残っていることから、接合資料IIはIと異なり、打面を90度移して剝片剝離を行なったものと考えられる。



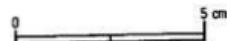
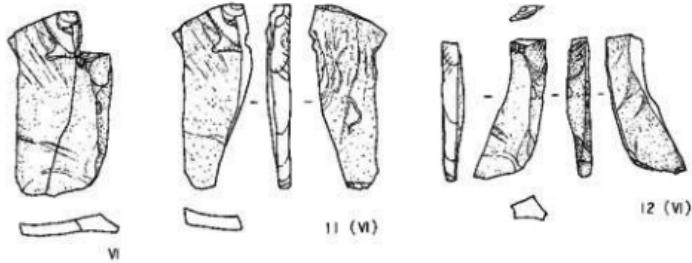
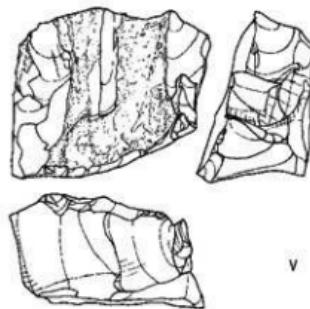
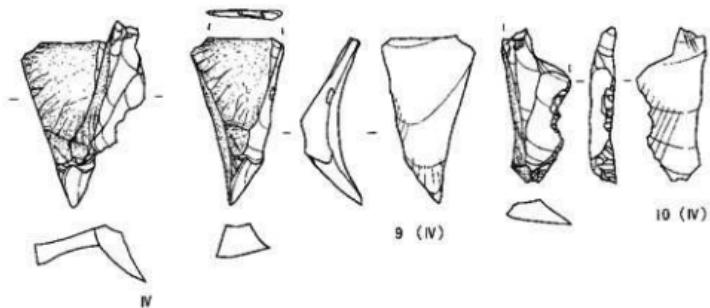
第4図 先土器時代の遺物の分布と接合 (1/80)



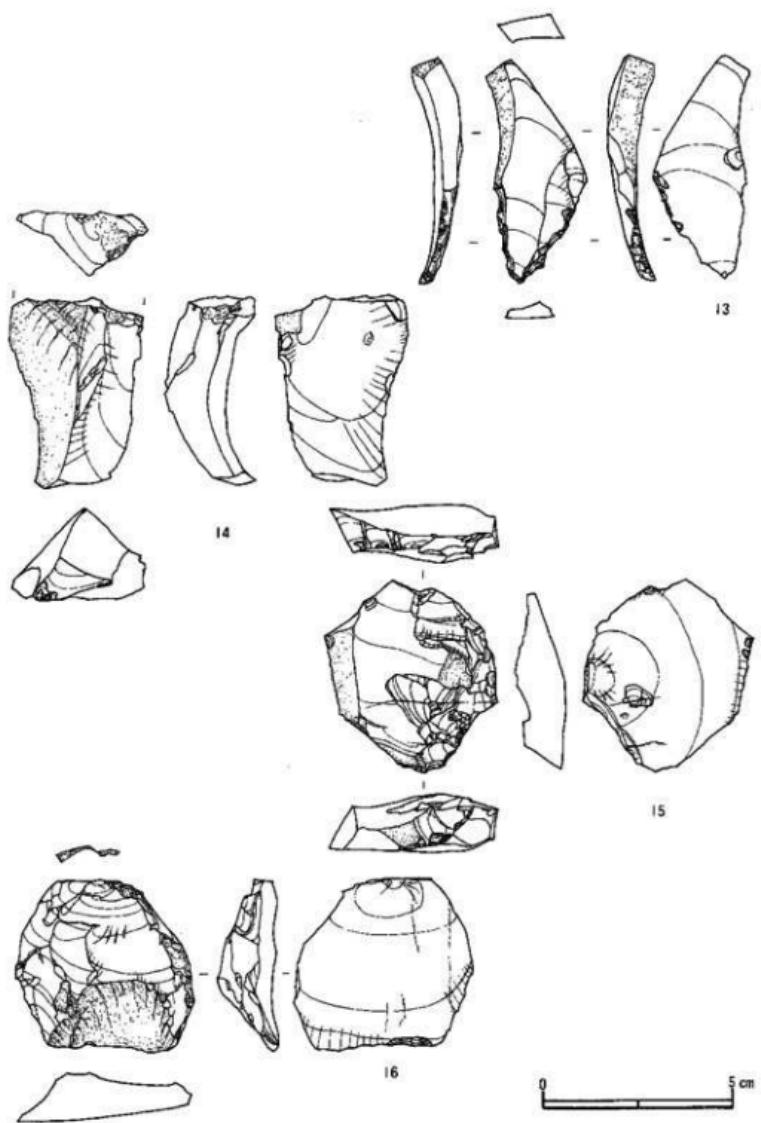
第5図 先土器時代の遺物(1) (2/3)



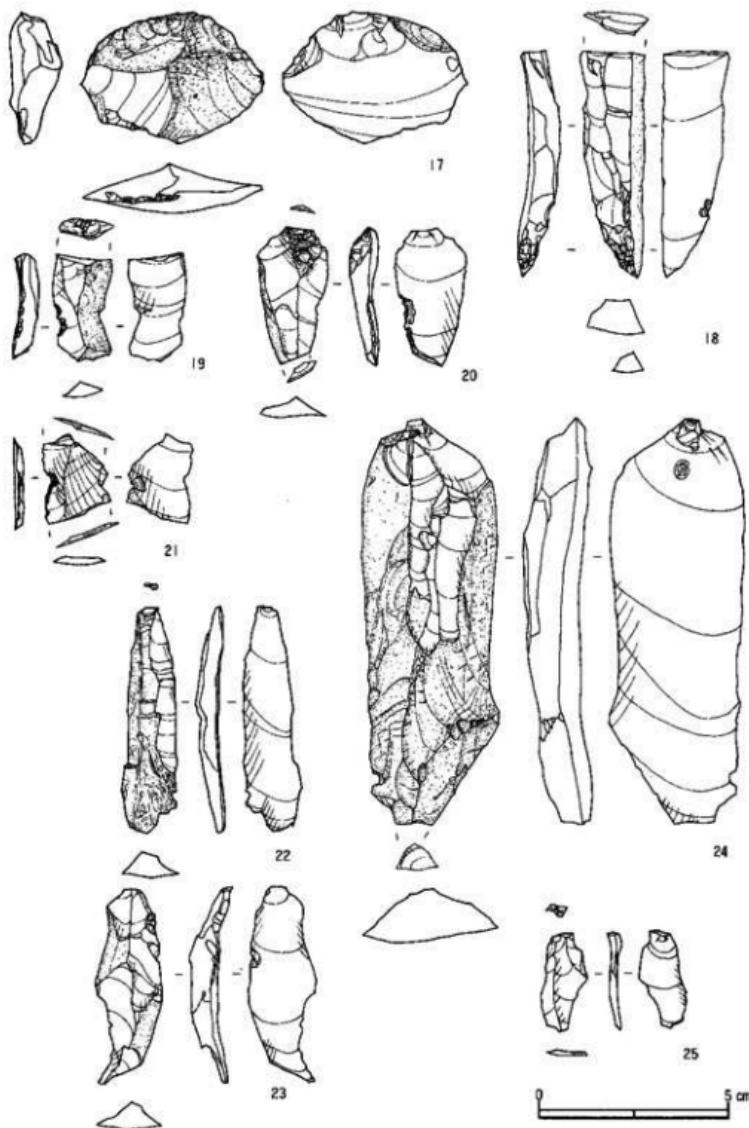
第6図 先土器時代の遺物(2) (2/3)



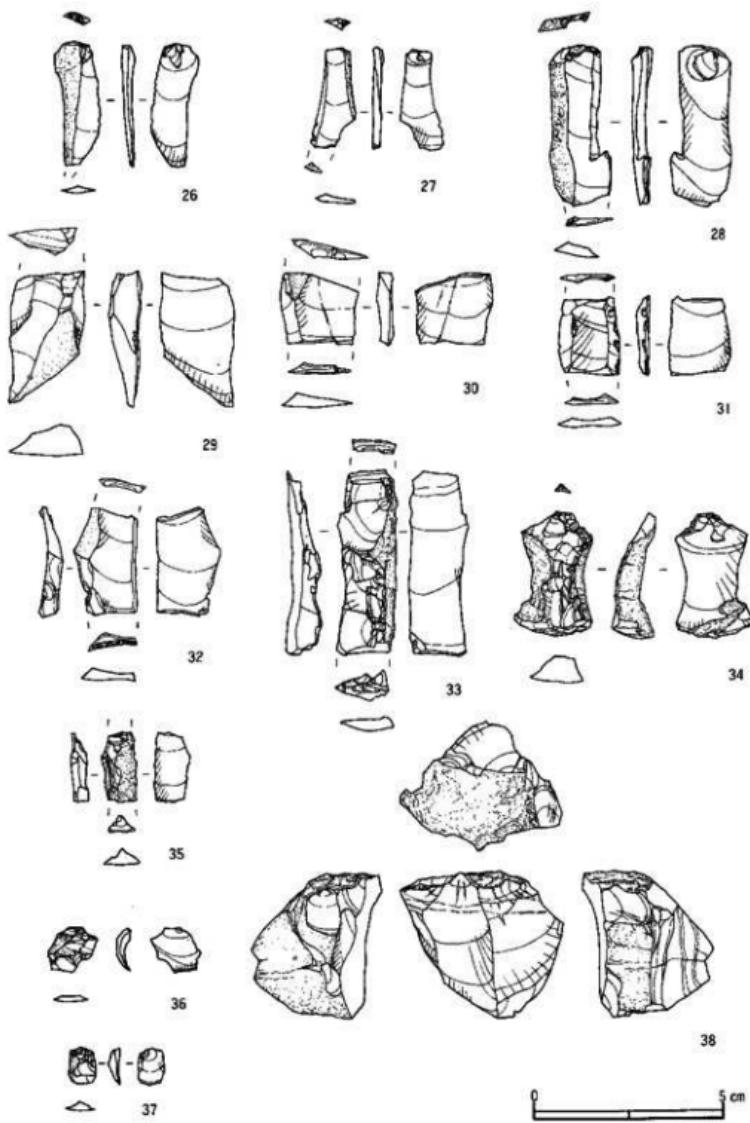
第7図 先土器時代の遺物(3) (2/3)



第8図 先土器時代の遺物(4) (2/3)



第9図 先土器時代の遺物(5) (2/3)



第10図 先土器時代の遺物(6) (2/3)

接合資料IIIは、石核と、石核の打面を作りだす際に打ち剥がされた剥片が接合した資料である。この石核は、打面を作りだした後、この打面からの剥片剥離を行なうことなく、第6図8の正面図左の階段状剥離を加えられたのみで廃棄されている。

接合資料Vは、比較的偏平な原石と、剥片剥離を行なった際に弾け飛んだ碎片が接合した資料である。

接合資料IV・VI(第7図)は土坑出土の剥片と接合した資料である。

以上が本遺跡で出土した接合資料であるが、接合資料IV・VIIは土坑出土の剥片との接合例であり、先上器時代に属する遺物か否か不明である。

第8図13は、素材剥片の打面側を截ちきるように刃剥し加工を加えたナイフ形石器である。素材剥片の刃部にあたる部分が分厚く、通常のナイフ形石器の刃部と異なっている。また、素材剥片の用いかたが、二側縁加工のナイフ形石器に類似することから、二側縁加工のナイフ形石器の製作の途中で廃棄されたものとも考えられる。

第8図14・15は搔器である。14は、大きく湾曲した剥片の先端のわずかな範囲に急斜度剥離を加えている。15は打面再生剥片を素材としている。打面再生剥片の弧状の縁辺にわずかな調整加工を加えた刃部としたものである。

第8図16、第9図17から21は、調整加工のある剥片である。第8図16、第9図17は、第8図15の搔器と素材である剥片の形状がよく似ている。とくに第8図16は15と同様に、打面再生剥片を素材として用いている。18は石核稜付き石刃の末端左側の縁辺に、主要剥離面から調整加工を加えている。20の調整加工は折れ面より新しい。19・21も折れ面をもつ剥片を素材としている。

第9図22から25、第10図26から32は剥片である。本遺跡で出土した剥片の多くは折れ面をもつが、とくに注意されるのは、剥片の上下両端に折れ面をもつものである。第10図30から34に、調整加工のある剥片である第9図21を加えた4点と数は少ないが、大きさがほぼ同じで、折れ面が左右の縁辺に直交するなどきわめてよく似ている。これら4点と同様に、左右縁辺に直交する折れ面をもち、大きさも類似する第9図19、第10図29も注意されるべき資料である。

剥片の表面に残された剥離痕の方向は、剥片剥離技術をとらえるための手がかりになる。本遺跡の剥片の表面に残された剥離痕を観察すると、剥離痕の方向が主要剥離面の剥離の方向と一致するものが、調整加工のある剥片と剥片を含めた79点中39点と多い。ほかに第5図接合資料Iを構成する剥片や第9図23、第10図29のように、剥片表面の剥離痕が、主要剥離面と反対方向を向くものが15点、接合資料II、第10図32のように主要剥離面とは直交する剥離痕をもつ剥片が19点出土している。

剥片に残る打面は、第9図22・25、第10図26から28のように、複数の剥離痕からなる複剥離打面をもつ剥片10点、第9図20・24のように自然面を打面とする剥片13点、ほかに1枚の剥離痕により打面を形成する單剥離打面をもつ剥片が1点、第5図3の打面のようにほとんど打面が残らない点打面、線打面をもつ剥片が10点出土している。

第1表 1. 見透断石器觀察表

調査区名	遺物番号	被列名	出土位置	種 別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	右側	打面	側面	番号	備 考
L	27	1	1039.85	ソフト・ローム層	剥 片	2.7	1.6	0.6	2.4	黒曜石	黒曜石面		自然面。
M-27	1	1039.95	ソフト・ローム層	調整加工剥片	2.7	1.9	0.7	3.1	黒曜石	点打面			
M-28	1	1039.88	ソフト・ローム層	剥 片	4.3	3.9	0.8	11.7	黒曜石	側打面			
M-28	2	1039.69	暗褐色土層	碎 片	1.2	1.2	0.2	0.2	黒曜石			10-36	7.2 自然面。
M-29	1	1039.70	暗褐色土層	剥 片	3.7	1.6	0.5	4.5	黒曜石	側打面			
M	29	2	1039.67	暗褐色土層	剥 片	4.5	2.6	0.8	6.3	黒曜石	側打面	5-3	6.1 梱合資料 I。
M-29	3	1039.68	ソフト・ローム層	剥 片	2.1	1.5	0.3	1.9	黒曜石			10-31	7.2 折れ。[端。木端欠。]
M-29	4	1039.59	暗褐色土層	剥 片	5.1	3.4	1.8	15.9	黒曜石			5-4	6-1 梱合資料 II。
M-29	5	1039.56	ソフト・ローム層	剥 片	2.9	1.8	0.4	4.1	黒曜石			10-32	7.2 [端。折れ。上端。木端欠。]
N-29	1	1039.77	暗褐色土層	剥 片	4.9	4.3	1.9	23.4	黒曜石				自然面。折れ。上端。木端欠。
N-29	2	1039.78	原 石	原 石	4.7	3.0	1.9	27.2	黒曜石				
N-29	3	1039.75	原 石	原 石	4.9	3.0	1.1	9.9	黒曜石				
N-29	4	1039.68	石核調工剥片	剥 片	2.6	1.9	1.0	3.5	黒曜石				
N-29	5	1039.72	暗褐色土層	剥 片	3.9	1.5	0.5	2.6	黒曜石			7-12	6.2 梱合資料 VI。自然面。
N-29	6	1039.62	暗褐色土層	原 石	6.4	2.3	1.8	24.4	黒曜石				
N-29	7	1039.65	ソフト・ローム層	石 核	3.7	4.6	3.5	56.6	黒曜石			6-8	6-1 梱合資料 III。
N-29	8	1039.51	ソフト・ローム層	剥 片	1.4	1.7	0.3	0.6	黒曜石	剥削磨打面			
N-29	9	1039.64	暗褐色土層	調整加工剥片	3.6	1.9	0.7	3.0	黒曜石	剥削磨打面			
N-29	10	1039.58	暗褐色土層	剥 片	1.3	1.6	0.2	0.2	黒曜石	剥削磨打面			
N-29	11	1039.54	ソフト・ローム層	剥 片	1.8	1.3	0.7	1.0	黒曜石	剥削磨打面			
N-29	12	1039.70	暗褐色土層	石 鞍	2.2	1.5	0.3	0.5	黒曜石			32-1	34.1 自然面。折れ。木端欠。
N-30	1	1039.38	ソフト・ローム層	剥 片	3.6	2.0	0.8	4.5	黒曜石			10-29	7.2 自然面。折れ。木端欠。
N-30	1	1039.63	暗褐色土層	剥 片	5.0	1.8	0.7	5.2	黒曜石				
N-30	2	1039.62	暗褐色土層	調整加工剥片	3.9	1.5	1.0	5.7	黒曜石				
N-30	3	1039.46	暗褐色土層	調整加工剥片	2.4	1.7	0.2	0.8	黒曜石			9-21	7.1 折れ。上端。木端欠。
N-30	4	1039.60	暗褐色土層	打面再生剥片	3.7	3.4	1.3	10.2	黒曜石			6-6	6-1 梱合資料 IV。自然面。折れ。木端欠。
N-30	5	1039.62	ソフト・ローム層	剥 片	3.1	1.5	0.3	0.7	黒曜石	剥削磨打面			
N-30	6	1039.52	ソフト・ローム層	剥 片	2.9	1.4	0.6	1.4	黒曜石	剥削磨打面			
N-30	7	1039.59	暗褐色土層	調整加工剥片	2.8	1.5	0.5	2.1	黒曜石			9-19	7.1 自然面。折れ。上端欠。
N-30	8	1039.57	暗褐色土層	剥 片	2.7	1.6	1.1	3.3	黒曜石	剥削磨打面			
N-30	9	1039.55	ソフト・ローム層	調整加工剥片	2.7	2.5	0.7	2.7	黒曜石	側打面			
N-30	10	1039.51	ソフト・ローム層	剥 片	3.1	2.8	0.7	2.9	黒曜石	側打面			
N-30	11	1039.57	ソフト・ローム層	剥 片	1.9	2.0	0.7	2.5	黒曜石				
N-30	12	1039.58	暗褐色土層	剥 片	3.0	1.8	0.4	1.7	黒曜石	側打面			
N-30	13	1039.47	ソフト・ローム層	剥 片	1.6	1.5	0.2	0.3	黒曜石	剥削磨打面			
N-30	14	1039.49	暗褐色土層	剥 片	3.3	1.2	0.3	0.7	黒曜石	剥削磨打面			
												10-26	7.2 自然面。

調査区名	遺物番号	地対高(m)	出土解説	種別	長さ( cm )	幅( cm )	厚さ( mm )	重さ( g )	剖面	打削の形態	番号	図版	備考
N-30	15	1039.52	ソフト・ローム層	剥片	4.2	1.6	0.4	2.7	黒曜石	碌打面	10-28	7-2	自然面。折れ。木端欠。折れ加工面に調整加工面が1枚見られる。
N-30	16	1039.45	暗褐色土質	剥離加工片	3.2	0.9	0.3	0.8	黒曜石	碌打面	9-22	7-1	自然面。折れ。木端欠。
N-30	17	1039.45	ソフト・ローム層	剥片	5.9	1.5	0.6	4.2	黒曜石	碌打面	10-33	7-2	自然面。折れ。上端。木端欠。
N-30	18	1039.57	ソフト・ローム層	石核剥離片	4.8	1.6	0.8	4.9	黒曜石	碌打面	8-13	7-1	自然面。未端へ折れ。自然面。折れ。木端欠。
N-30	19	1039.55	ソフト・ローム層	剥片	2.9	2.2	0.5	2.9	黒曜石	碌打面	8-13	7-1	自然面。未端の打点部に調整加工面。
N-30	20	1039.46	ソフト・ローム層	ナイフ形石器	5.9	2.5	0.8	9.2	黒曜石	碌打面	8-13	7-1	自然面。未端へ折れ。
N-30	21	1039.42	ソフト・ローム層	剥片	4.7	0.9	0.6	6.6	黒曜石	碌打面	8-13	7-1	自然面。折れ。木端欠。
N-30	22	1039.55	ソフト・ローム層	砂片	0.7	0.6	0.1	0.1	黒曜石	碌打面	8-13	7-1	自然面。未端不規則な木端。
N-30	23	1039.48	ソフト・ローム層	鉢片	0.4	0.9	0.1	0.1	黒曜石	碌打面	8-13	7-1	自然面。未端加工面と木端。
N-30	24	1039.42	ソフト・ローム層	剥片	2.4	1.6	0.3	0.9	黒曜石	碌打面	8-13	7-1	自然面。木端欠。
N-30	25	1039.44	ソフト・ローム層	剥片	2.6	2.4	0.8	3.2	黒曜石	碌打面	8-13	7-1	自然面。
N-30	26	1039.34	ソフト・ローム層	剥片	3.9	1.2	0.6	2.5	黒曜石	碌打面	8-13	7-1	自然面。折れ。木端欠。
N-30	27	1039.42	ソフト・ローム層	石核剥離片	1.9	3.0	0.9	4.2	黒曜石	碌打面	8-13	7-1	自然面。
N-30	28	1039.40	ソフト・ローム層	剥片	3.6	2.2	0.4	0.7	黒曜石	碌打面	8-13	7-1	自然面。
N-30	29	1039.25	ソフト・ローム層	砂片	1.4	2.1	0.3	0.3	黒曜石	碌打面	10-37	7-2	自然面。
N-30	30	1039.42	ソフト・ローム層	砂片	1.0	0.7	0.2	0.1	黒曜石	碌打面	10-37	7-2	自然面。木端へ折れ。
O-30	1	1039.46	ソフト・ローム層	剥片	2.1	1.8	0.5	1.4	黒曜石	碌打面	8-15	7-1	自然面。未端欠。
M-31	1	1039.36	ソフト・ローム層	剥片	4.6	3.3	0.8	6.2	黒曜石	碌打面	6-2	接合音孔V。	自然面。未端欠。
M-31	2	1039.37	ソフト・ローム層	剥片	1.9	1.2	0.3	0.8	黒曜石	碌打面	8-15	7-1	自然面。未端へ折れ。
M-31	3	1039.36	ソフト・ローム層	石核剥離片	2.0	1.3	0.8	0.9	黒曜石	碌打面	8-15	7-1	自然面。打削面は不明。接合音孔V。自然面。未端へ折れ。
M-31	4	1039.25	ソフト・ローム層	剥片	6.2	2.4	0.7	7.7	黒曜石	碌打面	8-15	7-1	自然面。打削面は不明。接合音孔V。自然面。未端へ折れ。
N-31	1	1039.50	層界	砂片	4.6	5.2	1.4	23.9	黒曜石	碌打面	8-15	7-1	自然面。打削面は不明。接合音孔V。自然面。未端へ折れ。
N-31	2	1039.50	石核	砂片	4.5	2.1	5.1	64.7	黒曜石	碌打面	8-15	7-1	自然面。打削面は不明。接合音孔V。自然面。未端へ折れ。
N-31	3	1039.51	石核	砂片	2.5	1.7	0.3	1.0	黒曜石	碌打面	8-15	7-1	自然面。打削面は不明。接合音孔V。自然面。未端へ折れ。
N-31	4	1039.44	石核	砂片	4.3	2.3	0.8	6.1	黒曜石	碌打面	8-15	7-1	自然面。打削面は不明。接合音孔V。自然面。未端へ折れ。
N-31	5	1039.45	砂片	1.8	1.1	0.5	1.6	黒曜石	碌打面	8-15	7-1	自然面。打削面は不明。接合音孔V。自然面。未端へ折れ。	
N-31	6	1039.39	暗褐色土層	砂片	5.4	1.9	1.2	8.5	黒曜石	碌打面	8-15	7-1	自然面。打削面は不明。接合音孔V。自然面。未端へ折れ。
N-31	7	1039.48	暗褐色土質	砂片	5.4	3.4	2.0	25.9	黒曜石	碌打面	8-15	7-1	自然面。打削面は不明。接合音孔V。自然面。未端へ折れ。
N-31	8	1039.37	暗褐色土質	砂片	1.6	1.6	0.6	1.1	黒曜石	碌打面	6-2	接合音孔V。	自然面。未端へ折れ。
N-31	9	1039.33	ソフト・ローム層	剥片	2.7	1.0	0.2	0.5	黒曜石	碌打面	10-27	7-2	自然面。未端欠。
N-31	10	1039.34	暗褐色土層	剥片	2.0	1.1	0.4	0.8	黒曜石	碌打面	10-27	7-2	自然面。未端欠。
N-31	11	1039.43	暗褐色土質	砂片	0.8	0.8	0.2	0.1	黒曜石	碌打面	10-27	7-2	自然面。未端欠。
N-31	12	1039.35	ソフト・ローム層	石核剥離片	1.8	2.0	0.8	0.8	黒曜石	碌打面	10-27	7-2	自然面。未端欠。
N-31	13	1039.35	ソフト・ローム層	砂片	1.7	1.1	0.4	0.4	黒曜石	碌打面	10-27	7-2	自然面。未端欠。
N-31	14	1039.29	ソフト・ローム層	剥片	1.9	2.2	0.2	0.7	黒曜石	碌打面	9-17	7-1	自然面。未端欠。
N-31	15	1039.33	暗褐色土層	剥離加工剥片	3.5	4.8	1.3	9.0	黒曜石	碌打面	9-17	7-1	自然面。未端欠。
N-31	16	1039.54	ソフト・ローム層	剥離加工剥片	—	—	—	—	—	—	—	—	自然面。未端欠。

調査区名	地名	出上耕位	種 別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石質	打面の形態	横面 番号	圓面 番号	種
N-31	17	1039.23	ソフト・ローム層	刺 片	1.6	1.2	0.3	黒曜石	—	—	自然面。折れ。上端欠。
N-31	18	1039.26	ソフト・ローム層	砂 片	0.5	1.4	0.2	0.1	黑曜石	—	自然面。折れ。上端欠。
O-31	1	1039.42	暗褐色土層	刺 片	5.0	2.7	1.1	8.0	黑曜石	—	自然面。折れ。上端欠。
O-31	2	1039.37	ソフト・ローム層	打面再生剥片	4.5	2.0	1.2	5.6	黑曜石	6-7	6-1
M-32	1	1039.36	暗褐色土層	刺 片	5.6	2.7	1.8	2.3	黑曜石	—	自然面。
M-32	2	1039.33	ソフト・ローム層	刺 片	2.0	1.3	0.4	0.6	黑曜石	5-5	6-1
M-32	3	1039.29	ソフト・ローム層	調整加工剥片	4.8	4.6	1.4	25.5	黑曜石	8-16	7-1
M-32	4	1039.29	ソフト・ローム層	砂 片	0.9	1.7	0.6	0.6	黑曜石	—	自然面。折れ。下端欠。
M-32	5	1039.27	ソフト・ローム層	刺 片	1.9	2.0	0.4	1.5	黑曜石	10-30	7-2
M-32	7	1039.29	暗褐色土層	刺 片	2.8	1.7	0.7	2.9	黑曜石	—	自然面。
M-32	8	1039.27	暗褐色土層	縫 箍	6.0	3.5	1.4	21.7	黑曜石	8-14	7-1
N-32	1	1039.37	—	刺 片	4.4	2.4	0.9	5.5	黑曜石	7-9	6-2
N-32	2	1039.41	—	石核調整剥片	3.3	2.0	1.0	4.2	黑曜石	—	自然面。折れ。上端欠。
N-32	3	1039.35	暗褐色土層	刺 片	2.2	1.3	0.3	0.6	黑曜石	—	自然面。折れ。上端欠。
N-32	4	1039.32	暗褐色土層	石 核	3.8	4.4	3.0	42.1	黑曜石	10-38	7-2
N-32	5	1039.29	ソフト・ローム層	刺 片	1.6	0.7	0.2	黑曜石	—	自然面。折れ。上端。末端欠。	
N-32	6	1039.25	ソフト・ローム層	刺 片	2.7	1.2	0.3	0.4	黑曜石	—	打面に自然面が残っている。
O-32	1	1039.25	ソフト・ローム層	刺 片	4.8	1.8	0.8	8.2	黑曜石	—	自然面。折れ。上端欠。
L-33	1	1039.22	暗褐色土層	調整加工剥片	5.1	1.7	0.8	7.9	黑曜石	9-18	7-1
M-33	1	1039.29	暗褐色土層	刺 片	2.1	1.2	0.3	0.5	黑曜石	—	自然面。折れ。上端。末端欠。
M-33	2	1039.27	暗褐色土層	刺 片	5.1	1.7	0.5	1.5	黑曜石	—	自然面。折れ。上端欠。
N-33	1	1039.34	—	調整加工剥片	2.6	3.6	1.2	9.4	黑曜石	—	自然面。
N-33	2	1039.33	—	刺 片	5.2	1.8	0.8	4.3	黑曜石	9-23	7-2
N-33	3	1039.24	暗褐色土層	刺 片	1.3	2.1	0.2	0.3	黑曜石	—	自然面。折れ。上端欠。
N-33	4	1039.30	暗褐色土層	刺 片	4.4	1.9	0.4	2.5	黑曜石	—	自然面。折れ。上端欠。
N-33	5	1039.27	暗褐色土層	刺 片	3.0	2.1	0.4	1.7	黑曜石	—	自然面。折れ。上端欠。
N-33	6	1039.25	暗褐色土層	刺 片	3.6	3.0	0.9	6.0	黑曜石	—	自然面。折れ。下端R <sub>1</sub> 。
M-35	1	1039.60	暗褐色土層	刺 片	5.1	1.5	0.4	1.5	黑曜石	—	自然面。
M-35	2	1039.02	暗褐色土層	刺 片	2.8	1.9	0.4	1.7	黑曜石	—	自然面。
M-35	3	1038.69	ソフト・ローム層	刺 片	2.0	2.4	0.3	1.2	黑曜石	—	自然面。上端欠。
N-35	1	1039.13	暗褐色土層	刺 片	11.8	2.6	1.5	56.8	黑曜石	9-24	7-2
N-35	3	1038.68	ソフト・ローム層	刺 片	4.1	5.1	1.1	19.3	黑曜石	—	自然面。折れ。上端欠。
N-36	1	1038.82	ソフト・ローム層	刺 片	2.6	0.8	0.3	0.5	黑曜石	—	自然面。折れ。上端欠。
J-18	—	—	—	刺 片	2.7	3.1	0.5	3.2	黑曜石	—	2分十坑。自然面。
J-18	—	—	—	刺 片	1.5	2.2	0.4	1.2	黑曜石	—	2分上坑。自然面。
J-18	—	—	—	刺 片	2.3	1.5	0.5	1.5	黑曜石	—	2分十坑。自然面。

断面区名	遺物 番号	absolute height (m)	出土層位	種 類	長さ (cm)	幅 (cm)	電さ 場 (cm)	電さ 場 (cm)	石突 頭	打面の影響	指図 番号	地盤 番号
J-18			銅 片	鋸 片	1.7	1.1	0.5	0.9	黒曜石	黒曜石打面	2号上坑。	自然面。
B-19-20			銅 片	鋸 片	4.6	2.7	1.0	0.9	黒曜石	黒曜石打面	3号上坑。	自然面。
B-24			銅 片	鋸 片	1.6	3.6	0.4	1.1	黒曜石	黒曜石打面	4号上坑。	自然面。
G-25			銅 片	鋸 片	2.2	3.4	0.6	3.2	黒曜石	黒曜石打面	12号土坑。	
G-25			砂 片	鋸 片	1.6	1.2	0.1	0.3	黒曜石		12号土坑。折れ。上端大。	
G-H-25-26			銅 片	鋸 片	1.4	1.6	0.7	1.4	黒曜石	黒曜石打面	14号上坑。	自然面。折れ。上端、末端欠。
M-N-25-26			銅 片	鋸 片	2.5	2.0	0.4	1.2	黒曜石	黒曜石打面	15号上坑。	自然面。未端欠。
M-N-25-26			砂 片	鋸 片	1.3	1.7	0.3	0.5	黒曜石		15号土坑。	自然面。
M-N-25-26			砂 片	鋸 片	2.0	0.6	0.5	0.5	黒曜石		15号上坑。	自然面。折れ。上端、末端欠。
H-24-25			銅 片	鋸 片	5.1	1.4	0.6	4.5	黒曜石	黒曜石打面	18号上坑。	自然面。自然面。
H-24-25			銅 片	鋸 片	3.2	2.0	0.5	2.2	黒曜石	黒曜石打面	18号土坑。	
H-24-25			銅 片	鋸 片	1.7	2.6	0.9	3.8	黒曜石		18号上坑。	自然面。
H-24-25			砂 片	鋸 片	1.9	0.8	0.3	0.8	黒曜石		18号上坑。	自然面。
J-27			銅 片	鋸 片	2.2	3.2	0.4	1.2	黒曜石	黒曜石打面	23号上坑。	自然面。
I-J-30			銅 片	鋸 片	2.4	3.3	1.1	5.0	黒曜石	黒曜石打面	29号土坑。	自然面。
I-J-30			銅 片	鋸 片	1.0	2.7	0.5	1.0	黒曜石	黒曜石打面	29号土坑。	自然面。
I-J-30			銅 片	鋸 片	1.6	2.4	0.5	1.2	黒曜石	黒曜石打面	29号土坑。	自然面。
I-J-30			銅 片	鋸 片	1.7	2.3	0.8	1.6	黒曜石	黒曜石打面	29号土坑。	自然面。
I-J-30			圓 石	鋸 片	10.9	8.9	3.9	8.0	安山岩		32-8	34-2
N-29			黑 石	鋸 片	6.9	2.6	1.4	19.2	黒曜石		35号土坑。	自然面。
N-29			原 石	鋸 片	2.1	4.4	1.5	15.2	黒曜石		35号土坑。	自然面。
N-29			原 石	鋸 片	3.9	4.5	1.6	19.0	黒曜石		35号土坑。	自然面。
N-29			原 石	鋸 片	3.6	3.8	1.6	15.1	黒曜石		35号土坑。	自然面。
N-29			飼 片	鋸 片	2.1	2.1	0.7	2.4	黒曜石		35号土坑。	自然面。
N-29			原 石	鋸 片	2.2	1.3	0.5	1.6	黒曜石		35号土坑。	自然面。
N-29			石 鉋	鋸 片	2.5	1.6	0.3	0.8	黒曜石		35号土坑。	自然面。
N-29			砂 片	鋸 片	9.5	8.9	3.7	5.6	安山岩		35号土坑。	自然面。
N-29	1	1039.22	砂 片	鋸 片	3.9	2.8	0.9	7.7	黒曜石	黒曜石打面	35号土坑。	自然面。
N-29	2	1039.72	原 石	鋸 片	3.0	1.8	1.2	5.4	黒曜石		35号土坑。	自然面。
N-29	3	1039.70	銅 片	鋸 片	5.9	2.2	0.8	7.2	黒曜石		35号土坑。	自然面。
N-29	4	1039.67	銅 片	鋸 片	4.8	2.0	0.5	4.7	黒曜石		35号土坑。	自然面。
M-32			銅 片	鋸 片	4.5	2.3	1.1	8.5	黒曜石	黒曜石打面	40号上坑。	自然面。
K-L-33			銅 片	鋸 片	2.0	1.2	0.2	0.7	黒曜石	黒曜石打面	42号土坑。	自然面。折れ。たて折れ。
N-O-34-35			銅 片	鋸 片	4.1	1.9	0.5	3.3	黒曜石		47号土坑。	自然面。折れ。
N-O-34-35			銅 片	鋸 片	3.7	1.5	0.8	4.5	黒曜石		47号土坑。	自然面。
N-O-34-35			石 鉋	鋸 片	4.7	3.8	1.8	19.4	黒曜石		47号土坑。	自然面。
K-L-35			銅 片	鋸 片	3.0	1.4	0.4	1.8	黒曜石		48号土坑。	自然面。折れ。

調査区名	遺物番号	絶対高(m)	出土層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石質 (R)	打面の形態 (R)	標識番号	回数 番号
K-36-37			36 片	剥片	2.0	3.0	0.9	3.1 黒曜石	縦打面	49号上块。自然面。折れ。上端欠。	49-1
K-36-37			剥片	2.4	1.8	0.4	2.1 黒曜石	縦打面	49号土塊。自然面。折れ。上端欠。	49-2	
K-36-37			剥片	2.5	2.4	0.6	2.7 黒曜石	縦打面	49号土塊。自然面。折れ。未端欠。	49-3	
K-36-37			剥片	2.0	2.9	0.2	0.9 黒曜石	縦打面	49号土塊。自然面。折れ。未端欠。	49-4	
K-36-37			剥片	2.1	2.4	0.7	1.9 黒曜石	縦打面	49号土塊。自然面。折れ。未端欠。	49-5	
K-36-37			剥片	1.9	1.8	0.6	1.1 黒曜石	縦打面	49号土塊。自然面。折れ。未端欠。	49-6	
K-36-37			剥片	3.5	1.2	0.9	1.7 黒曜石	縦打面	49号土塊。自然面。折れ。未端欠。	49-7	
K-36-37			剥片	2.1	1.7	0.5	0.9 黒曜石	縦打面	49号土塊。自然面。未端欠。	49-8	
H-1-49-50			磨製石斧	5.9	2.5	1.0	23.6 鹿致岩	縦打面	22-6	34-1	
H 42			剥片	1.7	2.9	1.0	3.2 黒曜石	縦打面	64号上塊。自然面。	64-1	
D 26-27			石核	3.4	2.8	1.4	11.5 黒曜石	縦打面	4号ローム・マウンド。自然面。	4-1	
N-O-34			剥片	2.9	2.8	1.2	7.8 黒曜石	縦打面	2号トレンチ表面採集。自然面。	2-1	
			剥片	3.5	4.1	0.8	8.9 黒曜石	縦打面	Aトレンチ表面採集。自然面。	A-1	
			剥片	2.7	2.6	1.4	9.3 黒曜石	縦打面	Aトレンチ表面採集。自然面。	A-2	
			剥片	1.9	2.2	0.5	1.1 黒曜石	縦打面	Aトレンチ表面採集。折れ。上端欠。	A-3	
			剥片	1.5	1.6	0.3	0.6 黒曜石	縦打面	Aトレンチ表面採集。自然面。未端欠。	A-4	
			石核	1.5	0.9	0.2	0.2 黒曜石	縦打面	Aトレンチ表面採集。自然面。	A-5	
			剥片	3.1	4.4	1.2	18.4 黒曜石	縦打面	5-1 6-2 梱合資料 I。A-Bトレンチ表面採集。自然面。	5-1 6-2	
			剥片	3.7	1.0	0.4	0.8 黒曜石	点打面	A-Bトレンチ表面採集。自然面。	A-B-1	
			剥片	4.7	2.8	1.5	18.7 黒曜石	点打面	32-4	34-1 Eトレンチ表面採集。自然面。	
			剥片	2.6	2.0	0.6	2.5 黒曜石	点打面	Eトレンチ表面採集。自然面。	E-1	
			原石	3.8	4.0	1.5	26.9 黒曜石	表面採集。	表面採集。自然面。		
			石核	3.8	2.5	1.6	14.7 黒曜石	表面採集。	表面採集。自然面。		
			剥片	2.7	3.6	1.4	8.6 黒曜石	縦打面	表面採集。自然面。		
			剥片	3.5	3.2	0.8	3.6 黒曜石	縦打面	表面採集。自然面。折れ。未端欠。		
			剥片	2.1	3.3	1.0	3.9 黒曜石	点打面	表面採集。自然面。折れ。未端欠。		
			剥片	2.2	2.5	0.3	1.6 黒曜石	点打面	表面採集。自然面。折れ。未端欠。		
			剥片	1.3	2.5	0.5	1.0 黒曜石	表面採集。	表面採集。自然面。		
			剥片	2.8	1.2	0.7	1.5 黒曜石	表面採集。	表面採集。自然面。		
			剥片	1.4	1.4	0.2	0.3 黒曜石	縦打面	表面採集。自然面。折れ。未端欠。		
			剥片	1.6	0.9	0.1	0.2 黒曜石	点打面	表面採集。折れ。未端欠。		
			砂片	1.0	0.9	0.5	0.3 黒曜石	表面採集。	表面採集。自然面。		
			剥片	0.9	1.6	0.3	0.2 黒曜石	表面採集。	表面採集。自然面。		
			石器	1.8	1.6	0.3	0.6 黒曜石	表面採集。	表面採集。自然面。		
			打製石斧	8.6	6.5	1.6	89.8 安山岩	表面採集。	表面採集。未端欠損。	32-7	
			打製石斧	8.6	6.5	1.6	89.8 安山岩	表面採集。	表面採集。未端欠損。	34-1	

第9図24は、本遺跡の剥片のなかで最大のものである。打面は自然面できわめて小さい。第10図33から35は、石核から剥片剥離を行なうまえに、石核自体の形を整えるための調整加工により生じた石核調整剥片である。第9図18の素材も、33から35の剥片と同様に石核調整剥片であると考えられる。18は剥片剥離を行なおうとする面に稜を作りだすための加工の痕跡を残した、石核縁付き石刃であると考えられる。普通、石核縁付き石刃の表面に残される剥離痕は、稜上から左右にむかう交互剥離であるが、18の表面に剥片剥離を行なった痕跡が残っていることから、石核縁付き石刃であると判断した。33から35は、表面に残る剥離痕の構成が18と類似するが、剥片剥離による剥離痕がみられず、表面の剥離痕が剥片や石核の打面の調整加工痕と類似することから、第8図15・16とはほぼ同様に、石核の打面を新しくする際に生ずる石核縁付き剥片であると考えられる。

第10図36・37は碎片である。

38は石核である。正面と左側面には、石核上面の自然面を打面とした剥片剥離の痕跡が残っている。また、右側面には90度左からの剥離痕が残されており、打面の移動の様子を知ることが出来る。

## 第2節 繩文時代

本遺跡で検出された遺構には土坑、ロームマウンドがある。また、遺物には繩文土器の他、石器などがある。

遺物は総て土坑、あるいは遺構外の出土で、殆どが破片である。出土した繩文土器の総てが、中期初頭に位置付けられるものである。以下、遺構別に述べる。

### (I) 土 坑

土坑は65基が検出されている。これ以外にも、調査時、あるいは整理期間中に各土坑に他の土坑が重複しているのではないかと考えられるものも幾つか見られるが、遺物の出土も無いため土坑として扱わず、各土坑の記述時に、合せてその可能性を述べている。

#### 土坑の平面形態と断面形態

土坑の平面形態には円形、楕円形、隅丸方形などがありそれ以外を不定形とした。断面形は皿状、たらい状、鉢状などがある。これらの土坑は、平面形態によって組合せとなる断面形が決っているようで、形態・構造及び規模などにより、分類できる。それぞれの土坑は用途によりある程度形態が規制されていたことが窺える。なお、各土坑の遺構確認面は、ローム漸移層上面である。

以下、各土坑について述べる。挿図の順番は、必ずしも土坑番号順になっていないが、これはまとめの項で述べる分類によっている。

なお、土坑一覧表中、軸方向については、陥れ穴と考えられるI類土坑のように長軸・短軸が

はっきりしているものについて長軸方向を記し、平面形態が円形または橢円形のものについては省略した。

#### 1号土坑（第25図）

H-8区に位置する。平面形態は橢円形を呈し、長径97cm、短径82cmを測る。底面形態は不整形で長径80cm、短径50cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ25cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 2号土坑（第12図、図版8-1）

J-18区に位置する。平面形態は橢円形を呈し、長径185cm、短径130cmを測る。底面形態は隅丸長方形を呈し、長径110cm、短径60cmを測る。断面形態は鉢状を呈し、深さ70cmを測る。長軸方向はN-48°-Eを指す。坑底に3個の小ピットが検出されたが、精査の結果、中央部分のロームは貼られたもので、径28×13cm、深さ43cmのピットとなった。形態から陥れ穴と考えられる。遺物は、土器・黒曜石が出土している。

#### 3号土坑（第25図）

B-19・20区に位置する。平面形態は橢円形を呈し、長径127cm、短径103cmを測る。底面形態は橢円形を呈し、長径67cm、短径49cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ45cmを測る。上層の焼土内から土器片、焼土下の土層から縄文時代中期初頭の波状口縁破片・黒曜石が出土している。焼土は中央から両方に堆積している。

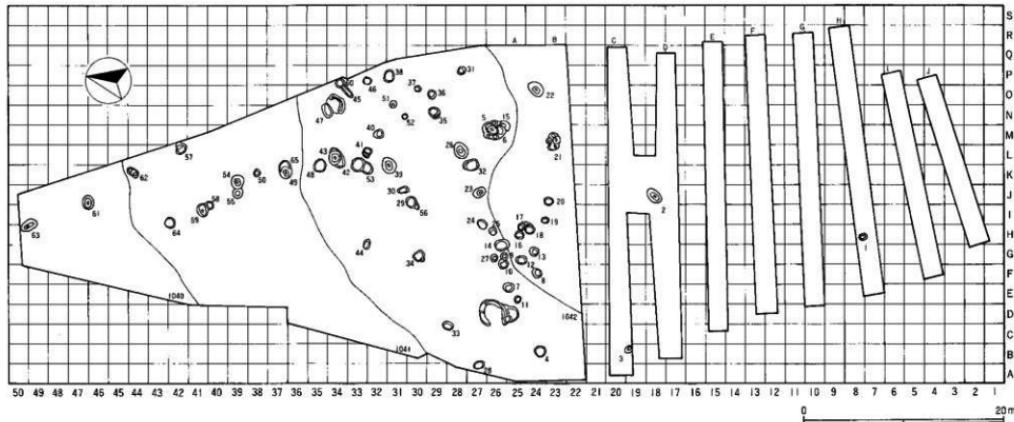
遺物 1は口縁部から胴部下半にかけてのもので、約1/5が遺存している。土坑上層の焼土内からの出土である。地文に縄文を施している。口縁部から5cmほどまでのところに右下がりの集合沈線を施した後、口縁部、その下2cmのところ、さらにその下1~1.5cmのところに横位の平行沈線を2条ずつ引いている。その後窓により斜交する沈線を施している。胴部は半截竹管による平行沈線で円を描く他、渦巻き文、劍先状文、蛇行しながら華下する平行沈線文も描かれている。5は波状となる口縁部で、地文に縄文を施した後、粘土紐の貼付けにより橢円の区画を施している。6は口縁に近い胴部破片で、5と同じく粘土紐の貼付けにより橢円の区画を施している。7は胴部破片で、横位の集合沈線を施しているが、1~2cmの間隔で竹管を止めるように描いているため、竹の節の様に見える。8は頸部から口縁部にかけての破片で、最も張り出しているところに横位の平行沈線を施している。その下は斜位に集合沈線を施している。

#### 4号土坑（第18図、図版13-1）

B-24区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径116cm、短径110cmを測る。底面形態も円形を呈し、長径93cm、短径90cmを測る。断面形態はタライ状を呈し、深さ50cmを測る。遺物は、黒曜石が出土している。また、覆土の上層に径25cmの砾が含まれていた。

#### 5号土坑（第12図、図版8-2）

M-26区に位置する。平面形態は周辺を幾つかの土坑が重複しているため明らかでないが、隅丸長方形を呈するものと思われる。現存での長径123cm、短径75cmを測る。底面形態も隅丸長方形



第11図 遺構分布図 (1/400)

を呈し、長径93cm、短径63cmを測る。断面形態は鉢状を呈し、深さ80cmを測る。長軸方向はN-E-36°-Eを指す。坑底に径26×20cm、深さ48cmのピットを有し、陥れ穴と考えられる。15号土坑と重複するが、新旧関係は不明。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片を出土している。

遺物 9は胴部破片で、縄文が施されている。

#### 6号土坑（第12図、図版8-2）

M-26区に位置する。他の土坑との重複が激しく、平面形態、底面形態とも不明である。深さは44cmを測る。5・15号土坑と重複するが、新旧関係は不明。遺物の出土はなかった。

#### 7号土坑（第18図、図版13-2）

E・F-25・26区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径102cm、短径93cmを測る。底面形態は楕円形を呈し、長径82cm、短径70cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ30cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 8号土坑（第23図、図版20-2）

F-24区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径93cm、短径81cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径70cm、短径60cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ24cmを測る。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片を出土している。

遺物 10は胴部破片で、縄文が施されている。11は口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部は地文に縄文を施した後、ソーメン状の細い粘土紐の貼付けを縦位に施している。口縁部と頸部の境に横位の平行沈線を2条施した後横位の綫杉文を施している。頸部以下は縄文は施されない。12は胴部破片で縄文が施されている。13は胴部破片で、横位の平行沈線の下は斜位の集合沈線が施されている。

#### 9号土坑（第22図、図版14-1）

G-25・26区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径81cm、短径65cmを呈する。底面形態は円形を呈し、長径50cm、短径47cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ22cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 10号土坑（第22図、図版14-1）

F・G-25・26区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径102cm、短径100cmを測る。底面形態も円形を呈し、長径67cm、短径64cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ26cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 11号土坑（第21図、図版17-2）

E-24区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径78cm、短径73cmを測る。底面形態も円形を呈し、長径56cm、短径50cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ24cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 12号土坑（第18図、図版13-3）

G-25区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径103cm、短径88cmを測る。底面形態も楕円

形を呈し、長径80cm、短径70cmを測る。断面形態はタライ状を呈し、深さ38cmを測る。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片・黒曜石を出土している。

遺物 14は胴部破片で、地文に縄文を施した後、横位の平行沈線、横位の粘土紐の貼付けで押圧隆帯を施している。15・16・19は胴部破片で、縄文が施されている。17は胴部破片で、横位の平行沈線の下に横位の綾杉文を施している。18・20は胴部破片で、縦位の集合沈線が施されている。

#### 13号土坑（第23図、図版20-3）

G-25区に位置する。平面形態は梢円形を呈し、長径95cm、短径88cmを測る。底面形態も梢円形を呈し、長径58cm、短径50cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ24cmを測る。底面の凹凸が激しく、擾乱の可能性もある。

遺物 21は胴部破片で、半截竹管により縦位の綾杉文が施されている。綾杉の三角形部分は浅く擦で取られ、陰刻状となっている。

#### 14号土坑（第18図、図版14-1・2）

G・H-25・26区に位置する。平面形態は梢円形を呈し、長径145cm、短径122cmを測る。底面形態も梢円形を呈し、長径110cm、短径88cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ27cmを測る。遺物は、縄文時代中期初頭の土器大片・黒曜石を出土している。

遺物 2は胴部破片で、縄文が施されている。

#### 15号土坑（第12図、図版8-2）

M・N-25・26区に位置する。他の土坑と重複しており、形態・規模・深さはともに不明である。6号土坑と重複しているが、新旧関係は不明。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片・黒曜石を出土している。

遺物 22は胴部破片で、横位の集合沈線が施されている。23・24は胴部破片で、横位の綾杉文が施されている。25は口縁部で、横位の綾杉文が施されている。

#### 16号土坑（第18図、図版14-3）

H-25区に位置する。平面形態は梢円形を呈し、長径82cm、短径80cmを測る。底面形態も梢円形を呈し、長径63cm、短径57cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ25cmを測る。17号土坑と切り合うが、新旧関係は不明。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片を出土している。

遺物 26は口縁部で、横位の平行沈線が施されている。

#### 17号土坑（第18図、図版14-3）

H-25区に位置する。平面形態は梢円形を呈し、長径73cm、短径67cmを測る。底面形態も梢円形を呈し、長径50cm、短径48cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ17cmを測る。16号土坑と切り合うが、新旧関係は不明。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片が出土している。

遺物 27は胴部破片で、縦位の集合沈線の他、曲線が描かれている。

#### 18号土坑（第18図、図版14-3）

H-24・25区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径100cm、短径87cmを測る。底面形態も円形を呈し、長径88cm、短径80cmを測る。断面形態はタライ状を呈し、深さ50cmを測る。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片・黒曜石を出土している。17号土坑と切り合うが、新旧関係は不明。底面直上から5cm大の焼土ブロックが確認されるが、床面や壁は焼けていない。

遺物 29-30は胴部破片で、縄文が施されている。31は口縁部で、粘土紐の貼付けを行なっている。頸部に横位の平行沈線を引く他、刺突を施している。32-34は胴部破片で、斜位に集合沈線を施した後、横位に平行沈線を施している。35は胴部破片で、縦位に施した1条の平行沈線の間に斜位の集合沈線を施している。その外側は縦位の鋸歯状の竹管文が施されている。36は胴部破片で、平行沈線で区画された中を、縦位の集合沈線を施している。37は波状となる口縁部で、平行沈線で区画された中を斜位に集合沈線を施した後、斜交する平行沈線を浅く引いている。口縁に沿って引かれた平行沈線と区画との間は浅く撫で取られ、陰刻状となっている。38は胴部で、縦位の綾杉文が施されている。39は胴部で、横位の平行沈線の下は横位の綾杉文を施している。40は胴部で、横位の綾杉文が施されている。41・43は胴部で、横位の平行沈線の下は、縦位の集合沈線が施されている。42は胴部で、縦位の集合沈線の下は、横位の平行沈線が施されている。44は底部で、縦位の集合沈線が施されている。45は胴部で、横位に平行沈線を引き、半隆起状をしている。46は胴部で、斜位に集合沈線を施した後、横位に平行沈線を半隆起状に引いている。

#### 19号土坑（第23図、図版21-1）

I-23・24区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径75cm、短径65cmを測る。底面形態も円形を呈し、長径58cm、短径57cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ20cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 20号土坑（第22図、図版19-2）

I・J-23・24区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径102cm、短径82cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径80cm、短径62cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ16cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 21号土坑（第25図、図22-3版）

L・M-23区に位置する。平面形態は不整形で、長径180cm、短径140cmを測る。底面形態も不整形である。断面形態も不整形で、深さ40cmを測る。5個の土坑の重複と思われる。

遺物 47は胴部で、横位の平行沈線と、横位の鋸歯状の平行沈線が施されている。48は胴部で、横位の綾杉文と斜位の集合沈線の間に横位の平行沈線を2条を施している。49は口縁部で、波状となっている。平行沈線によって区画されたところを撫で取り、陰刻状としている。斜位の集合沈線を施した後、斜交する平行沈線を浅く引いている。右側は粘土を貼付けてあり、突起となる可能性がある。

## 22号土坑（第13図、図版8-3, 9-1・2・3）

O・P-24区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径170cm、短径134cmを測る。底面形態は隅丸長方形を呈し、長径64cm、短径57cmを測る。断面形態は鉢状を呈し、深さ92cmを測る。長軸方向はN-25°-Eを指す。坑底に2個の小ピットを有したが、精査の結果、径32×21cm、深さ45cmのピットとなった。ピット上面に貼ったロームは、厚さ7cmを測る。形態から、陥れ穴と考えられる。また、坑底から約37-47cmの所に、壁面に向ってやや下向きに11個の小ピットが検出されている。ピットの径は4~9cm、長さは11~25cmを測る。遺物の出土はなかった。

## 23号土坑（第13図、図版10-1）

J-27区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径125cm、短径107cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径75cm、短径55cmを測る。断面形態は鉢状を呈し、深さ64cmを測る。長軸方向はN-63°-Wを指す。坑底に径25×20cm、深さ30cmのピットを有し、陥れ穴と考えられる。ピットを貼ったロームは検出されなかったため、小ピットの個数は明らかでない。遺物は、縄文時代中期初頭の上器片・黒曜石を出土する。

遺物 1点が出土している。50は脛部で、縦位に集合沈線が施されている。斜位にも平行沈線が施されているが、施文の順位は磨滅が激しく不明である。

## 24号土坑（第23図、図版21-2）

H・I-26・27区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径98cm、短径83cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径90cm、短径75cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ10cmを測る。遺物の出土はなかった。

## 25号土坑（第23図、図版21-2）

H-26区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径75cm、短径70cmを測る。底面形態も円形を呈し、長径56cm、短径56cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ28cmを測る。遺物の出土はなかった。

## 26号土坑（第14図、図版10-2）

L・M-27・28区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径162cm、短径133cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径100cm、短径73cmを測る。断面形態は鉢状を呈し、深さ77cmを測る。長軸方向はN-39°-Eを指す。坑底がやや盛り上がり、中央に小ピットが5個検出されたが、精査の結果、中央部分はロームを貼ってあり、径42×24cm、深さ57cmのピットとなった。形態から陥れ穴と考えられる。覆土の下部に、杭痕と考えられる痕跡が観察された。遺物の出土はなかった。

## 27号土坑（第24図、図版14-1）

G-26区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径80cm、短径70cmを測る。底面形態も円形を呈し、長径45cm、短径45cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ25cmを測る。遺物の出土はなかった。

### 28号土坑（第23図、図版19-3）

A・B-27区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径106cm、短径74cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径88cm、短径53cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ22cmを測る。遺物の出土はなかった。

### 29号土坑（第19図、図版15-1）

I・J-30区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径115cm、短径100cmを測る。底面形態は楕円形を呈し、長径95cm、短径79cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ30cmを測る。56号土坑と重複し、56号土坑が新しい。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片・凹石・黒曜石が出土している。また、覆土の中程に径10cmの礫を包含していた。

遺物 51は胴部で、縄文が施されている。52は副部破片で、横位の集合沈線が施されている。

### 30号土坑（第23図）

J-30・31区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径113cm、短径74cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径86cm、短径60cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ24cmを測る。遺物の出土はなかった。

### 31号土坑（第21図、図版17-3, 18-1）

P-28区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径78cm、短径70cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径65cm、短径57cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ25cmを測る。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片が坑底から8cmの所で出土している。

遺物 53は胴部で、結節縄文を施している。54は胴部で、縄文を施している。55は口縁部で、波状となる。成形時に口縁部から内側に折返し、口唇部に平な面を作った後、内面に貼付けて居るため中空となっている。口縁部を巡る平行沈線と、その下に施される綾杉文の間は陰刻状となっている。口唇部も集合沈線が施されている。

### 32号土坑（第19図、図版15-2）

K・L-27・28区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径153cm、短径115cmを測る。底面形態は楕円形を呈し、長径134cm、短径100cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ36cmを測る。北側に浅い土坑が重複していると思われるが、新旧関係などは不明。遺物の出土はなかった。

### 33号土坑（第25図、図版23-1）

C・D-28区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径105cm、短径80cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径85cm、短径54cmを測る。断面形態は不整形で、特に底面は凹凸が激しい。深さ27cmを測る。遺物の出土はなかった。

### 34号土坑（第23図、図版20-1）

G-34区に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、長径115cm、短径100cmを測る。底面形態も隅丸方形を呈し、長径83cm、短径81cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ28cmを測る。南西壁際に小ピットが重複している。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片が出土している。

遺物 56は胴部で、横位の平行沈線の下に縦位の綾杉文を施している。48号土坑出土の破片と接合している。

#### 35号土坑（第19図、図版15-3）

N-29区に位置する。南西に深さ30cmの別の土坑が重複していると考えられる。平面形態は楕円形を呈し、長径98cm、短径約93cmの楕円形を呈するものと思われる。底面形態は円形を呈し、長径100cm、短径70cmを測る。断面形態はタライ状を呈し、深さ44cmを測る。西側に浅い土坑が重複していると思われる。遺物は、黒曜石・凹石・石礫が出土している。

#### 36号土坑（第24図、図版21-3）

O-29区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径82cm、短径76cmを測る。底面形態は楕円形を呈し、長径66cm、短径60cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ30cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 37号土坑（第24図、図版21-3）

O-30区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径67cm、短径64cmを測る。底面形態も円形で、長径53cm、短径45cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ28cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 38号土坑（第20図、図版16-1）

P-31-32区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径134cm、短径96cmを測る。底面形態は楕円形を呈し、長径112cm、短径82cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ26cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 39号土坑（第14図、図版10-3）

K・L-31・32区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径156cm、短径146cmを測る。底面形態は隅丸長方形を呈し、長径93cm、短径67cmを測る。断面形態は鉢状を呈し、深さ82cmを測る。長軸方向はN-77°-Eを指す。坑底に小ピットが4個検出されたが、精査の結果、ロームを貼つてあり、径35×23cm、深さ61cmのピットとなった。ピットに貼ったロームの厚さは12~15cmを測る。形態から陥し穴と考えられる。遺物の出土はなかった。

#### 40号土坑（第21図、図版18-2）

M-32区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径92cm、短径82cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径65cm、短径60cmを測る。断面形態はタライ状を呈し、深さ47cmを測る。北側は崩れたものと思われるが、浅い土坑が重複していた可能性もある。新旧関係は不明。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片が坑底から12cm程の所から出土している他、黒曜石片が出土している。

遺物 3は口縁部で、約1/4が遺存している。平口縁に蛇体を表すような渦巻き状の突起がみられる。口縁部に横位の綾杉文が施され、頸部は縦位の綾杉文の間に縦位の集合沈線が施される。胴部は平行沈線によって区画を施している。文様帶は横位の平行沈線を1~2条施すことによって画されている。57は副部で、縄文が施されている。58・59は副部で、地文に縄文を施した後、

平行沈線を垂下させている。60は胴部で、地文に縄文を施した後、平行沈線を斜交させている。61は胴部で、斜位及び横位の集合沈線が施されている。また、竹管により三角形となった個所も見られるが、鋸歯状に区画した中を集合沈線を横位に引いた文様の部分であろう。62は胴部で、縦位及び斜位の集合沈線が施された後、浅い平行沈線が斜交する形で施されている。63は底部で、縦位の集合沈線が施されている。

#### 41号土坑（第21図、図版18-3）

L-32・33区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径77cm、短径71cmを測る。底面形態は楕円形を呈し、長径70cm、短径62cmを測る。断面形態は桶状を呈し、深さ51cmを測る。西側は崩れたものと思われるが、別の土坑となる可能性もある。新旧関係は不明。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片が出土している。

遺物 64は胴部で、縦位の集合沈線が施されている。

#### 42号土坑（第20図、図版16-2）

K・L-33区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径135cm、短径115cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径111cm、短径86cmを測る。断面形態はタライ状を呈し、深さ63cmを測る。53号土坑と重複し、53号土坑が新しい。遺物は、坑底から8cmの所から縄文時代中期初頭の土器片・黒曜石が出土している。

遺物 4は口縁部で、約1/8が遺存している。平口縁で突起を有する。口縁部は横位の綾杉文を施している。頸部は無文地に横位の鋸歯状文を施している。各文様帶の間は横位の平行沈線を1条施すことにより両されている。65・66は胴部で、地文に縄文を施した後、垂下する平行沈線を施している。67は胴部で、平行沈線が斜位、縦位、横位に施されている。68は口縁部で、口唇部にソーメン状の細い粘土紐を貼付けている。また、半裁竹管による結節状浮線文が横位に施されている。69は胴部で、地文に縄文が施された後、縦位に平行沈線を垂下している。70は口縁部で、無文である。中世の内耳土器の破片である。本遺跡からは唯一の中世の遺物の出土である。

#### 43号土坑（第15図、図版11-1）

K・L-34区に位置する。平面形態は他の土坑が重複しているものと思われ、不整形（楕円形）で、現存長径150cm、短径130cmを測る。底面形態は隅丸長方形で、長径80cm、短径74cmを測る。断面形態は不整形（鉢状）で、深さ80cmを測る。長軸方向はN-77°-Eを指す。坑底中央がやや盛り上がりおり、小ピットが5個検出されたが、精査の結果、中央はロームが貼ってあり、径30×22cm、深さ56cmのピットとなった。貼ったロームの厚さは28cmを測る。形態から陷し穴と考えられる。遺物の出土はなかった。

#### 44号土坑（第25図、図版23-2）

G・H-32・33区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径93cm、短径64cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径75cm、短径46cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ26cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 45号土坑（第22図、図版19-1）

O-33・34区に位置する。平面形態は橢円形を呈する。60号土坑と重複しているため平面の長径は不明であるが、短径は59cmを測る。底面形態も橢円形を呈し、長径143cm、短径45cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ32cmを測る。60号土坑と重複し、45号土坑が新しい。遺物の出土はなかった。

#### 46号土坑（第22図、図版16-1）

P-32・33区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径80cm、短径75cmを測る。底面形態も円形を呈し、長径70cm、短径68cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ32cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 47号土坑（第25図、図版19-1）

N・O-34・35区に位置する。平面形態は橢円形を呈し、長径160cm、短径92cmを測る。底面形態も橢円形を呈し、長径126cm、短径50cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ40cmを測る。土坑の調査終了後、東側に2号ロームマウンドが重複していることが確認されており、その一部となる可能性もある。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片・黒曜石が出土している。

遺物 71は口縁部で、突起となる部分である。縦位に集合沈線を施した後、横位に平行沈線を施している。72は胴部で、横位の集合沈線を施している。1~2cmの間隔で竹管を止めるように描いているため、竹の節の様に見える。

#### 48号土坑（第20図、図版16-3）

K・L-35区に位置する。平面形態は橢円形を呈し、長径122cm、短径120cmを測る。底面形態も橢円形を呈し、長径115cm、短径89cmを測る。断面形態はタライ状を呈し、深さ56cmを測る。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片・黒曜石片が出土しており、土器片は34号土坑出土のもの（56）と接合している。

#### 49号土坑（第15図、図版11-2）

K-36・37区に位置する。東側は65号土坑と重複するが、平面形態は橢円形を呈するものと考えられる。現存する長径は128cmであるが、145cmになるものと思われる。短径は121cmを測る。底面形態は隅丸長方形を呈し、長径81cm、短径68cmを測る。断面形態は鉢状を呈し、深さ70cmを測る。長軸方向はN-56°-Eを指す。坑底中央はやや盛り上がり、小ピット2個が検出されたが、精査の結果中央はロームを貼ってあり、径30×17cm、深さ48cmのピットとなった。形態から陥し穴と考えられる。65号土坑と重複しているが、65号土坑が新しいと考えられる。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片・礫が出土している。

遺物 73は胴部で、地文に縄文を施した後、押圧降帶を横位に施している。74は胴部で、縄文を施している。75は胴部で、縦位の集合沈線を施している。76は胴部で、縦位の集合沈線と縦位の鉛筆状文を施している。77は口縁部で、突起となる部分である。平行沈線を施している。竹管により結節状となる個所も見られる。78は胴部で、横位の綾杉文を施した後、横位の平行沈線を

引いている。79は底部で、縦位の綾杉文と円または渦巻きの平行沈線を施し、三角形の区画を施して取って陰刻状にしている。

#### 50号土坑（第24図、図版22-1）

K-38区に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、長径77cm、短径71cmを測る。底面形態も隅丸方形を呈し、長径63cm、短径61cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ26cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 51号土坑（第24図、図版22-2）

N-O-31区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径86cm、短径75cmを測る。底面形態も楕円形で、長径33cm、短径29cmを測る。断面形態は不整形で、深さ52cmを測る。遺物は、繩文時代中期初頭の土器片が出土している。

遺物 80は胴部から頸部にかけての破片で、繩文が施されている。

#### 52号土坑（第24図、図版22-2）

N-30・31区に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、長径53cm、短径51cmを測る。平面形態は円形を呈し、長径45cm、短径43cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ30cmを測る。遺物の出土はなかった。

#### 53号土坑（第20図、図版16-2）

K-L-32・33区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径133cm、短径120cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径100cm、短径98cmを測る。断面形態はタライ状を呈し、深さ54cmを測る。42号土坑と重複し、53号土坑が新しい。遺物は、繩文時代中期初頭の土器片が出土している。

遺物 81は胴部で、繩文が施されている。82は胴部から頸部にかけての破片で、頸部には綾杉文が、胴部には地文に繩文を施した後、垂下する平行沈線を施している。半裁竹管による結節状浮線文を横位に施し、文様帯を向している。

#### 54号土坑（第16図、図版11-3）

J-K-39区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径127cm、短径125cmを測る。底面形態は隅丸方形を呈し、長径85cm、短径67cmを測る。断面形態は鉢状を呈し、深さ70cmを測る。長軸方向はN-59°-Eを指す。坑底の中央はやや盛り上がり、5個の小ピットが検出されたが、精査の結果中央は貼ったロームで、径35×24cm、深さ55cmのピットとなった。形態から陥し穴と考えられる。55号土坑と一部重複するが、新旧関係は不明。遺物の出土はなかった。

#### 55号土坑（第16図、図版11-3）

J-39区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径105cm、短径90cmを測る。底面形態は楕円形を呈し、長径67cm、短径59cmを測る。断面形態は鉢状を呈し、深さ65cmを測る。54号土坑と一緒に重複するが、新旧関係は不明。遺物の出土はなかった。

#### 56号土坑（第19図、図版15-1）

I-J-30区に位置する。平面形態は楕円形を呈する。平面の長径は不明で、短径は47cmを測

る。底面の長径も不明で、短径は40cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ14cmを測る。29号土坑と重複し、56号土坑が新しい。遺物の出土はなかった。

#### 57号土坑（第26図、図版23-3）

L・M-42区に位置する。平面形態は不整形で、東側がやや浅いため、他の土坑と重複している可能性がある。長径130cm、短径125cmを測る。底面形態も不整形を呈し、長径120cm、短径110cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ27cmを測る。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片が出土している。

遺物 83は副部で、横位の綾杉文を施した後、横位の平行沈線を施している。

#### 58号土坑（第16図、図版12-1）

I・J-41・42区に位置する。平面形態は隅九方形を呈し、長径76cm、短径75cmを測る。底面形態も隅九方形を呈し、長径69cm、短径65cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ16cmを測る。59号土坑と重複するが、新旧関係は不明。遺物の出土はなかった。

#### 59号土坑（第16図、図版12-1）

I-42区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径128cm、短径110cmを測る。底面形態は隅丸長方形を呈し、長径96cm、短径60cmを測る。断面形態は鉢状を呈し、深さ80cmを測る。長軸方向はN-60°-Eを指す。坑底はやや盛り上がり、4個の小ピットが検出されたが、精査の結果、中央は貼ったロームで、径28×20cm、深さ46cmのピットとなった。形態から、陥し穴と考えられる。58号土坑と重複するが、新旧関係は不明。遺物の出土はなかった。

#### 60号土坑（第22図、図版19-1）

O・P-34区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径95cm、短径も95cmを測る。底面形態も円形を呈し、長径82cm、短径80cmを測る。断面形態はタライ状を呈し、深さ45cmを測る。45号土坑と重複し、45号土坑が新しい。遺物の出土はなかった。

#### 61号土坑（第17図、図版12-2）

I・J-46・47区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径139cm、短径112cmを測る。底面形態は楕円形を呈し、長径91cm、短径68cmを測る。断面形態は鉢状を呈し、深さ61cmを測る。長軸方向はN-80°-Eを指す。坑底はやや盛り上がり、4個のピットが検出された。精査の結果、中央は貼ったロームで、径33×23cm、深さ65cmのピットになった。このピットの周辺にも4個の小ピットが検出されているが、この土坑に伴うものか明らかでない。形態から、陥し穴と考えられる。遺物の出土はなかった。

#### 62号土坑（第26図、図版24-1）

K-44区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径123cm、短径88cmを測る。底面形態は不整形で、長径102cm、短径68cmを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ22cmを測る。遺物の出土はなかった。

### 63号土坑（第17図、図版12-3）

H・I-49・50区に位置する。平面形態は椭円形を呈し、長径177cm、長径121cmを測る。底面形態は鵝卵長方形を呈し、長径114cm、短径30cmを測る。断面形態は短軸がY字状を呈し、深さは79cmを測る。長軸方向はN-38°-Wを指す。坑底に径20×18cm、深さ37cmのピットが検出されている。ピットにロームを貼った痕跡はなく、小ピットが有ったかは明らかでない。形態から、陥し穴と考えられる。遺物は、縄文時代中期初頭の土器片・小形磨製石斧が出土している。

遺物 84は副部で、無文である。

### 64号土坑（第21図、図版17-1）

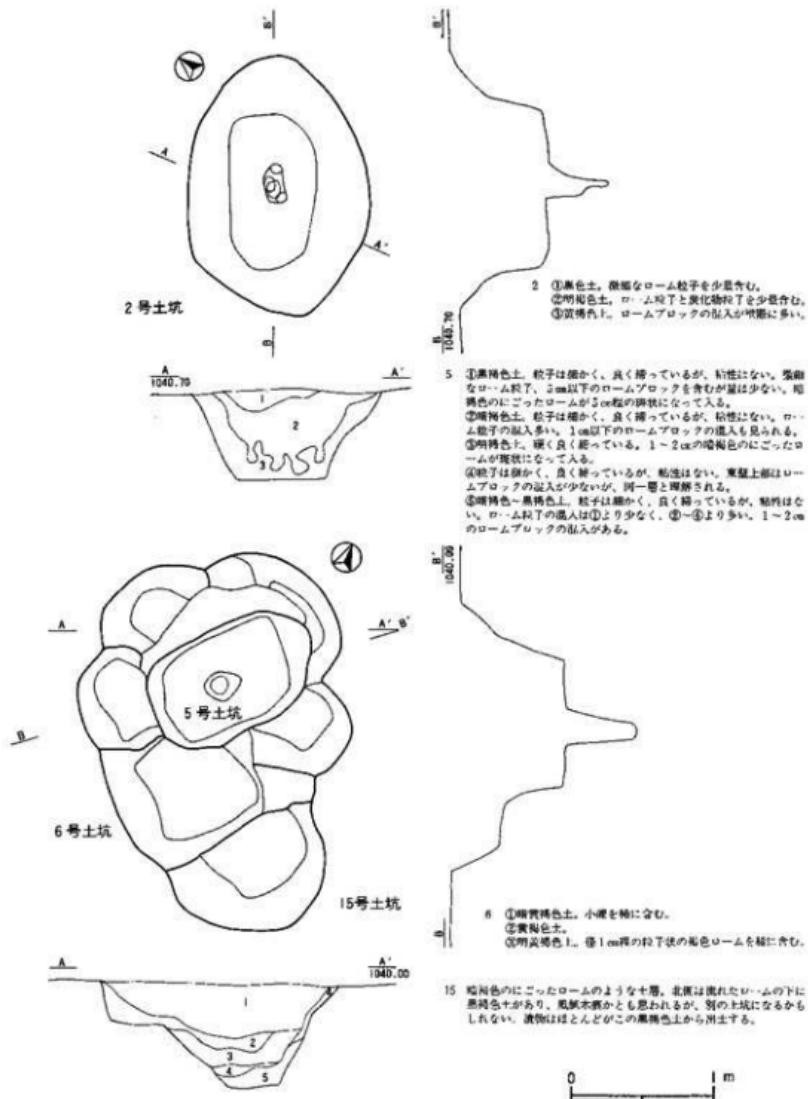
H-42区に位置する。平面形態は円形を呈し、長径113cm、短径100cmを測る。底面形態も円形を呈し、長径97cm、短径95cmを測る。断面形態はクライ状を呈し、深さ49cmを測る。遺物は、坑底から20cm上に縄文時代中期初頭の土器・黒曜石が出土している。

遺物 85は副部で、縦位の綾杉文を施している。86は胴部で、縦位の集合沈線を粗く引いている。

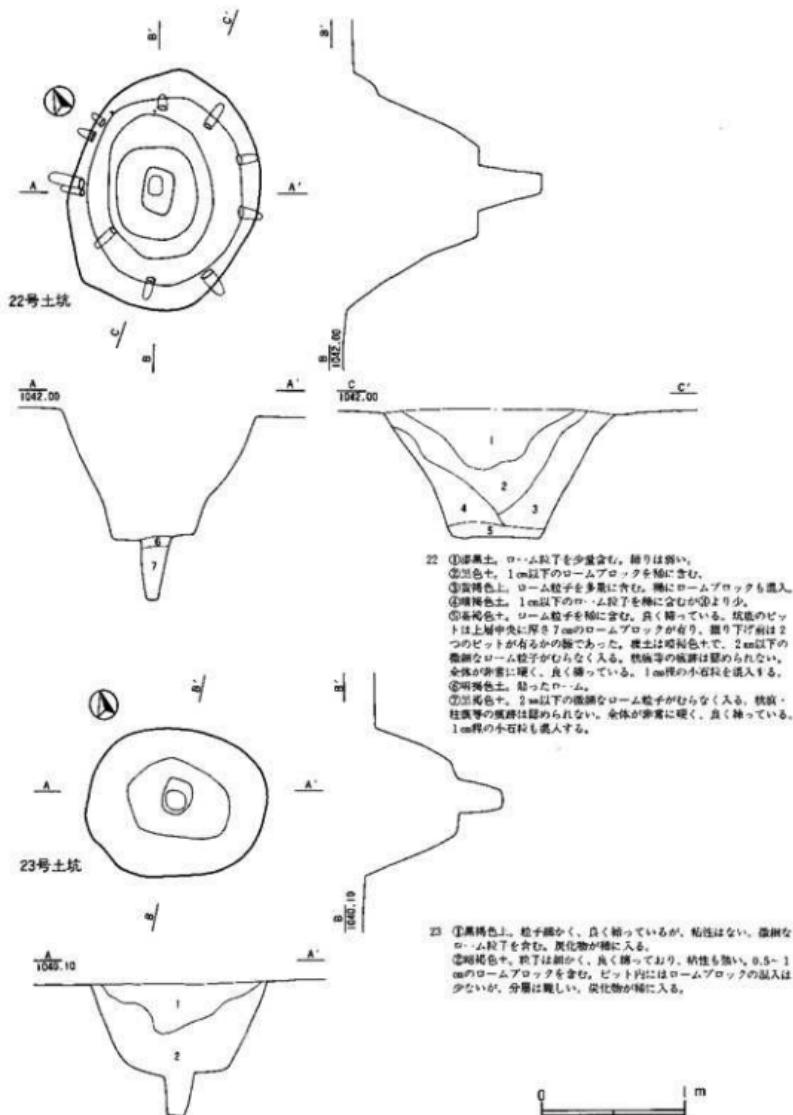
### 65号土坑（第15図、図版11-2）

K・L-36・37区に位置する。平面形態は、西側が49号土坑と重複しているため明らかでないが、長径127cm程の円形を呈するものと思われる。底面形態も114cm程の円形になるものと思われる。断面形態はクライ状を呈し、深さ33cmを測る。49号土坑と重複するが、49号土坑が新しいと思われる。遺物は、縄文時代中期初頭の一括土器を出土する。

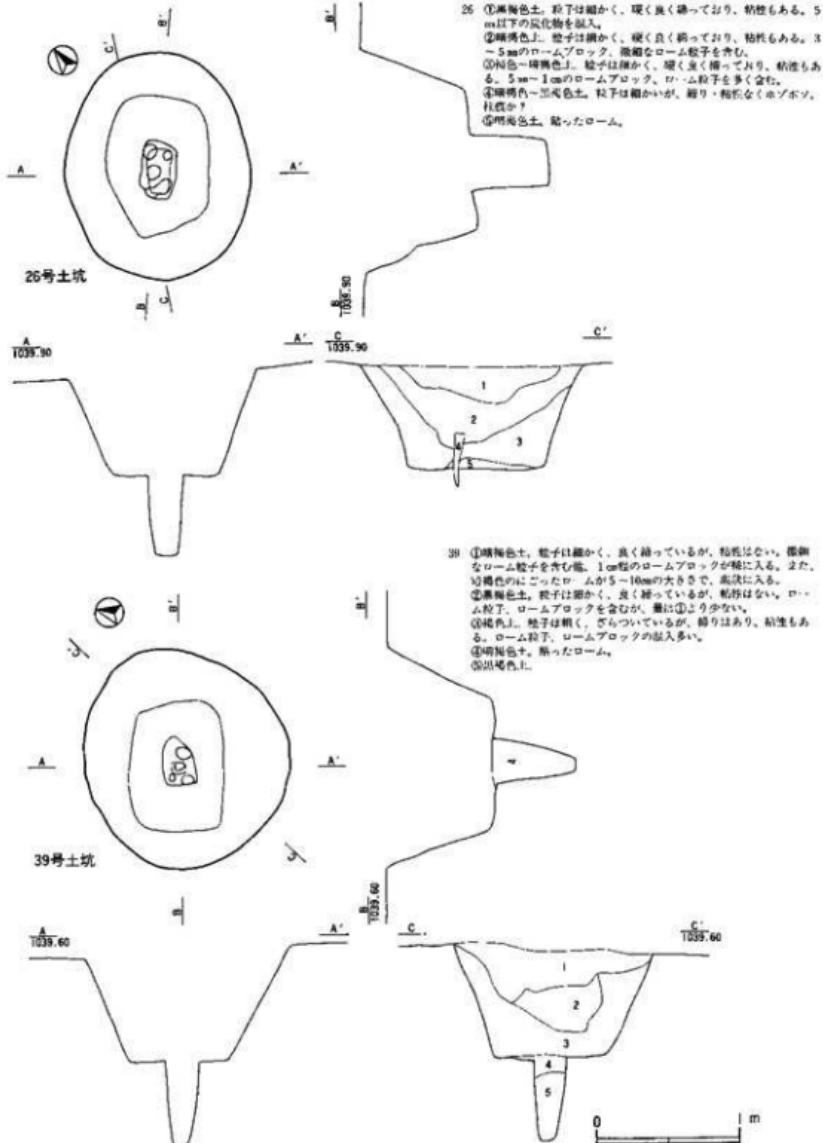
遺物 87は胴部で、縄文が施されている。



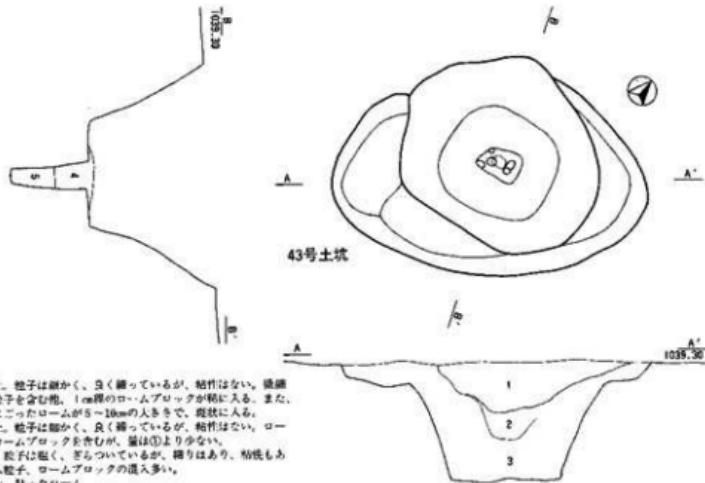
第12図 繩文時代の土坑(1) (1/40)



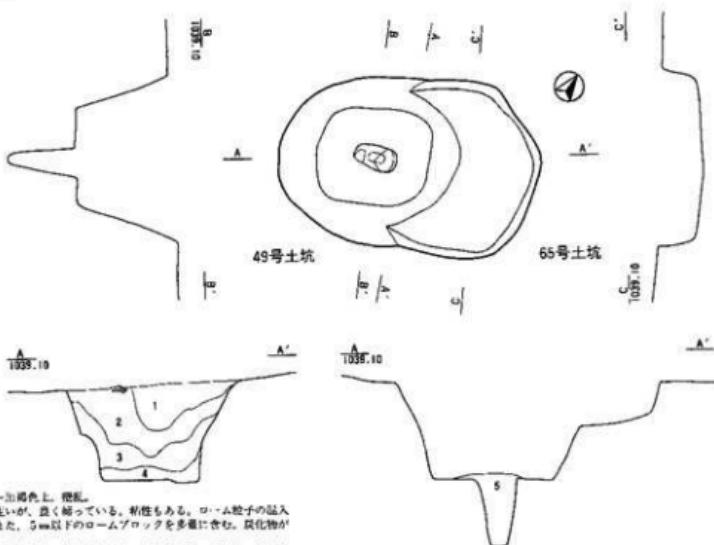
第13図 繩文時代の土坑(2) (1/40)



第14図 繩文時代の土坑(3) (1/40)

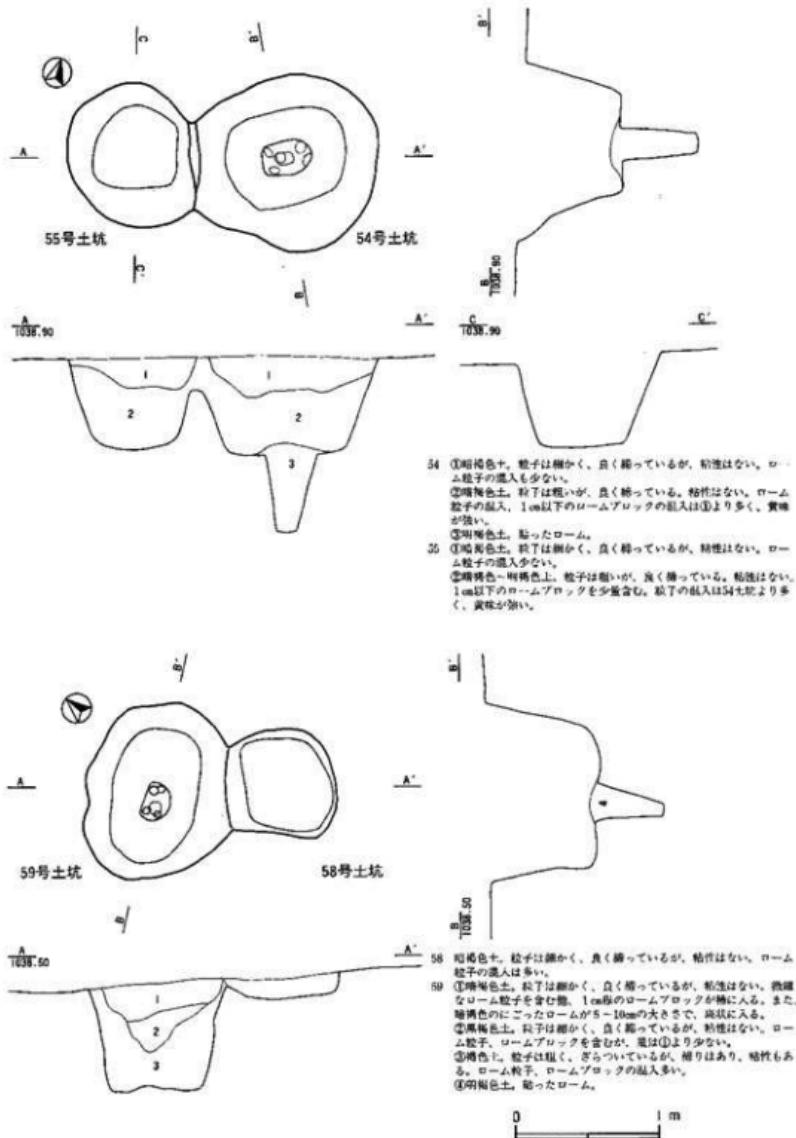


43. ①粘土色土。粒子は細かく、よく絡っているが、粘性はない。通透なローム粒子を含む地。1m程のロームブロックが軽に入る。また、兩種類の二つでロームが5~16cmの人さきで、底質に入る。  
②灰褐色土。粒子は細かく、よく絡っているが、粘性はない。ローム粒子、ロームブロックを含むが、量は(1)より少ない。  
③褐色土。粒子は粗く、がらついているが、繋りはあり、粘性もある。ローム粒子、ロームブロックの混入多い。  
④灰褐色土。貼ったローム。  
⑤黑褐色土。

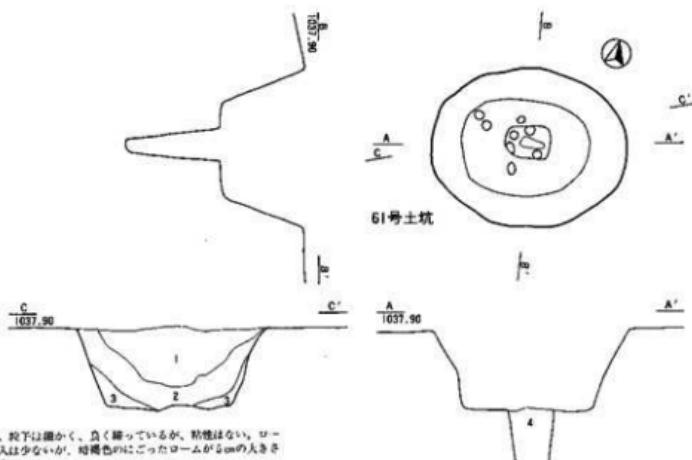


49. ①粘土色～灰褐色土。泥炭。  
②粒子は粗いが、よく絡っている。粘性もある。ローム粒子の混入が多い。また、1mm以下のロームブロックを多量に含む。臭化物が少量入る。  
③灰褐色～灰褐色土。粒子は細かく、よく良く絡っており、粘性もある。同サイドはロームの摺れて特徴がある。  
④褐色土。粒子は粗いが、よく絡っている。粘性は近しい。1~2cmのロームブロック、2mm以下のブロック多い。  
⑤灰褐色土。貼ったローム。

第15図 繩文時代の土坑(4) (1/40)



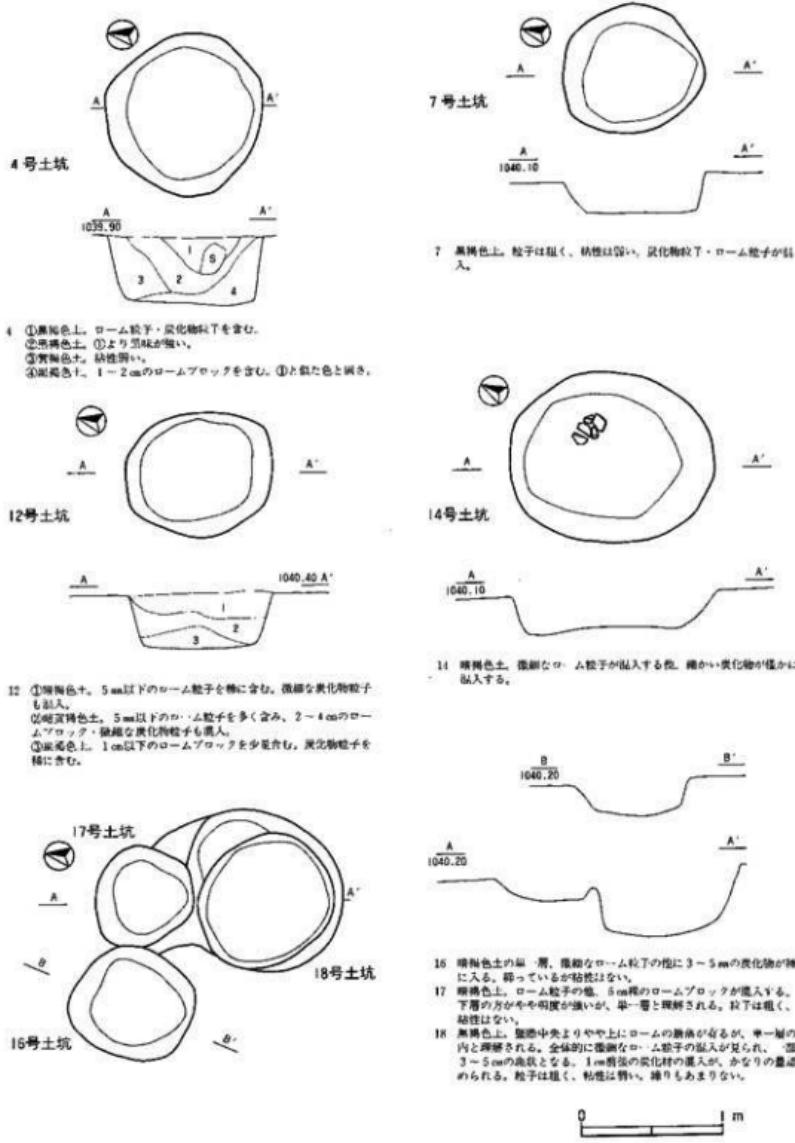
第16図 繩文時代の土坑(5) (1/40)



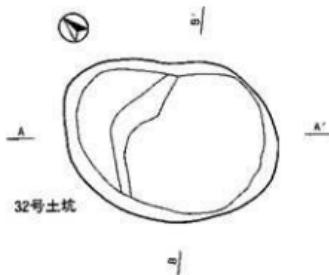
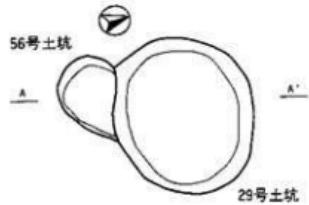
- 61 ①地褐色上。段下は細かく、直ぐ縛っているが、粘性はない。ローム粒子の混入は少ないが、地褐色のにごったロームが5cmの大きさで既に入る。  
 ②地褐色上。段下はやや粗いが、縛っている。粘性は少し。ローム粒子の混入は多い。また、1cm以下のロームブロックの混入もある。  
 ③段下は細かく、硬く直ぐ縛っており、粘性もある。ローム粒子の混入は多いが、ロームブロックの混入はない。  
 ④地褐色土。軋ったローム。

- 63 ①地褐色上。粒子は細かく、直ぐ縛っているが、粘性はない。ローム粒子が少量入る。地褐色のにごったロームが既に入る。  
 ②地褐色土。粒子は細かく、硬く直ぐ縛っており、粘性もある。5mmのロームブロックが入る。両サイドはロームが層岩帶褐色土。  
 ③地褐色土。段下は細かく、硬く直ぐ縛っており、粘性もある。被に5mmのロームブロックが入るかほぼ均一。粘性に大きなビッアリ。  
 ④地褐色土。

第17図 縄文時代の土坑(6) (1/40)

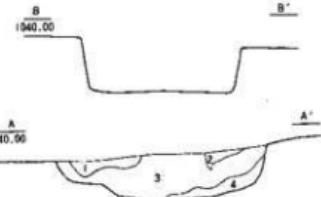


第18図 繩文時代の土坑(?) (1/40)

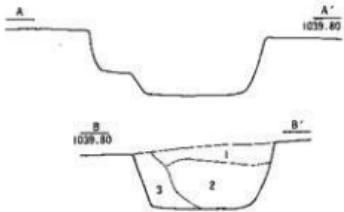
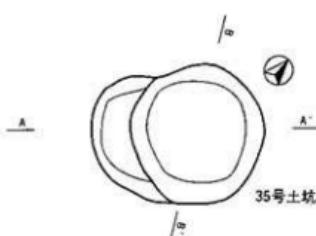


- 29 ①近褐色土。粒子は細かく、良く練っているが、粘性はない。微細なローム粒子を多量に含む。  
②黑褐色土。粒子は細かく、良く練っているが、粘性はない。微細なローム粒子・0.5~1cmのロームブロックを含むが、量は少ない。

30 ③褐色土。粒子は細かく、良く練っているが、粘性はない。微細なローム粒子を多量に含むが、1cm以上のロームブロックを含む。



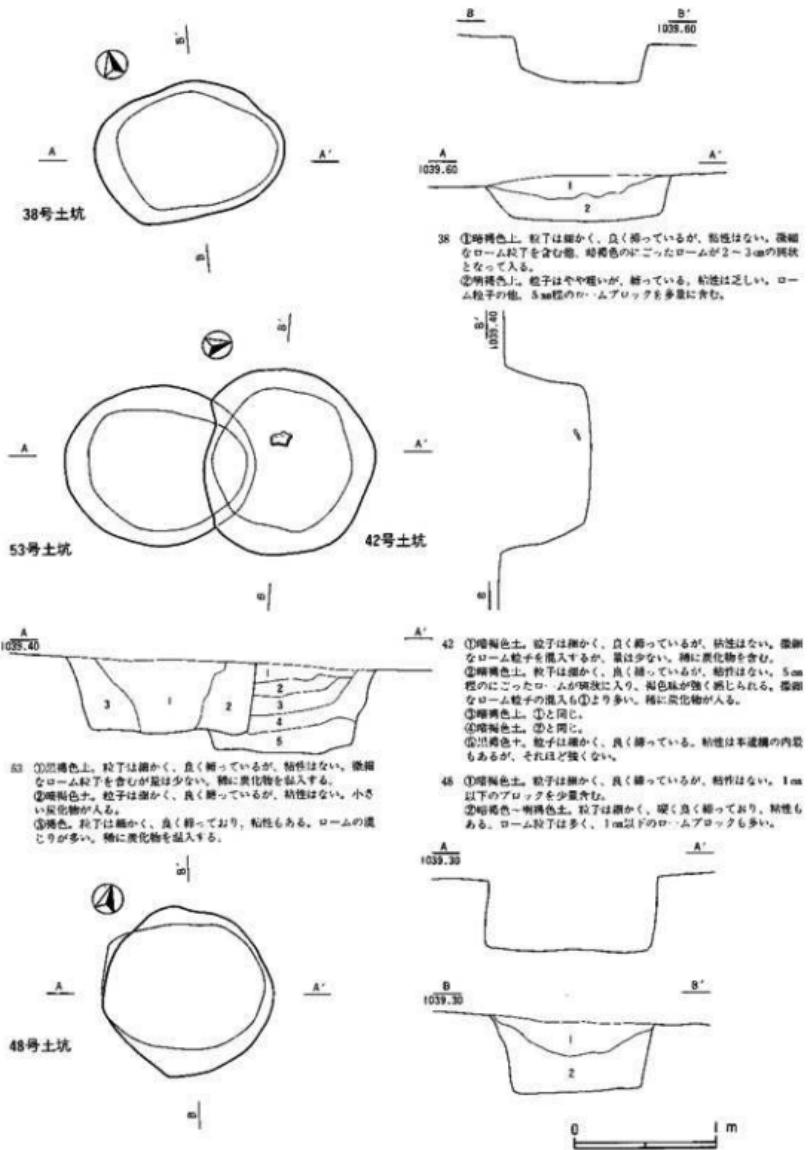
- 32 ①やや黒味の強い暗褐色土。粒子は細かく、良く練っているが、粘性はない。炭化物を含む。  
②やや正板のやや暗褐色土。粒子は細かく、良く練っており、粘性もある。1m以下のロームブロックを含む。  
③暗褐色土。粒子は細かく、良く練っているが、粘性もある。1cm以下のロームブロックを含む。  
④淤褐色土。粒子は細かく、良く練っているが、粘性もある。微細なローム粒子の混入があるが、量はない。



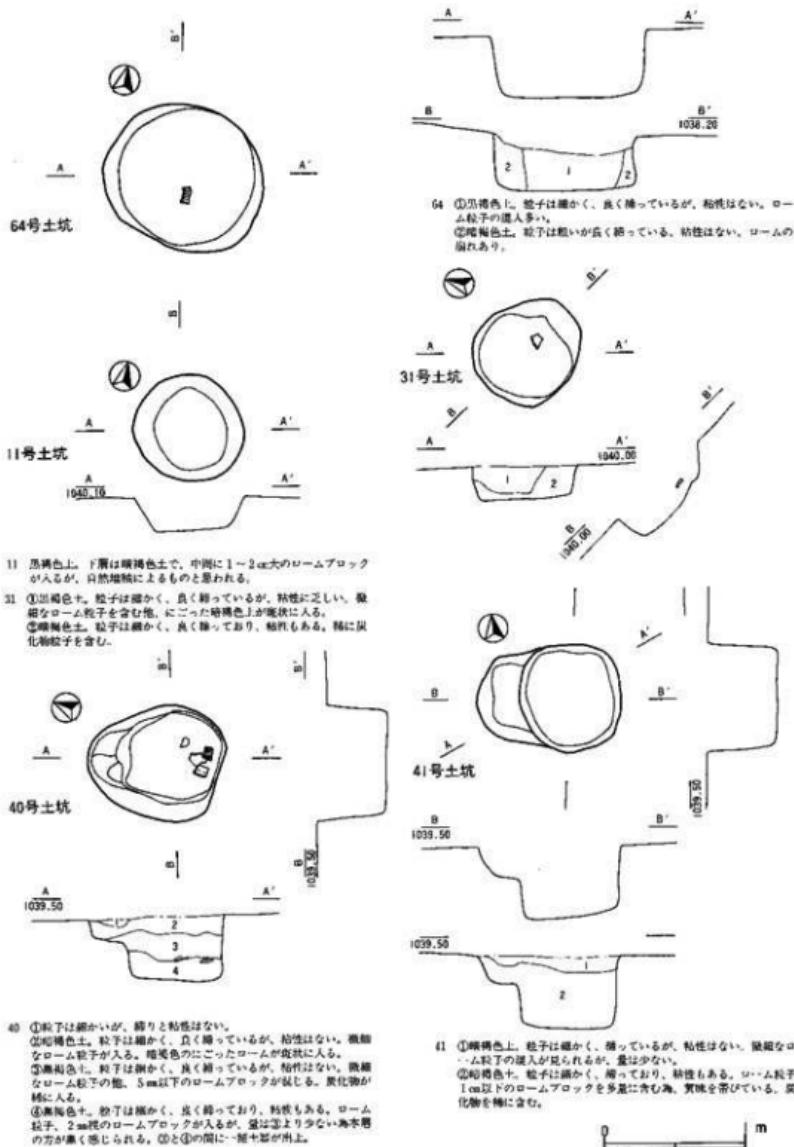
- 33 ①暗褐色土。粒子は細かく、良く練っているが、粘性はない。微細なローム粒子が特に多い。  
②黑褐色土。粒子は細かく、良く練っているが、粘性はない。微細なローム粒子・5mm程度のロームブロックを少量入る。  
③暗褐色土。粒子は細かく、よく良く練っており、粘性もある。ローム粒子、ロームブロックの混入が多い。



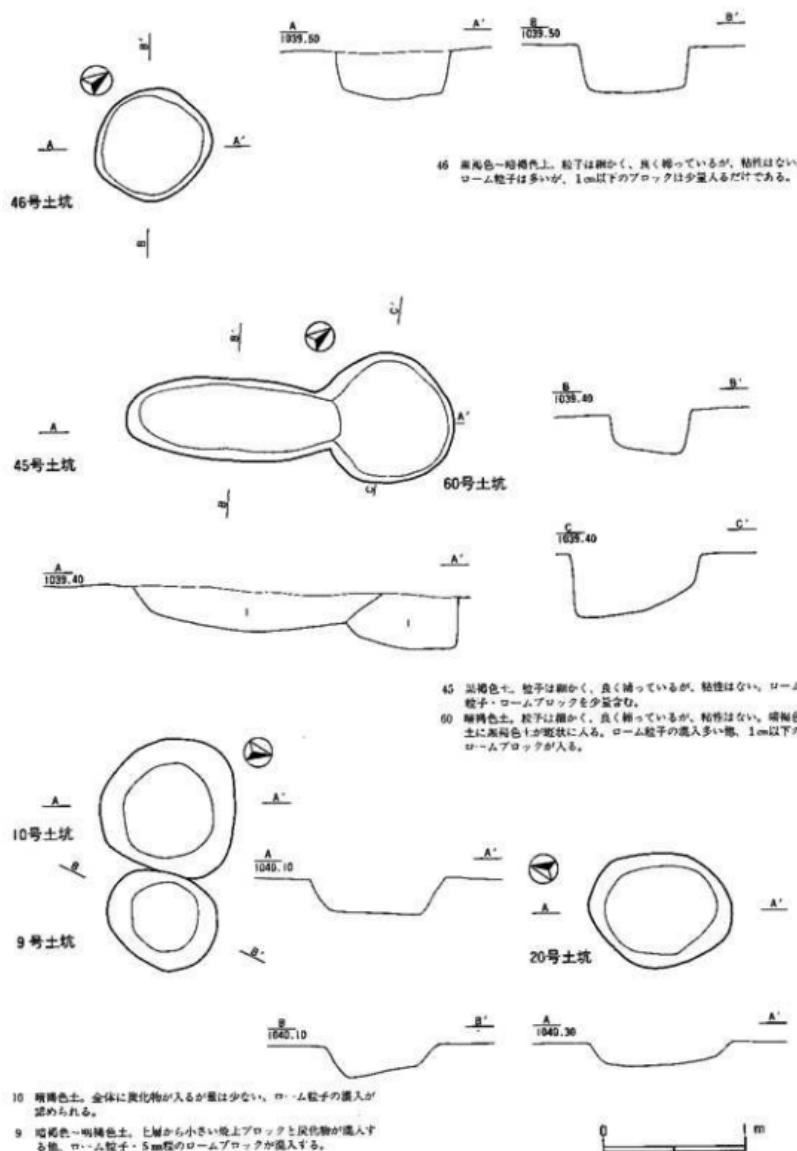
第19図 編文時代の土坑(8) (1/40)



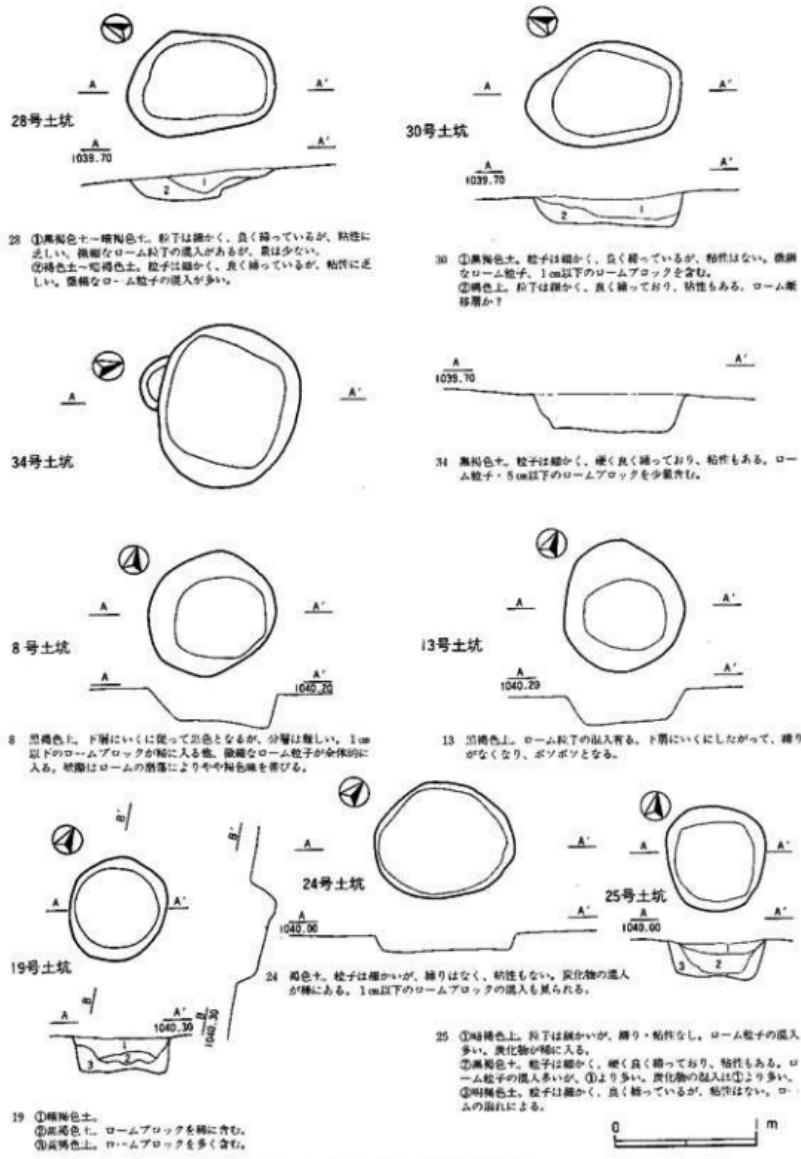
第20図 繩文時代の土坑(9) (1/40)



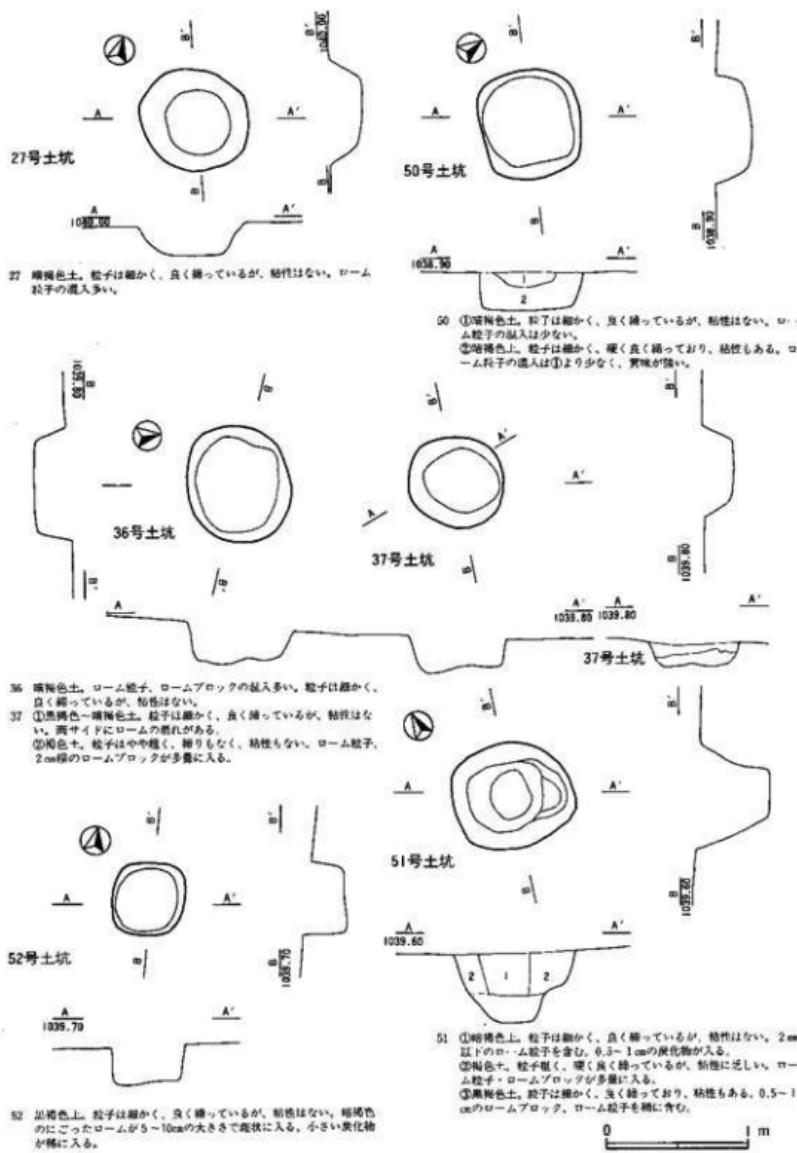
第21図 繩文時代の土坑跡 (1/40)



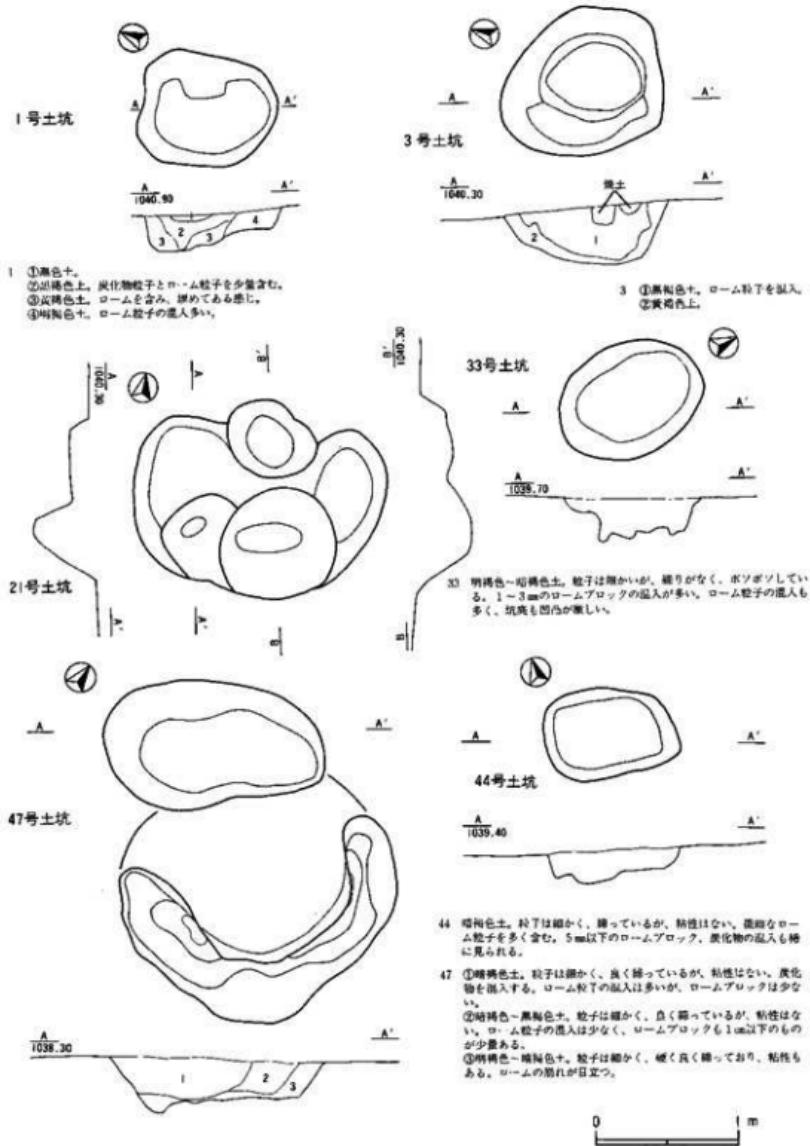
第22図 繩文時代の土坑(II) (1/40)



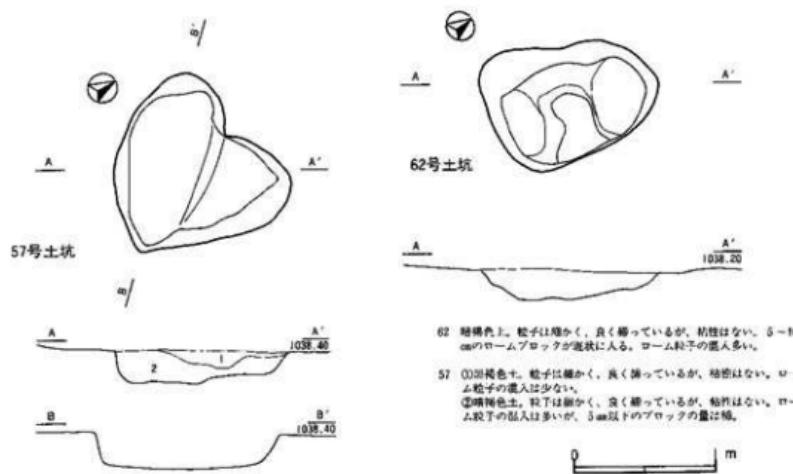
第23図 純文時代の土坑(1/40)



第24図 穂文時代の土坑(3) (1/40)



第25図 繩文時代の土坑跡 (1/40)



第26図 縄文時代の土坑(1/40)

62 線彫れ上。粒子は細かく、良く練っているが、粘性はない。5~10 cmのロームブロックが塊状に入る。ローム粒子の量も多い。

57 ①湖褐色土。粒子は細かく、良く練っているが、粘性はない。ローム粒子の混入は少ない。

②湖褐色土。粒子は細かく、良く練っているが、粘性はない。ローム粒子の混入は多いが、3mm以下のブロックの量は少。

第2表 上見遺跡土坑一覧表

番号	位置	分類	平面形	縦面形	平傾	平屈	傾長	傾短	傾き	北	土	遺物	時期	備考
1	H 8	IV	横円形	圓状	97	82	80	30	25	N-48°-E	黒雲石	中頸動脈	発し穴。坑底にピット(28×13×3)。	
2	J-18	I a	横円形	伸状	165	130	110	60	70	N-48°-E	上層の砂十四から十七cm厚片、側上部の層から中頸動脈後口換りに、黒雲石	中頸動脈	坑上は中央から南に無傾。	
3	B-19-20	IV	横円形	圓状	127	105	67	49	45					
4	B-24	II a	四形	ダイヤ状	116	110	93	90	30		黒雲石	中頸動脈	発し穴。坑底にピット(26×20×4)。	
5	M-26	I a	深丸底方形	伸状	(123)	(75)	93	63	80	N-36°-E	土器片	中頸動脈	発し穴。坑底にピット(26×15×4)と黒雲石。新凹頭骨(下顎)。	
6	M-26	IV	不明	不明					44					
7	E-F-25-26	III a	円形	圓状	102	93	82	70	30					
8	F-24	III b	横円形	圓状	93	81	70	60	24					
9	G-25-26	III b	横円形	圓状	81	65	50	47	22					
10	F-G-25-26	III a	円形	圓状	102	100	67	64	26					
11	E-24	III b	円形	圓状	78	73	56	50	24					
12	G-25	II a	横円形	ダイヤ状	103	88	80	70	38		土器片・黒雲石	中頸動脈	発し穴。	
13	G-25	III b	横円形	圓状	95	88	56	50	24		土器片	中頸動脈	発し穴。	
14	G-H-25-26	III a	横円形	圓状	145	122	110	88	27		土器片・黒雲石	中頸動脈	発し穴。	
15	M-N-25-26	IV	不明	不明										
16	H-25	III b	横円形	圓状	82	80	63	57	25		土器片	中頸動脈	17上火と切り合ひが。新凹頭骨不明。	
17	H-25	III b	横円形	圓状	73	67	50	48	17		土器片	中頸動脈	16上火と切り合ひが。新凹頭骨不明。	
18	H-25-25	II b	円形	ダイヤ状	100	87	88	80	50		土器片・黒雲石	中頸動脈	17上火と切り合ひが。新凹頭骨不明。	
19	I-25-24	III b	円形	圓状	75	65	58	57	20					
20	I-1-25-24	III a	横円形	圓状	102	82	80	62	16					
21	I-M-23	IV	小鑿形	伸状	180	140	40				土器片	中頸動脈	新凹頭骨か?	
22	O-P-24	I a	横円形	伸状	170	134	64	57	92	N-25°-E	土器片	中頸動脈	発し穴。坑底にピット(32×21×45)。	
23	J-27	I a	横円形	伸状	125	107	75	55	64	N-63°-W	土器片・黒雲石	中頸動脈	発し穴。坑底から5cmの焼土の塊で記述されるが、東面や壁は焼けていない。	
24	H-1-25-27	III b	横円形	圓状	98	83	90	75	10					
25	H-26	IV	円形	圓状	75	70	56	56	28					
26	L-M-27-28	I a	横円形	伸状	162	133	100	73	77	N-39-E	土器片	中頸動脈	発し穴。坑底にピット(42×24×57)。	
27	G-26	III b	円形	圓状	80	70	45	45	25					
28	A-B-27	III a	横円形	圓状	106	74	88	53	22					
29	I-J-30	III a	横円形	圓状	115	100	66	79	30		土器片・陶石・黒雲石	中頸動脈	56+灰と電気。36±灰が有。	
30	J-29-31	III a	横円形	圓状	113	74	86	60	24					
31	P-28	III b	横円形	圓状	78	70	65	57	25					

番号	位 置	分類	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	傾き	輪方向	山 下 連 物	輪周	備 考
32	K・L-27-28	III a	輪円形	直 状	153	115	134	100	36					浅い十坑が重複か?
33	C・D-28	IV	輪円形	不整形	105	80	85	54	27					南北断層にビット。
34	G-34	III a	輪丸形	直 状	115	100	83	81	28					西側に上坑が重複か?
35	N-29	II a	輪円形	ダイイ状	98	(93)	70	70	44					
36	O-29	III b	四 形	直 状	82	76	66	60	30					
37	O-30	III b	四 形	直 状	67	53	45	28						
38	P-31-32	III a	輪円形	直 状	134	96	112	82	26					
39	K・L-31-32	I a	輪円形	鉤 状	156	146	93	67	82	N-77°-E				
40	M-32	II b	輪円形	ダイイ状	92	82	65	60	47					
41	L-32-33	II b	四 形	ダイイ状	77	71	70	62	51					
42	K・L-33	II a	輪円形	直 状	126	115	111	86	63					
43	K・L-34	I a	不整形 (輪円形)	直 状	(150)	(130)	80	74	89	N-77°-E				
44	G・H-32-33	IV	輪円形	直 状	93	64	75	46	26					
45	O-33-34	IV	輪円形	直 状	59	143	45	32						60土坑と重複。45土坑が断。
46	P-32-33	III b	四 形	直 状	80	70	68	52						
47	N-O-34-35	IV	輪円形	直 状	160	92	126	50	40					
48	K・L-35	II a	輪円形	ダイイ状	122	120	115	89	56					
49	K-36-37	I a	輪円形	鉤 状	128	121	81	68	70	N-56°-E				
50	K-38	III b	輪丸形	直 状	77	71	63	61	26					
51	N-O-31	III b	輪円形	不整形	86	75	33	29	32					
52	N-30	III b	輪丸形	直 状	53	51	45	43	30					
53	K-L-32-33	II a	輪円形	ダイイ状	133	120	100	98	54					
54	J-K-39	I a	輪円形	鉤 状	127	125	85	67	70	N-59°-K				
55	J-39	II a	輪円形	鉤 状	105	90	67	59	65					
56	I-J-39	III b	輪円形	直 状	130	125	120	110	27					
57	L-M-42	IV	不整形	直 状	76	75	69	65	16					
58	I-J-41-42	III b	輪丸形	直 状	177	121	114	30	79	N-36°-W				
59	I-42	I a	輪円形	鉤 状	128	110	96	60	80	N-60°-E				
60	O-P-34	II b	四 形	ダイイ状	95	82	80	45						
61	I-J-46-47	I a	輪円形	鉤 状	139	112	91	68	61	N-80°-E				
62	K-44	IV	輪円形	直 状	123	88	102	68	32					
63	H-I-49-50	I b	輪円形	Y字状	177	121	114	30	79					
64	H-I-42	II a	四 形	ダイイ状	113	100	97	95	49					
65	K-L-36-37	II a	四 形	ダイイ状	127	114	33							

## (2) ロームマウンド

本遺跡からは、2基のロームマウンドが検出されている。時期は明確に出来ないものの、本遺跡の立地する台地上が、現在は畠地として開墾されているが、以前には樹木が生育していたことが窺える。

### 1号ロームマウンド（第27図、図版24-2・3）

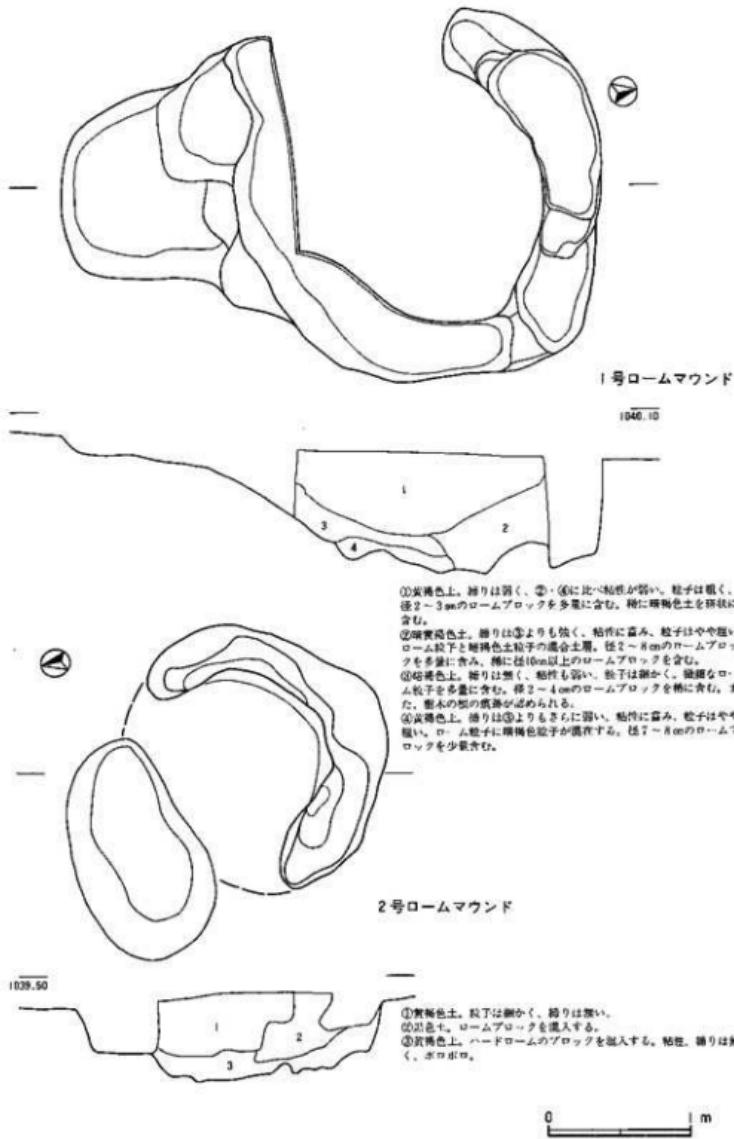
第1次調査のおりに、D・E-25~27区で確認されている。当初土坑かとも思われたが、土層断面の観察により、壁面の一部が再堆積したロームとなっており、黒色土が下層に認められるところから、ロームマウンドの可能性が強まった。第2次調査において、周辺の精査を行なった結果、暗褐色土がリング状に周り、内側に再堆積したロームが詰まっていたため、これをロームマウンドとして扱った。遺物は、縄文時代中期初頭の土器16点が出土している。

遺物 88~92は胴部で、縄文が施されている。93は口縁部で、突起となる。隆帯による渦巻きを施した後、ソーメン状の細い粘土紐を貼付けている。94は口縁部で、把手を持つ。口縁部から斜位の集合沈線を施し、横位の平行沈線で画している。把手は猪をイメージした獸面把手となるが、先端を欠いている。把手の下と把手から右の口唇部は結節状浮線文によっている。95~97は胴部で、右下がりの集合沈線を施した後、縱横、あるいは曲線の平行沈線によって画し、斜交する浅い平行沈線を引いている。98は胴部で、縱位の集合沈線を横位の平行沈線で画し、斜交する浅い平行沈線を引いている。99は胴部で、右下がりの集合沈線を施した後、縱位または斜位の平行沈線で画している。100は胴部で、横位の綾杉文を施している。101は胴部で、斜位の集合沈線と横位の平行沈線を施している。斜位の集合沈線の方が後で施文されている。102は胴部で、縱位の集合沈線が施されている。103は胴部で、地文に縄文が施されている。3条の横位の平行沈線を2段施し、その間を平行沈線で鋸齒状文が施される。下方は平行沈線による曲線が施されている。

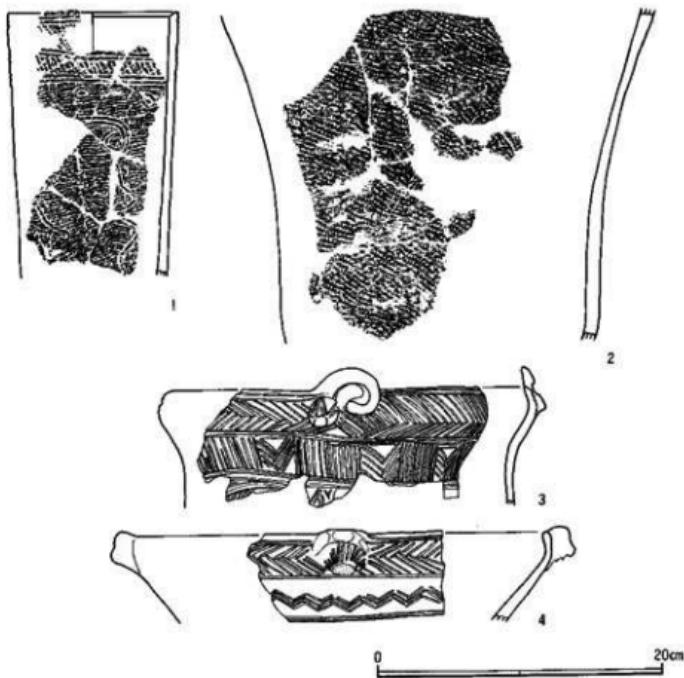
### 2号ロームマウンド（第27図、図版25-1・2）

47号土坑の東側に位置する。調査区はN・M-34区である。完掘により47号土坑と重複するが、検出は47号土坑が先であり、同時期のものかどうかは不明である。47号土坑がロームマウンドの一部となる可能性もある。遺物は、縄文時代中期初頭の土器2点が出土している。

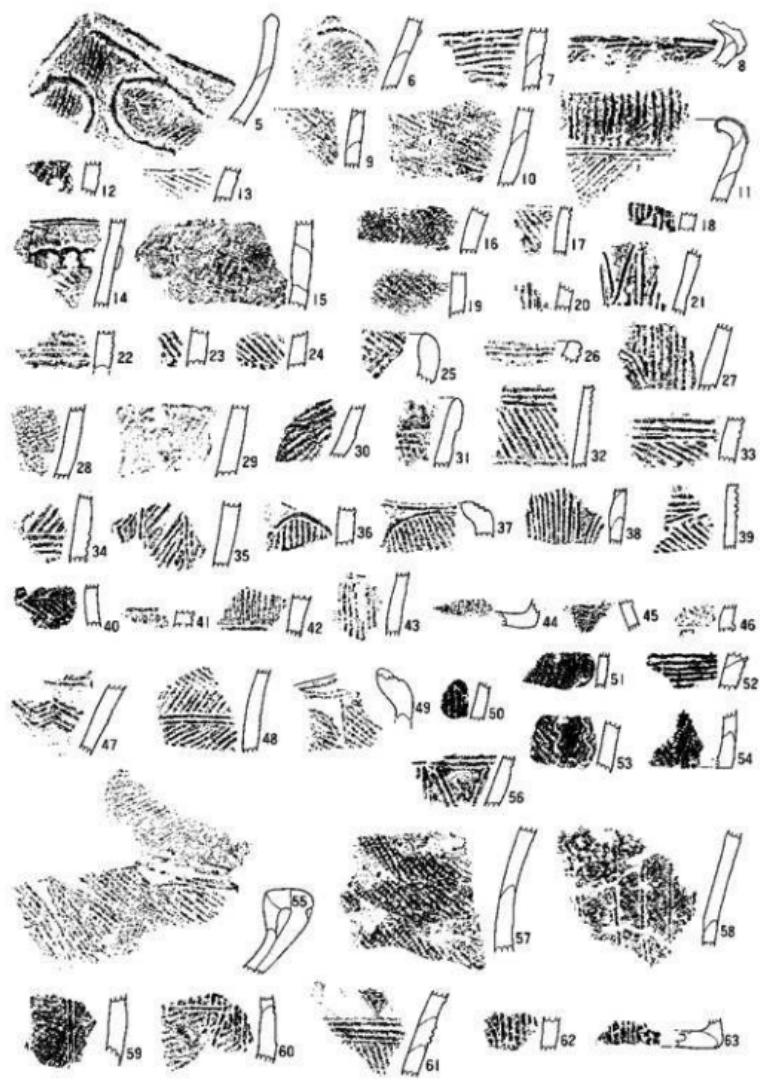
遺物 104は口縁部で、口唇部が屈曲している。口唇部は斜位の集合沈線が施されている。その下は2条の平行沈線が2段にわたって横位に引かれ、その間を平行沈線で鋸齒状文が施される。頸部は斜位の集合沈線を施す。105は胴部で、横位の綾杉文が施される。



第27図 ロームマウンド (1/40)

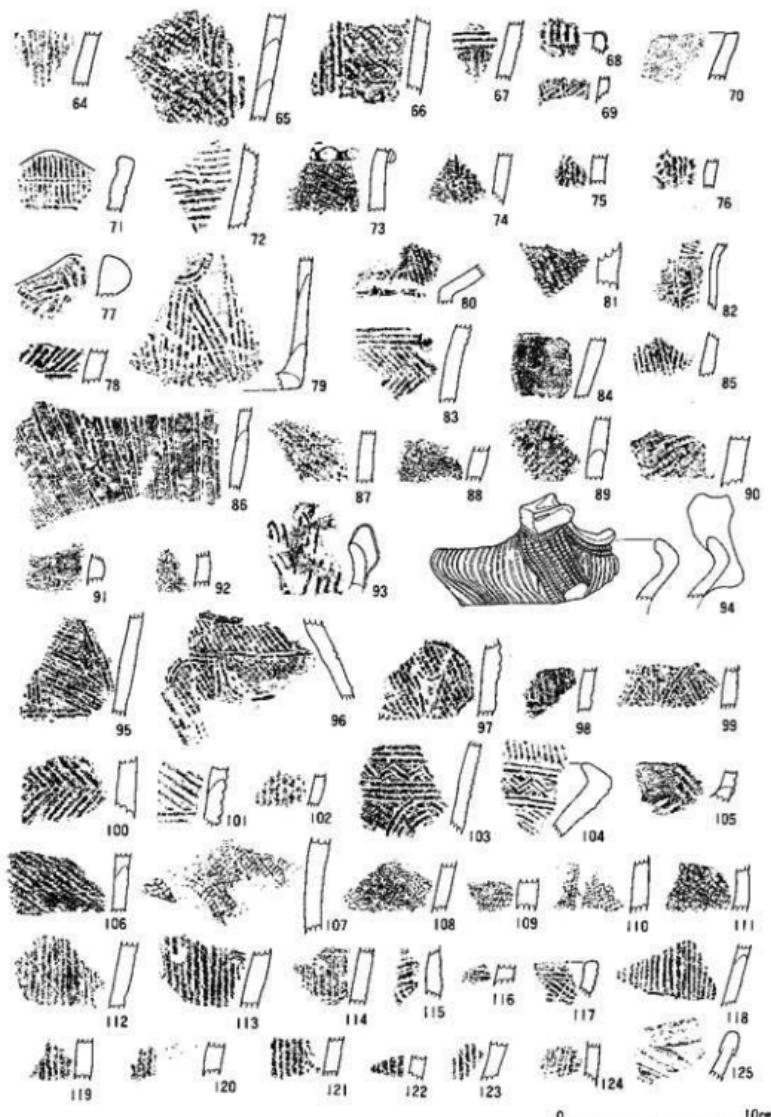


第28図 縄文時代の土器(1) (1/4)

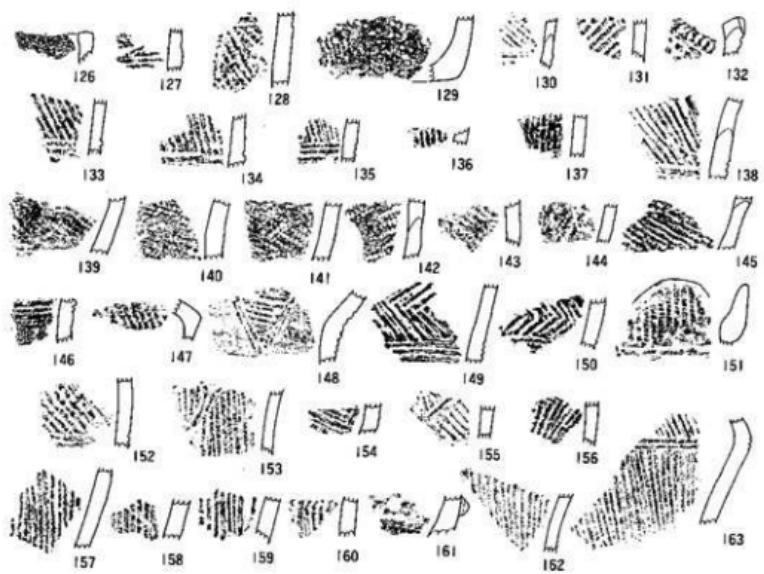


0 10cm

第29図 縄文時代の土器(2) (1/3)



第30図 縄文時代の土器(3) (1/3)



第31図 純文時代の土器(4) (1/3)

### (3) 遺構外の遺物

#### 1) 土 器 (第28~31図、図版26~33)

##### A トレンチ

106~111は胸部で、縄文が施されている。106には縄文の末端処理が施されている。112・113は胸部で、縦位の集合沈線が施された後、斜位の沈線が施されている。114は胸部で、縦位の集合沈線が施された後、横位及び斜位の平行沈線で画している。115は胸部で、横位の綾杉文が施されている。116は胸部で、縦位及び横位の平行沈線が施されている。117は口縁部で、右下がりの集合沈線を施した後、上下に横位の平行沈線が引かれている。また、斜交する沈線が後から施されている。118~120・122は胸部で、縦位の平行沈線が施されている。121は胸部で、縦位の集合沈線と縦位の鋸齒状文が施されている。123は胸部で、縦位の集合沈線を施した後、斜位の沈線を引いている。124は胸部で、斜位の集合沈線を施している。125は口縁部で、口唇部の内・外面に粘土紐の隆帯を貼付けている。斜位の平行沈線が施されている。

##### B トレンチ

126は口縁部で、縄文が施されている。127は胸部で、横位の平行沈線が施されている。128は胸部で、斜位の集合沈線を施した後、横位・縦位及び曲線が施されている。129は底部で、縦位の集合沈線の他、円形の刺突が施されている。

##### A・B トレンチ

130は胸部で、横位の平行沈線を施した後、斜位の集合沈線を施している。131は胸部で、横位の綾杉文が施されている。132は口縁部で、口唇部に結節状浮線文が施されている。

##### C トレンチ

133~135は胸部で、斜位の集合沈線を施した後、横位の平行沈線を引いている。

##### N-35グリッド

136は胸部で、縦位の集合沈線を施している。

##### M-32グリッド

137は胸部で、縦位の集合沈線を施した後、斜交する沈線を引いている。

##### N-29グリッド

138は胸部で、斜位の集合沈線を引いた後、横位の平行沈線を引いている。

##### 表探・地点不明遺物

139は胸部で、縄文が施されている。横位の平行沈線が施されている。140は胸部で、縄文が施されている。縄文には末端処理が施されている。141~144は胸部で、縄文が施されている。145は胸部で、縄文が施されている。縄文には末端処理が施されている。146は胸部で、地文に縄文が施され、横位の平行沈線が引かれている。147は頸部から口縁部にかけて、斜位の集合沈線が施されている。148は胸部から頸部にかけて、平行沈線で鋸齒状に区画した中を斜位に集合沈線を施している。また、斜交する平行沈線が引かれている。149・150は胸部で、横位の綾杉文を施した

後、横位の平行沈線が施されている。151は口縁部で、突起となる。縦位の集合沈線を施した後、斜交する平行沈線が浅く引かれる。152は胴部で、斜位の集合沈線に斜交する平行沈線が浅く引かれている。下部は横位の平行沈線が引かれている。153は胴部で、縦位の集合沈線を平行沈線で区画している。斜位の平行沈線が浅く引かれ、縦位の集合沈線と斜交している。154は胴部で、縦位の綾杉文が施されている。155は胴部で、斜位の集合沈線を平行沈線で区画している。156は胴部で、横位の綾杉文が施されている。157～160は胴部で、縦位の集合沈線が施されている。161は胴部で、横位の押圧隆帯が貼付されている。162は胴部で、縦位の集合沈線が施されている。163は頭部から口縁にかけてで、斜位と縦位の集合沈線を横位の平行沈線で区画している。

## 2) 石 器 (第32図、図版34)

出土した石器には、石鏃、打製石斧、凹石、磨石、小形磨製石斧がある。また、縄文時代と考えられる土坑から出土した黒曜石の剝片については、先土器時代と考えられる遺物と接合したものもあるので、一括して先土器時代の項で述べている。

### 石 鏃(1～3)

本遺跡からは3点出土している。1点は35号土坑からの出土で、もう1点はO-29区からの出土である。また、局部磨製石鏃が表採されている。

### 小形磨製石斧(6)

調査区北端の、63号土坑の覆土上面から出土している。蛇紋岩製。

### 打製石斧(7)

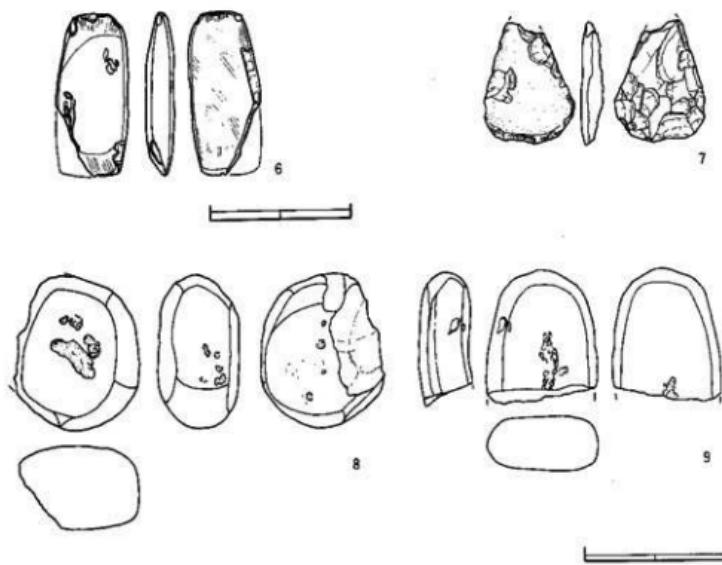
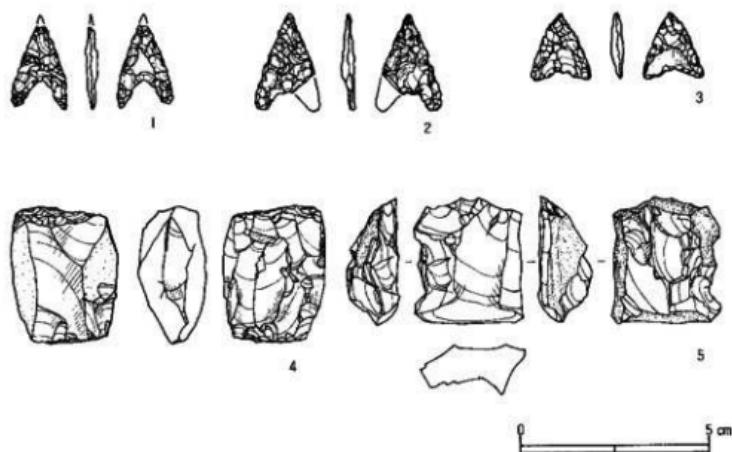
第1次調査において、A・Bトレンチから1点が出土している。安山岩製。

### 凹 石(8)

35号土坑から出土している。安山岩製。約半分を欠損している。

### 磨 石(9)

29号土坑から出土している。安山岩製。約半分を欠損しているが、完形となれば凹石となる可能性もある。



第32図 繩文時代の石器 (1~5は2/3、6は1/2、7~9は1/4)

## 第V章 まとめ

### 第1節 先土器時代

茅野市内では、御小屋之久保遺跡、渋川遺跡など、白樺湖および蓼科周辺の高原地域において先土器時代の遺跡が発見、調査されている。しかし山麓部においては散発的な資料は発見されているが、生活址と考えられる遺跡は発見されていなかった。この点から上見遺跡の石器群は、茅野市域における先土器時代の人々の生活を復元するうえで、貴重な手がかりとなる。

上見遺跡の石器群は縄文時代の石器群との混在が考えられ、不明瞭な部分が残されるが、先土器時代の石器群として、いくつかの特徴が認められる。

上見遺跡の石器群を構成する105点の資料のうち、主体を占めるのは石器の素材である剥片と、素材としての剥片を作りだすための石核である。剥片を石核から剥ぎ取るにはいくつかの方法が知られているが、上見遺跡においては、少なくとも異なる2つの剥片剥離作業が認められる。

第1の剥片剥離作業は、接合資料Iの接合状態からわかるように、石核の両端に打面を設け剥片剥離を行なう方法である。まず、黒曜石の原石の一部に平坦な面をつくり、さらにこの面に調整加工を加える。調整加工を加えた部分を打点とし、数枚の剥片を剥ぎ取る。次に、石核を180度回転させ、反対にある面を打面として剥片を作りだすという方法である。この剥片剥離作業によって作りだされた剥片は接合資料Iのはか第9図23、第10図29である。

第2の剥片剥離作業は、接合資料II、IIIと第10図38の石核にみることができる。まず、原石のある面を打面とし剥片剥離を行なったのち、石核をいずれかの方向に90度横倒しにして、ふたたび剥片剥離を行なうという作業である。打面の形態はまちまちで、第10図38のように自然面を打面とする石核と、接合資料IIIのように打面の作出と調整加工を行なう石核とがある。剥片の打面観察の結果でも、調整打面をもつ剥片と自然面を打面とする剥片とがある。

さらに、第9図18の素材を石核移付き石刀であると考え、第8図15・16の素材である打面再生剥片と第10図33から35の石核調整剥片の存在を考え合わせれば、上見遺跡の剥片剥離技術の中に石刀技法の存在を想定することもできる。しかし、本遺跡から明らかに石刀であるといえるものは出土していない。

このような剥片剥離作業により作りだされた剥片の多くは縦長剥片であり、長さが3cmから6cm、幅では1cmから3cmのばらつきがある。

本遺跡出土の剥片に関する特徴のひとつは、第9図21、第10図30から32の折れ面を両端にもつ剥片である。これらの剥片がなんらかの事故によって折れたものか、意図的に折られたか判断することは難しい。ただ、これらの剥片が接合した例がないことから、遺跡外から持込まれたものか、目的は剥片の両端部分にあり、これらの剥片は不要として廃棄されたもの、あるいは意図的

に折られたものだが、なんらかの理由で運搬されたものであるなどの可能性が残されている。第2の特徴としてあげられることは、剥片の表面に自然面が残された例が多いことである。自然面が剥片の表面に残っていることは、本遺跡において原石から石核整形、剥片剥離の初期の段階が行なわれたことを示すものとも思われるが、この点に関しては他の遺跡との比較を行なわなければ、どの程度の意味をもつか不明である。このほかたった1点であるが、きわめて大きな剥片(第9図24)が出土している。この剥片を剥ぎ取ることができるような石核が出土していないことから、遺跡外から持込まれたものであると思われる。

本遺跡において剥片を素材として作られた石器は極く少なく、ナイフ形石器1点、搔器2点のほか、調整加工のある剥片が11点あるのみである。ナイフ形石器(第8図13)の調整加工は通常の刃削り加工であり、茅野市内では南岸遺跡下層の時期以降のナイフ形石器から認められる。打面再生剥片を素材とした搔器(第8図15)および調整加工のある剥片(第8図16、第9図17)は特徴的な石器であるが類似は少なく、南岸遺跡、淡川遺跡第2地点に形状が類似する搔器が出土しているが、上見遺跡の搔器とは調整加工の範囲と密度が異なる。

また、以上述べた石器群に用いられている石材は、気泡などを含まず透明で良質なものが用いられている。石材に良質な黒曜石を用いる傾向は、淡川期に始り御小屋之久保期以降本格化するとされている。

以上の諸点と剥片剥離技術が整うのは淡川期以降であることから、上見遺跡の石器群は淡川期以降、御小屋之久保以前に位置するものであると考えたい。

#### 参考文献

- 宮坂英次・宮坂虎次 1966 『蓼科』尖石考古館研究報告叢書 第II冊  
赤沢 威・小田静夫・山中一郎 1970 『日本の旧石器』 立風書房  
加藤晋平・鶴丸俊明 1980 『岡縄石器の基礎知識 I・II』 柏書房  
1986 『茅野市史 上巻 原始・古代』 茅野市  
竹岡俊樹 1989 『石器研究法』 肯善社

## 第2節 繩文時代

### (I) 土坑

本遺跡で検出された土坑は、65基あるが、次のIV類7種に分類が可能である。

#### I 類

12基が検出されている。平面形態は楕円形で、底面形は隅丸長方形を呈する。坑底に大きなビットを1つ有するもので、坑底面での確認ではそれぞれのビットにロームを貼った痕跡が確認されている。このビットを確認する前の坑底の状態は、多くの土坑で中央が盛り上がっており、径5cm前後の小ビットが数個確認できた。この盛り上がっている個所はビットの中程までも堅く貼ってあるロームであり、ハードロームとの区別がつきにくいものであった。本遺跡からは8基が

検出されている。

ピット上層に貼ったロームは、22号土坑の8cmから43号土坑の28cmまで、厚さに差が認められる。土坑によっては、貼ったロームの厚さを計測しないまま、ピットを完掘したものもあるが、概ねこの範囲内でロームを貼ったものと思われる。なお、ピットにロームを貼った痕跡のない土坑も、5号・23号・63号土坑の3基が検出されている。このロームを盛り上げるように貼った土坑と、ロームを貼った痕跡のない土坑とが時期的に同じものかどうかについては、明らかには出来ないが、各土坑の配置などから、同じ時期と考えてよいものと思われる。また、同じ形態の陥し穴も、その配列により、別の群である可能性もあるが、その時期差はさしてないものと思われる。形態から陥し穴と考えられる。

#### I類a

2・5・22・23・26・39・43・49・54・59・61号土坑の11基が検出されている。平面形態が長径123~185cmで平均145cm、短径が75~146cmで平均120cmの橢円形、底面形態は長径64~110cmで平均88cm、短径が55~74cmで平均65cmの隅丸長方形で、深さは61~92cmで平均76cmを測る。坑底の中央には長径25~42cm、短径13~24cm、深さ30~65cm程のピットがある。平面形態の法量で見ると、150cmから185cmのやや大きいものと、120cmから140cmのやや小さいものの2種類があるようと思われる。

#### I類b

I類bとされる土坑は、もっとも北で検出された63号土坑の1基である。平面形態は、I類aに比して短軸が短く、底面形態も短軸がかなり短くなっている。断面の形態は短軸方向が中段に接のある「Y」字形を呈している。I類aと同じく坑底中央にピットが見られ、小ピットを幾つか埋設したものと思われるが、ピット上面をロームで貼った痕跡はなかった。

#### I類土坑について

縄文時代の土坑の中に、陥し穴と考えられるものあることを最初に指摘したのは茅野市蓼科城之平遺跡を調査した宮坂英式氏である。その後、陥し穴と考えられる形態の土坑は神奈川県横浜市の霧ヶ丘遺跡群で注目されるところとなり、その後も各地で発見が相次いでいる。

茅野市においては、陥し穴土坑の発見こそ早かったものの、調査の対象が集落遺跡に集中していたこともあって、検出件数は少ない。茅野市内で検出された陥し穴土坑を列挙すると、蓼科城之平遺跡で23基、米沢よせの台遺跡で2基、豊平与助尾根南遺跡で2基、豊平占川城跡で3基、米沢棚細遺跡で1基、金沢阿久尻遺跡（今年度調査、未報告）で3基が検出されており、本遺跡<sup>(註1)</sup>の12基を合せても、6遺跡46基にすぎない（第3表）。この他、報文あるいは茅野市史などの記述に土坑の存在が記されているものとして、金沢判の木山西遺跡、同頭殿沢遺跡、玉川下の原遺跡などがあるが、報文掲載の図面から陥し穴と判読できる資料は無かった。

#### 土坑の坑底ピットについて

上記遺跡では、I類a・I類bとしたもの合せて12基の陥し穴土坑が検出されているが、いず



第33図 I類（陥し穴）土坑の配置 (1/400)

れも坑底の中央に1個のピットを持つ形態のものであった。

市内各遺跡の陥し穴土坑を見てみると、城之平遺跡で検出された23基の内、未完掘の5基を含めずに見ると、木遺跡と同様、坑底に1個のピットを持つと推測できるものは15基ある。他に、<sup>(註2)</sup>坑底ピットが2個のものが1基、4個のものが2基検出されている。

よせの台遺跡では、2基検出されているが、坑底のピットはどちらも2個である。

与助尾根南遺跡では、2基検出されているが、坑底のピットはどちらも1個である。

古田城跡では、3基検出されているが、坑底のピットは1基が2個、2基が5個である。

棚畠遺跡では1基検出されているが、坑底のピットは2個である。

阿久尻遺跡では3基検出されているが、坑底に2個のピットをもつものが1基で、他の2基は小ピットはあるものの、大きなピットは検出されていない。なお、阿久尻遺跡は来年度にも調査区域を残しており、新たな土坑の発見される可能性が充分残されている。

この様にして見ると、本遺跡と同様の形態をもつ土坑は、城之平遺跡の15基と、与助尾根南遺跡の2基だけである。

#### 1類土坑の配列

上見遺跡で確認された1類a土坑（陥し穴）は、11基あるが、その内9基が尾根に沿って波状に一列に並んでいる。陥し穴は長軸方向が主軸になるものと考えられるため、並列する形になるものと思われる。

波状に並ぶと考えると、2号土坑と23号土坑はこの列から外れており、別の群になるものと考えられる。また、59号土坑、54号土坑、49号土坑、43号土坑、39号土坑の5基が弧状に並ぶと考えると、23号土坑も間隔がやや開くものの、同一の群となる可能性があり、26号土坑、5号土坑、22号土坑が別の群になる。この場合も61号土坑と22号土坑は別の群であろう。1類b土坑は、1類aとは長軸方向がほぼ90度ずれていることもあって、別の群になると思われるが、残念ながら、本遺構が調査可能区域の北端にあたり、同じ形態の土坑は水田などとして削平利用されている周辺地域に存在していたものと思われ、配列を見ることは出来ない。

市内発見の各遺跡の陥し穴土坑についてみても、城之平遺跡は遺構の数が多いのではっきりしないものの、各土坑が並列している様子が窺える。よせの台遺跡では、21・22号土坑の2基が検出されただけであるが、約3mを隔てて並んでいる。古田城跡では、3基検出された陥し穴土坑の内、形態の同じ1・2号土坑が9mの間隔で並んでいる。同じ形態の土坑が1基しか検出されていないものも、調査面積が狭かったり、調査区の端にあるものがある等、調査区外に同じ群となる可能性のあるものもある。以上から、本遺跡を含めて陥し穴土坑は、幾つかが群となって並列状態で並ぶと考えてよいものと思われる。その1つの群の数については、2基から多くても5基ぐらいとなるのではなかろうか。

#### 土坑壁面の小ピットについて

22号土坑には、壁面の中程よりやや高いところに、水平よりやや下向きに掘られた径5cm、深

第3表 市内陥入穴・土坑一覧表

遺跡名	番号	平面形	断面形	平長	平幅	底長	底幅	深さ	底面ピット	輪方向	出土遺物	時期	備考
上見	2	橢円形	鉢状	185	130	110	60	70	1(28×13×43)	N-45°-E	土器片・黒曜石	中期前頭	
上見	5	隅丸長方形	鉢状	123	75	93	63	80	1(26×20×48)	N-36°-E	土器片	中期前頭	
上見	22	橢円形	鉢状	170	134	64	57	92	1(32×21×45)	11	N-25°-E		
上見	23	橢円形	鉢状	125	107	75	55	64	1(25×20×30)		N-63°-W	土器片・黒曜石	中期前頭
上見	26	橢円形	鉢状	162	133	109	73	77	1(42×24×57)		N-39°-E		
上見	28	橢円形	鉢状	156	116	93	67	82	1(35×23×61)		N-77°-E		
上見	43	不定形 (橢円形)	小盤形 (深鉢)	150	130	80	74	89	1(30×22×56)		N-77°-E		
上見	49	橢円形	鉢状	128	121	81	68	70	1(30×17×48)		N-56°-E	上器片・縫	中期前頭
上見	54	橢円形	鉢状	127	125	85	67	70	1(35×24×55)		N-68°-E		
上見	59	橢円形	鉢状	128	110	96	60	80	1(28×20×46)		N-60°-E		
上見	61	橢円形	鉢状	139	112	91	68	61	1(33×23×65)		N-60°-E		
上見	63	橢円形	Y字状	177	121	114	30	79	1(20×18×37)		N-38°-W	土器片・小形磨 製器片	中期前頭
城之平	1	隅丸方形		120	38	—	—	20	1(側文では小ビ ット3)		刮片・砂片	早期	
城之平	2	隅丸方形		141	92	—	—	35	1	7	石核・刮片・砂 片	早	期
城之平	3	橢円形	鉢状	102	97	—	—	76	1		刮片・砂片	早	期
城之平	4	不定形	鉢状	123	72	35	1			ナイフ・鉋片・ 砂片	早	期	
城之平	5	橢円形	鉢状	139	64	—	—	32	1	接縫・石核・鉋 片・砂片	早	期	
城之平	6	隅丸方形	鉢状	181	61	—	—	41	1(側文では小ビ ット3)	刮片	早	期	
城之平	7	橢円形	鉢状	162	83	35	2			石核・鉋片・砂 片	早	期	
城之平	8	隅丸方形	鉢状	165	87	49	1(側文では小ビ ット2)			刮片・砂片	早	期	
城之平	9	隅丸方形	圓状	100	60	—	—	10	1	石核・刮片・砂 片	早	期	
城之平	10	不定形	鉢状	158	106	60	4	小ビット10		刮片・砂片	早	期	
城之平	11	橢円形	鉢状	113	113	50	1		3	石核・砂片・ 砂片	早	期	

通路名	番号	平面形	断面形	半長	半短	底長	底短	深さ	坑底ピット	壁面ピット	解説	出土遺物	時 期	備 考
城之平	12	楕円形	鉢 形	124	97			36	1			剝片・碎片	早 期	
城之平	13													未定期
城之平	14	隅丸長方形	圓 形	156	96			18	1(側文では小 ピット5))			ナイフ・鋸片	早 期	
城之平	15	隅丸長方形	目 形	155	69			26	4	2		剝片・碎片	早 期	壁面に縄の先端で 施された跡
城之平	16	楕円形	鉢 形	115	84			35	1(側文では小 ピット2))	3		剝片	早 期	
城之平	17			115	96			4				石核・剝片	早 期	未定期
城之平	18	凸 形	鉢 形	83	73			59	1			石核・剝片・碎 片	早 期	
城之平	19												未定期	
城之平	20	小雙形		220	71									
城之平	21	隅丸長方形	圓 形	119	47			31	2(側文では1+ 小ピット2))	2		石核・剝片・碎 片	早 期	未定期
城之平	22	不整形		164	125									
城之平	23												未定期	
よせの音	21	隅丸長方形	鉢 形	140	76	118	46	48	2	やり	N-14°-W		早 期	他に小ピット
よせの音	22	隅丸長方形	鉢 形	166	76	142	44	25	2	やり	N 10°-E		早 期	他に小ピット
与利毛根塙	1	楕円形	短縮Y字状	168	120	88	42	98	1		N-35°-E		早 期	小ビット未発掘
与利毛根塙	2	隅丸長方形	鉢 形?	152	96	136	66	44	1(25×18×46)				早 期	坑底に小ピット
古田城跡	1	隅丸長方形	短縮Y字状	222	80	191	40	96	5		N-25°-E		早 期	
古田城跡	2	隅丸長方形	短縮Y字状	244	100	170	38	87	5		N-34°-E		早 期	
古田城跡	3	隅丸長方形	鉢 形	222	100	179	56	67	2		N-60°-W		早 期	
櫛 煙	534	楕円形	鉢 形	185	69	127	28	66	2	多數	N-31°-W		早 期	
阿久尻B区	1	隅丸長方形	鉢 形	270	130	205	40	108	小ピット		N 15° E			
阿久尻B区	8	楕円形	鉢 形	157	73	126	39	64	小ピット 6		N-21°-E			
阿久尻B区	9	隅丸長方形	鉢 形	197	96	168	58	65	2		N-11° W			

さ20cm程のビットが11個検出されている。本遺跡でもこれが唯一の例であるが、棒状のものを土坑内に向けて突き刺してあったように見受けられる。木の根等の痕跡がロームにある事は調査者も充分に承知しており、それと異なりそなでここに報告する。なお、これらのビットの相対するところにはビットはない。市内の遺跡検出の陥し穴土坑にこの類例を求めるに、城之平遺跡、よせの台遺跡がある。よせの台遺跡では、2例ある陥し穴土坑の両方に壁面の孔が検出されているようである。よせの台遺跡の報文中では、陥し穴土坑の掘り込みがそれほど深いものではないことから、それを補うなんらかの構造をこの小ビットに求めねばならないことを示唆している。まだ例の少ない資料であるので、他に類例があれば紹介をお願いしたい。

#### I 類土坑の時期について

本遺跡を含めて茅野市域の遺跡の多くが、耕作土である表土層の下が、直ちにローム漸移層になっている場合が多く、遺物包含層が極めて薄いため、遺構確認面の高低によって遺構の時期や新旧関係を考えることは難しい。そこで、遺構から出土する遺物や、遺構の切り合いによって、時期や新旧関係を見ることが、遺構の年代を考える手段として有効である。しかし、I 類土坑は陥し穴と考えられ、その性格からして遺物が出土しないのが通常の在り方と考えられる。そのため遺物による時期決定には難しいものがある。本遺跡では、他の土坑とこの陥し穴とが混在し、中には重複関係をもつ土坑もあった。

今回の調査では、I a 土坑、I b 土坑合せて12基あるが、その内土器などの時期の分る遺物の出土した土坑は5・23・49・63号土坑の4基である。遺物の時期はいずれも縄文時代中期初頭である。陥し穴の性格からして他の土坑との同時存在は考えにくく、また遺物の状況から他の土坑と切り合っている陥し穴も、それよりは古そうな状況もあるが、時期差はそれほどなく、土坑が埋没するより前に縄文時代中期初頭の時期を迎えているものと考えられる。

#### II 類

平面形態が円形または椭円形で、断面形態がクライ状のものを一括した。遺構の掘り込みはハードロームにまで至っており、壁や床もしっかりしている。同様の形態を示す土坑は21基あるが、大きさによって、II a 類、II b 類に分類が可能である。分類の基準については、平面径の長軸が100cm以上のものと以下のものとした。その内11基の覆土内に縄文時代中期初頭の土器が入っていた。完形品の出土ではなく、また坑底から浮いているものが多いため、用途については不明な点が多い。

#### II a 類

4・7・12・14・18・29・32・35・38・42・48・53・55・64・65号土坑の15基が検出されている。平面長軸は98~153cmで平均120cm、平面短軸は87~122cmで、平均104cmを測る。底面長軸は67~134cmで平均98cm、底面短軸は59~100cmで平均83cmを測る。深さは26~65cmで平均43cmを測る。

遺物が全く出土しなかった土坑は7・32・38・55号土坑の4基で、他の11基からはなんらかの

遺物が出土している。12・14・18・29・42・53・64・65号土坑の8基からは、縄文時代中期初頭の土器が出土している。黒曜石片が出土している土坑は4・12・14・18・29・35・42・48・64号土坑の9基で、12・14・18・29・42・64号土坑の5基は土器・黒曜石の両方が出土している。また、35号土坑からは土器の出土は無いものの、黒曜石の他、円石・石鎧が出土している。また、29号土坑からも円石の出土もあった。

#### II b 類

11・31・40・41・46・60号土坑の5基が検出されている。平面長軸は77~95cmで平均83cm、平面短軸は70~95cmで平均78cm、底面長軸は56~82cmで平均68cm、底面短軸は50~80cmで平均63cmを測る。深さは24~51cmで平均37cmを測る。31・40・41号土坑の3基から縄文時代中期初頭の土器片が出土しており、40号土坑からは黒曜石の出土もあった。

#### II c 類土坑の時期について

21基ある土坑の多くで、縄文時代中期初頭の土器片を出土している。土器片を出土していない土坑は4・7・11・32・35・38・46・48・55・60号土坑の10基あるが、これらを含め、縄文時代中期初頭として差し支えないものと思われる。

#### III 類

平面形態が円形または楕円形で隅丸方形のものも見受けられる。断面形が皿状のものを括した。掘り込みがローム漸移層中で終っているものが多く、坑底が凸凹しているものもあるが、遺構と考えて差し支えないものと思われる。大きさによって、III a 類、III b 類に分類が可能である。分類の基準については、平面径の長軸が100cm以上のものと以下のものとした。

#### III 類 a

10・20・28・30・34号土坑の5基が検出されている。平面長軸は102~115cmで平均は108cm、平面短軸は74~100cmで平均86cmを測る。底面長軸は67~88cmで平均81cm、底面短軸は53~81cmで平均61cmを測る。深さは16~28cmで平均23cmを測る。

遺物の出土している土坑は34号土坑の1基だけで、縄文時代中期初頭の土器が出土している。

#### III 類 b

8・9・13・16・17・19・24・25・27・36・37・50・51・52・56・58号土坑の16基が検出されている。平面長軸は47~88cmで平均80cm、平面短軸は47~88で平均71cmを測る。底面長軸は33~90cmで平均58cm、底面短軸は29~75cmで平均52cmを測る。深さは10~52cmで平均24cmを測る。

遺物の出土している土坑は8・13・16・17・51号土坑の5基で、いずれも縄文時代中期初頭の土器を出土している。黒曜石片の出土する土坑はなかった。

#### III 類の時期について

III類土坑はIII a 土坑、III b の土坑合せて21基が検出されているが、土器の出土した土坑は、8・13・16・17・34・51の6基である。いずれの土坑出土の土器も縄文時代中期初頭のものであるが、II類土坑に比して破片が小さい。所属時期については、縄文時代中期初頭で差し支えないものと

思われる。

#### IV 類

平面形態は円形、または不整円形で、断面形は浅い皿状を呈するものを一括した。構造のはつきりした土坑の多い中で、遺構の掘り込みがローム漸移層あるいはソフトローム中で終っているものが多く、壁や床のはつきりしないものが多い。土坑とした中にも自然の凹凸であるものがかなり含まれるのではないかと思われる。また、いくつかの土坑が重複しているのではないかと思われるものも本類に入っている。

1・3・6・15・21・33・44・45・47・57・62号土坑の11基がこれにあたる。この内、遺物の出土のあった土坑は3・15・21・47・57号土坑の5基で、いずれも縄文時代中期初頭の土器が出土している。また、15・47号土坑からは黒曜石片の出土もあった。なお、21号土坑からは中世の内耳土器の破片が出土している。

#### IV類土坑の時期について

IV類土坑は11基が検出されている。遺構とは考えられないものもあるが、出土遺物からやはり縄文時代中期初頭と考えられる。21号土坑の内耳土器の解釈については、数個の土坑の重複と考えられ、多くの土坑は縄文時代中期初頭に位置付けて差し支えないものと思われる。

#### (2) 土 器

上見遺跡は、中期初頭のごく限られた時期に、短期間利用された土地と考えられる。住居址の検出がなかったことから、完形土器の出土ではなく、また、調査時に一括土器とした遺物も遺存度があまりよくななく、器形の全体像が窺えるものは出土していない。

遺構に確実に伴うと考えられるものは、1の3号土坑出土土器と、2の14号土坑出土土器の2点だけで、他の遺物については、大形の破片はあるものの、土石などと共に埋没したと考えた方がよいものと思われる。個々の土器については、遺構と遺物の項で述べてあるので、ここでは一括して述べたい。

図化にあたっては、出来るだけ多くの資料を提供しようとしたため、かなり小さな破片も図化してある。その為、土器破片の文様組成の抽出を試みたが、完形となればこれ以外の文様を含む可能性は充分考えられる。例えば、斜位の集合沈線としたものは、破片が大きくなれば横位または縦位の綾杉文となる可能性もある。実際、斜位の集合沈線をもつ破片が36点と量的に飛抜けて多いのがそれを物語っている。平行沈線としたものは、集合沈線となる可能性ももっている。また、縄文を施しただけの破片は36点あるが、他の文様と組合わさる可能性は充分にあると思われる。

縄文土器を概観すると、地文に縄文を施したものと、そうでないものとに大きく分けることが出来る。

地文に縄文を施したものは53点あり、全体の1/3にあたる。結節の見られるものは、縄の末端処

第4表 上見遺跡網文土器文様組成表







理をしたものを含めて9点ある（1・53・54・57・88・106・108・140・145）。粘土紐の貼付けをもつものは5・6・14・31・73の5点ある。ソーメン状の細い粘土紐の貼付けをもつものは、11の1点だけである。刺突をもつものは、31の1点だけである。平行沈線を施したもののは、縦位、横位、斜位、曲線など含めて14点ある。集合沈線を施したもののは、1・60・82の3点で、いずれも斜位の集合沈線である。綾杉文を施したもののは11の1点だけで、横位の綾杉である。鋸齒状文を施したもののは103の1点で、横位に施している。なお、陰刻文を施したもののは出土していない。69・82の器壁は3～4mmで、胎土も他の土器とは異なっている。他地域からの搬入品かとも思われる。出土遺構は42号土坑、53号土坑と異なるが、同一個体と思われる。

地文に繩文を施さない土器は110点ある。その殆どに半截竹管を用いた文様が描かれているが、地文に繩文を施した土器の中にも同様の文様があるため、繩文施文以外のものとして一括した。ソーメン状の細い粘土紐の貼付けのあるものは、68・93の2点ある。粘土紐の貼付けのあるものは、125・161の2点ある。結節状浮線文のあるものは、68・94・132の3点ある。陰刻文あるいは陰刻状に撫で取ったものは、21・37・49・55・79・96・97・153の8点ある。刺突のあるものは129の1点である。平行沈線を施したものは、縦位、横位、斜位、曲線を含めて59点ある。集合沈線を施したものは、縦位、横位、斜位を含めて74点ある。7・72は、横位の集合沈線を短い間隔で止めることによって、竹の節状の文様を描き出している。屈曲が少ない為横位の集合沈線としたが、山形波状文または、鋸齒状文としてもよいと思われる。綾杉文を施したものは、縦位、横位を含めて24点ある。三角形の無文部分をその儘にしておくものと、撫で取って陰刻状にしたもののが見られる。鋸齒状文を施したものは、縦位、横位を含めて6点ある。また、集合沈線に斜交あるいは直交する沈線をもつものは20点ある。

本遺跡出土の土器中にはソーメン状の貼付けのあるもの（11・68・93）、結節状浮線文を施したもの（68・82・94・132）、陰刻文あるいは撫で取って陰刻状となるもの（21・37・49・55・79・83・95・97・153）など、比較的古い様相を示すと思われるものも見られるが、概ね中期初頭の古い段階に位置付けられよう。

### （3）周辺遺跡との関連

今回の調査では、繩文時代中期初頭と考えられる土坑群が検出された。すでに破壊されていると思われる個所が多いこともある、住居址は検出できなかったが、本遺跡に住居址が存在しないとすれば、周辺遺跡にその集落を求めるねばならない。

茅野市内で繩文時代中期初頭の遺物の出土している遺跡は、御座岩陰遺跡、柳原岩陰遺跡、高風呂遺跡、棚畠遺跡（ちの）、棚畠遺跡（米沢）、高部遺跡、晴ヶ峰遺跡、上御前遺跡、経塚遺跡、立石遺跡、中ノ原遺跡、与助尾根遺跡、一本松遺跡、長峰遺跡、下の原遺跡、判の木山東遺跡、御狩野遺跡、珍部坂A遺跡、頭殿沢遺跡に本遺跡を加え、20遺跡ある。この内本遺跡に比較的近い遺跡を拾ってみると、上御前遺跡（玉川神之原）、経塚遺跡（豊平南大塩）、立石遺跡（豊

平南大塙)、中ッ原遺跡(豊平南大塙)、弓助尾根遺跡(豊平東獄)、珍部坂A遺跡(湖東堀)の6遺跡がある。

この直前である縄文時代前期終末(下島式から曙ヶ峰式)の土器を出土している遺跡は24遺跡あるが、本遺跡に比較的近い遺跡としては、日向上遺跡(豊平塙之目)、師岡平遺跡(豊平上古田)、向原遺跡(豊平南大塙)、神立林遺跡(豊平南大塙)、竈神平遺跡(豊平東獄)、上御前遺跡(玉川神之原)、丸生戸遺跡(泉野小屋場)、金堀場遺跡(豊平上場沢)の8遺跡ある。

前期終末・中期初頭の遺物を出土している遺跡とも発掘調査によって該期の集落として確認されているものはない。

近隣遺跡の中では、金堀場遺跡、大泉山を挟んで西側に師岡平遺跡がある。両遺跡とも、本遺跡との間に大日影川を挟んでいる。どちらも比較的大きな遺跡と考えられているが、残念ながら発掘調査は行なわれていない。本遺跡のある、大日影川と柳川の間に挟まれた台地の中には該期の遺跡はないため、前記2遺跡から本遺跡と関連のある遺跡を考えねばならないが、師岡平遺跡は大日影川を挟んでいる他に、間に大泉山がある。より関連のある遺跡を求めるすれば、最も有力なのが金堀場遺跡ではないかと思われる。

#### 註

(註1) 各土坑の数値は出来るだけ報文によったが、土坑の形態、断面形、坑底のピットなどは、統一の為、報

文と異なっているものもある。

(註2) 城之平遺跡の調査では、杭を埋設した小ピットを振り上げた段階で調査を終了しているが、近年の各遺跡の事例では、杭を幾つかまとめて大きなピットに埋設し、ロームを充填している例が多く検出されている。再調査することは出来ないが、報文の実測図から、小ピットしか確認されていないものでも、大きなピットがあったと推測できるものについては、数値を変えて考察している。

#### 参考文献

- 宮坂英一・宮坂虎次 1966 『史料』尖石考古館研究報告叢書 第II冊  
鶴岡幸雄 1978 『よせの古跡』 茅野市教育委員会  
鶴岡幸雄 1980 『弓助尾根南遺跡』 茅野市教育委員会  
小林潔志 1987 『古田城跡』 茅野市教育委員会  
鶴岡幸雄他 1990 『棚畠』 茅野市教育委員会  
今田 道 1974 『肩平遺跡』 岩谷市教育委員会  
三上徹也他 1985 『梨久保遺跡』 岩谷市教育委員会  
今村啓爾 1973 『霧ヶ丘』 霧ヶ丘遺跡調査団  
山口 明 1978 『縄文時代中期初頭上器群の分類と編年 関東・中部地方を中心として』  
『駿台史学』第43号  
沢充則他 1986 『茅野市史』上巻 原始古代

写 真 図 版



1 上空から遺跡を望む



1 遺跡遠景（西から）



2 第1次調査（東から）



1 第1次調査遺構分布（東から）



2 第2地点遺構分布（南から）



1 先土器時代の調査（南から）



2 先土器時代遺物出土状況（南から）



1 先土器時代遺物出土状況（東から）



2 先土器時代の接着資料(I)（約2/3）



1 先土器時代の接合資料(2) (約2/3)



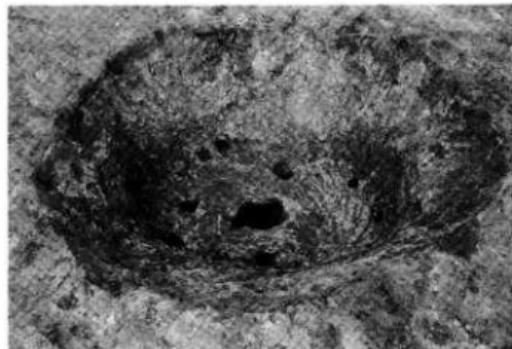
2 先土器時代の接合資料(3) (約2/3)



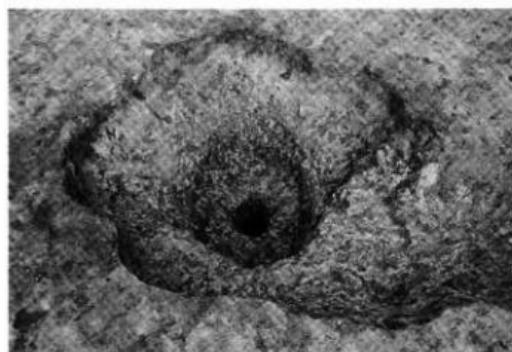
1 先土器時代の石器(1) (約2/3)



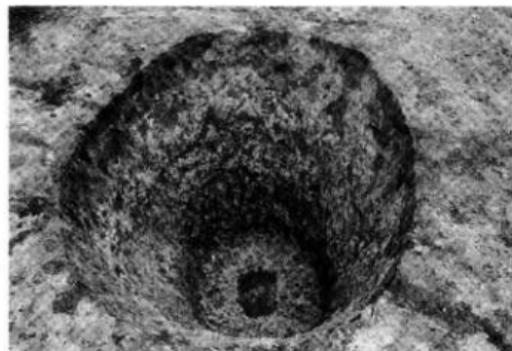
2 先土器時代の石器(2) (約2/3)



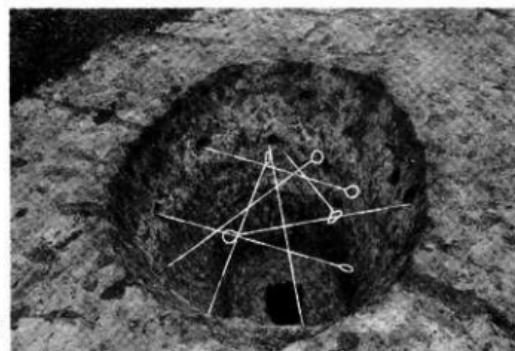
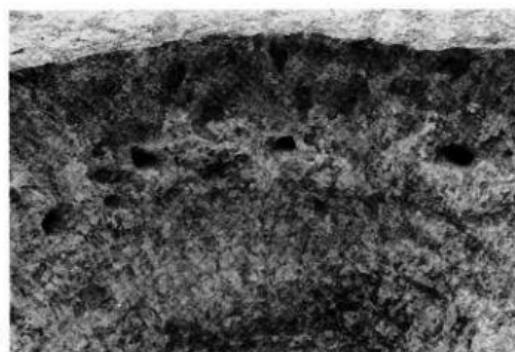
1 2号土坑

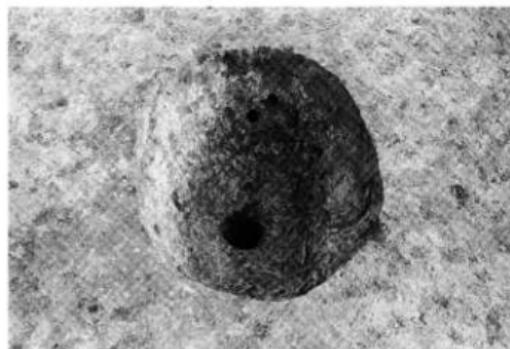


2 5・6・15号土坑（南から）

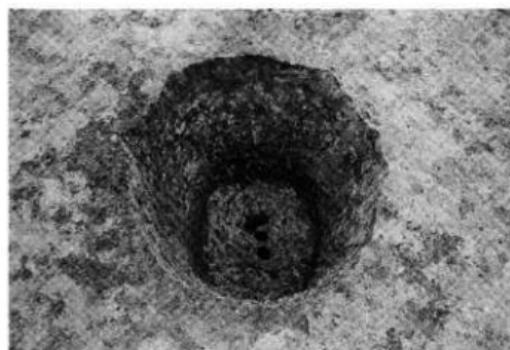


3 22号土坑（坑底ピット検出状態）  
(北東から)





1 23号土坑



2 26号土坑 (北から)



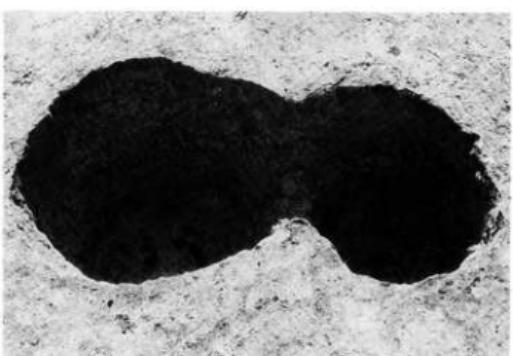
3 39号土坑



1 43号土坑（西から）



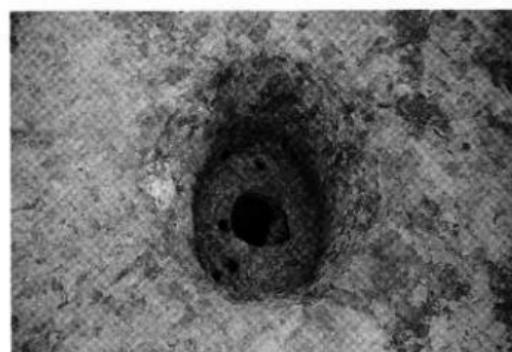
2 49号土坑（西から）



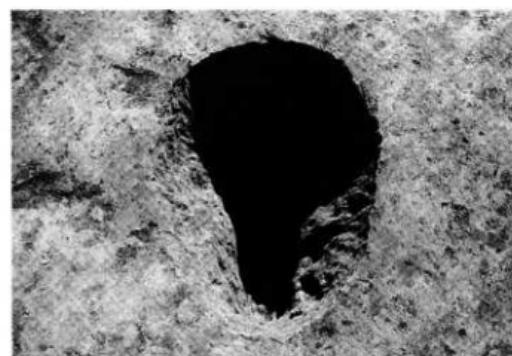
3 54・55号土坑（西から）



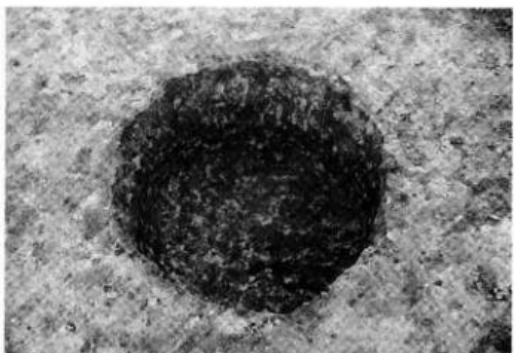
1 58・59号土坑（西から）



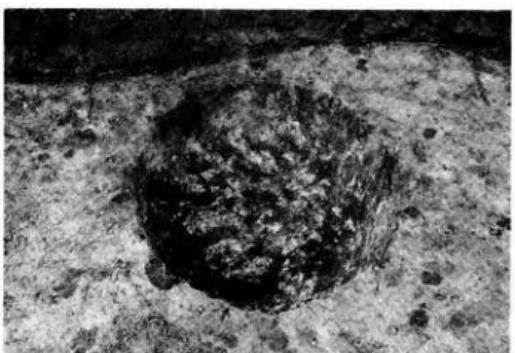
2 61号土坑



3 63号土坑（北西から）



1 4号土坑（西から）



2 7号土坑（南から）



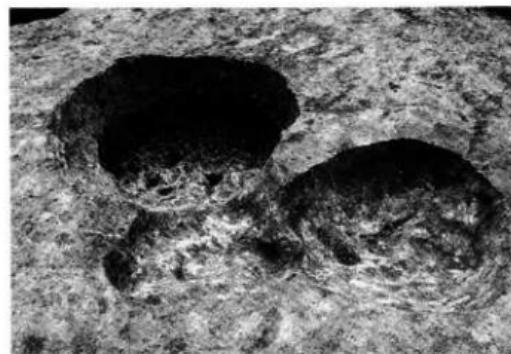
3 12号土坑（東から）



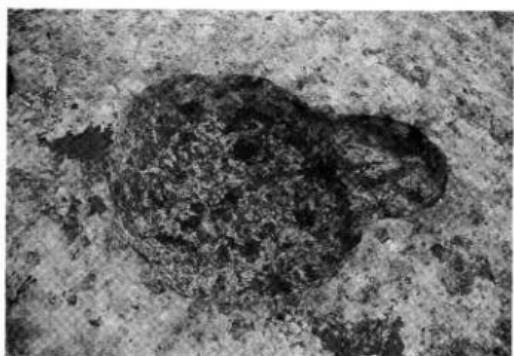
1 9・10・14・27号土坑（北から）



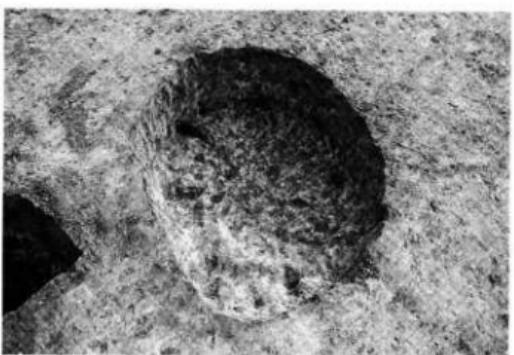
2 14号土坑遺物出土状態（南から）



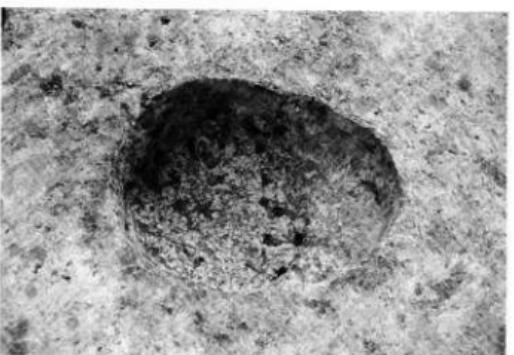
3 16・17・18号土坑（北から）



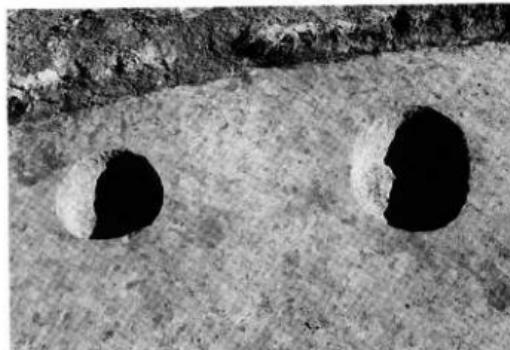
1 29・56号土坑（西から）



2 32号土坑（北から）



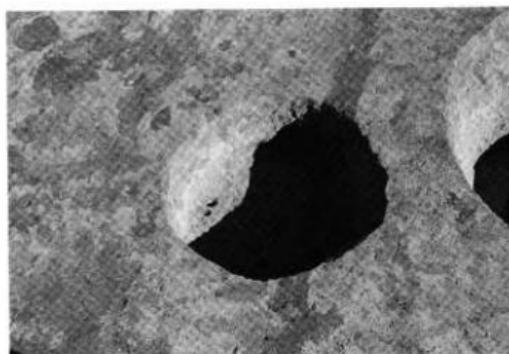
3 35号土坑（西から）



1 38・46号土坑（西から）



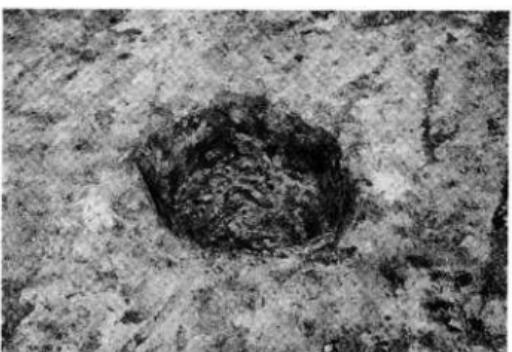
2 42・53号土坑



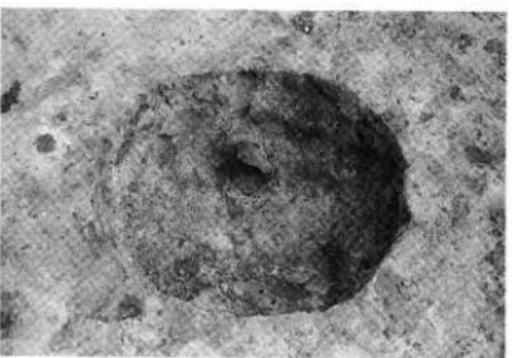
3 48号土坑（西から）



1 64号土坑（西から）



2 11号土坑（北から）



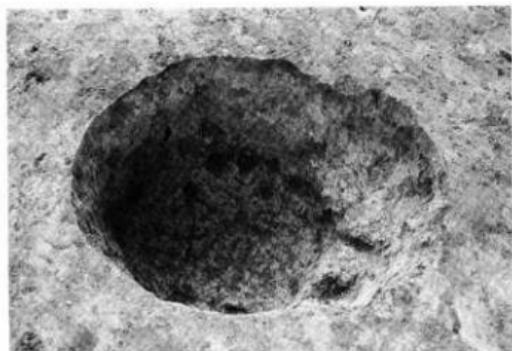
3 31号土坑（西から）



1 31号土坑遺物出土状態（西から）



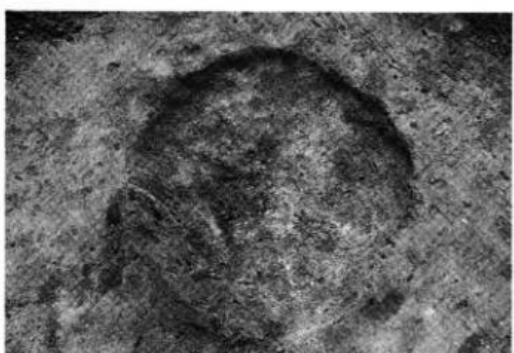
2 40号土坑



3 41号土坑



1 45・47・60号土坑（東から）



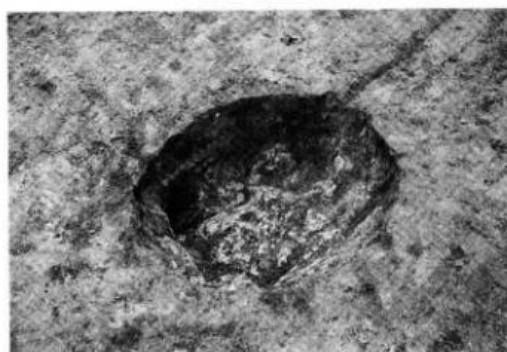
2 20号土坑（北から）



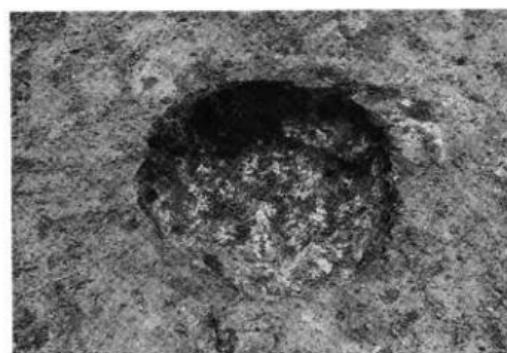
3 28号土坑（西から）



1 34号土坑（西から）



2 8号土坑（北から）



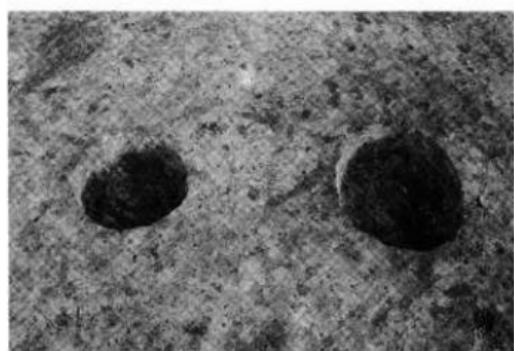
3 13号土坑（北から）



1 19号土坑（北から）



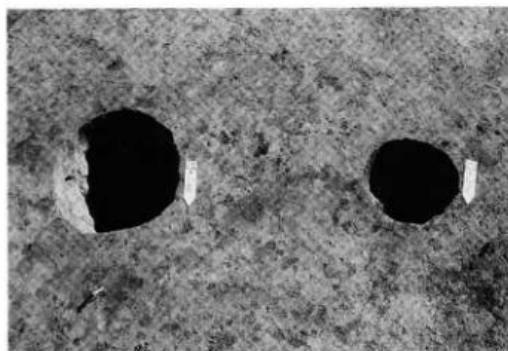
2 24・25号土坑（西から）



3 36・37号土坑（西から）



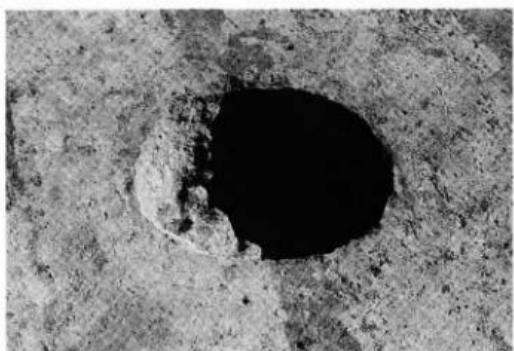
1 50号土坑（西から）



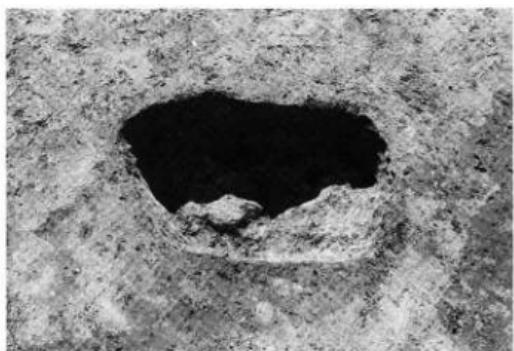
2 51・52号土坑



3 21号土坑



1 33号土坑（西から）



2 44号土坑（北から）



3 57号土坑（西から）



1 62号土坑（北西から）



2 1号ロームマウンド（西から）



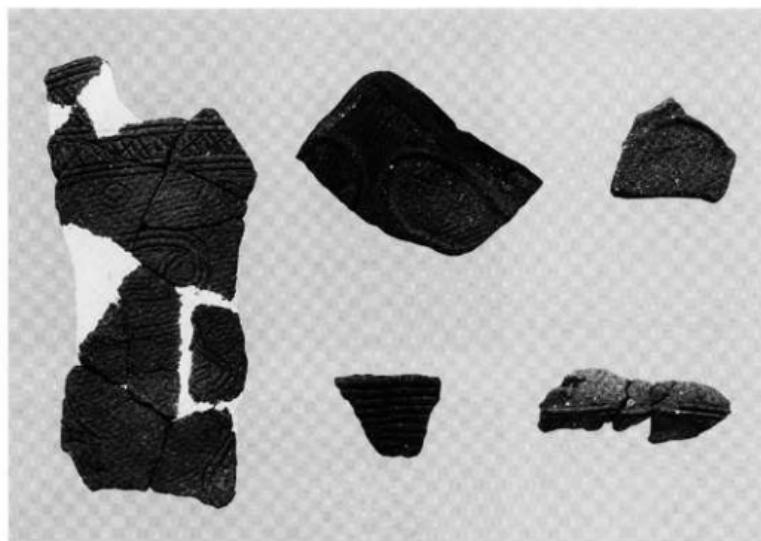
3 1号ロームマウンド（東から）



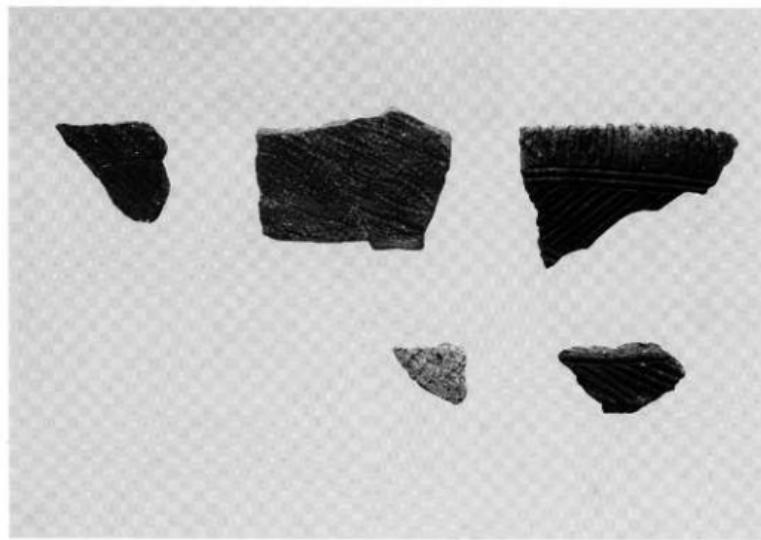
1 2号ロームマウンド（西から）



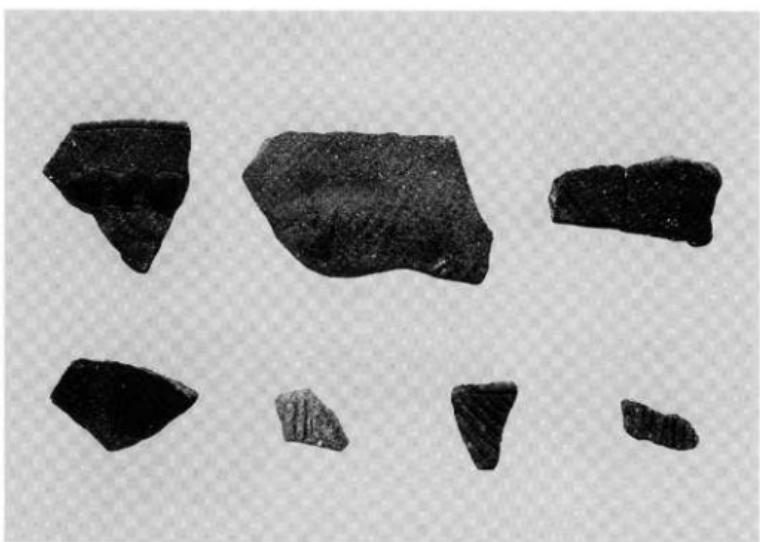
2 2号ロームマウンド（西から）



1 3号土坑出土土器



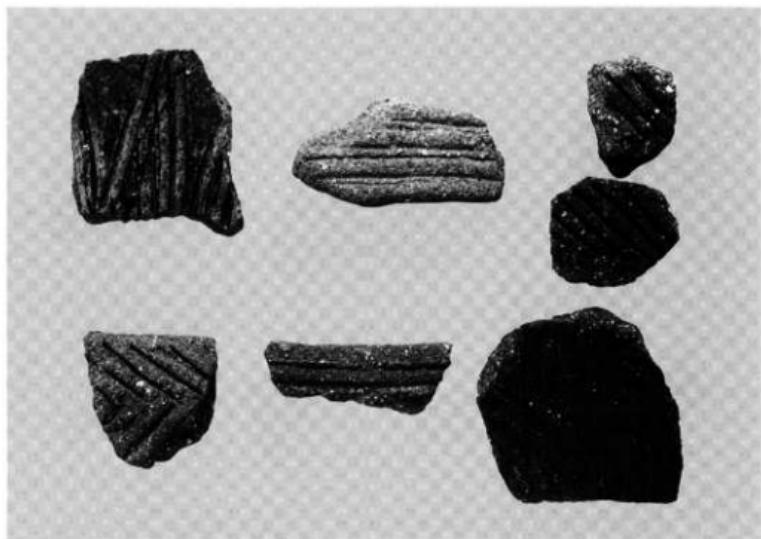
2 5·8号土坑出土土器



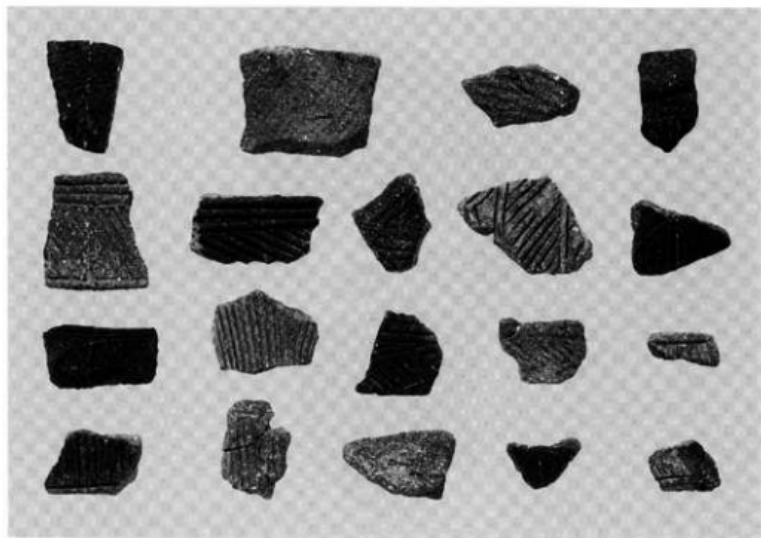
1 12号土坑出土土器



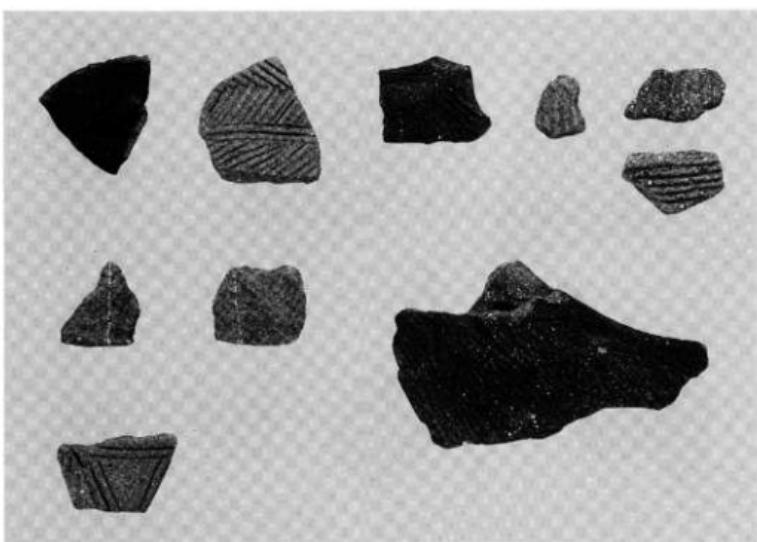
2 14号土坑出土土器



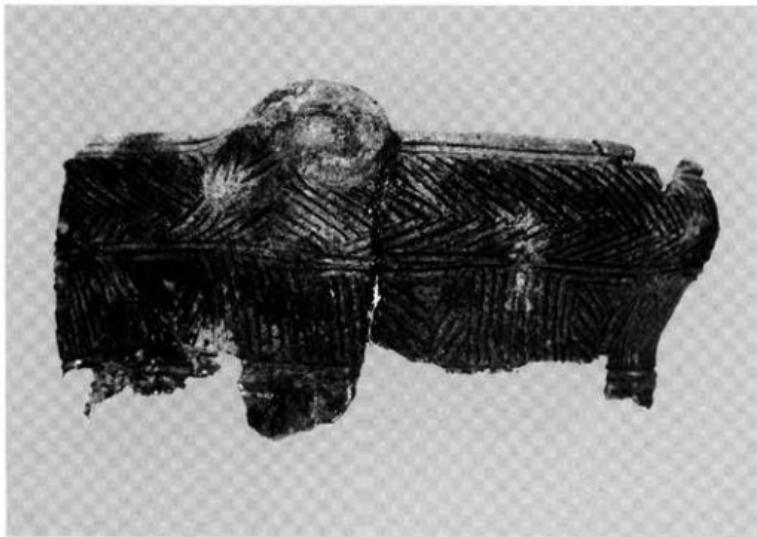
1 13·15·16·17號土坑出土土器



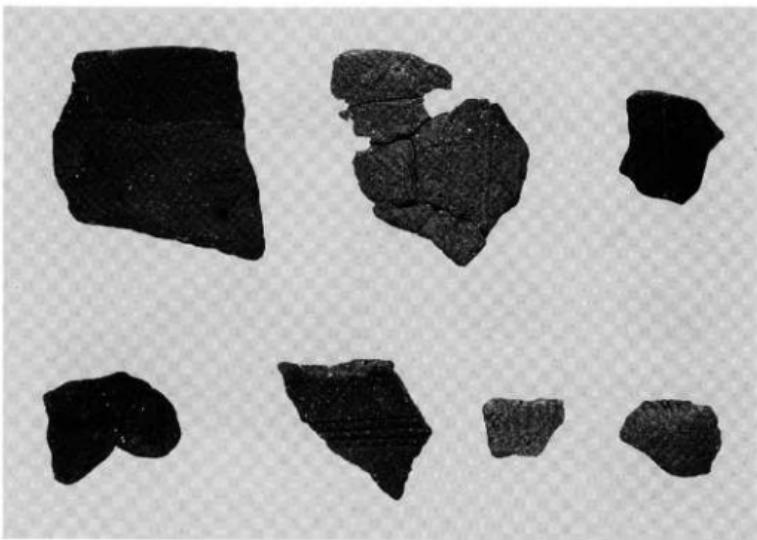
2 18號土坑出土土器



1 21·23·29·31·48號土坑出土土器



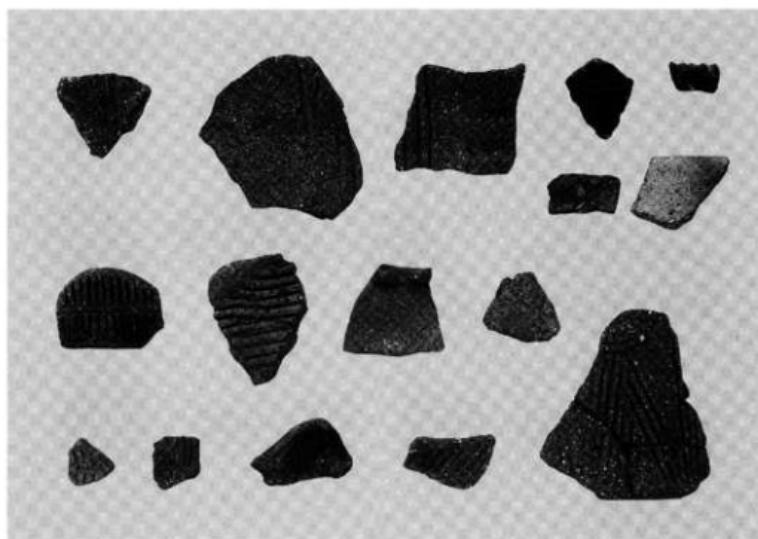
2 40號土坑出土土器(1)



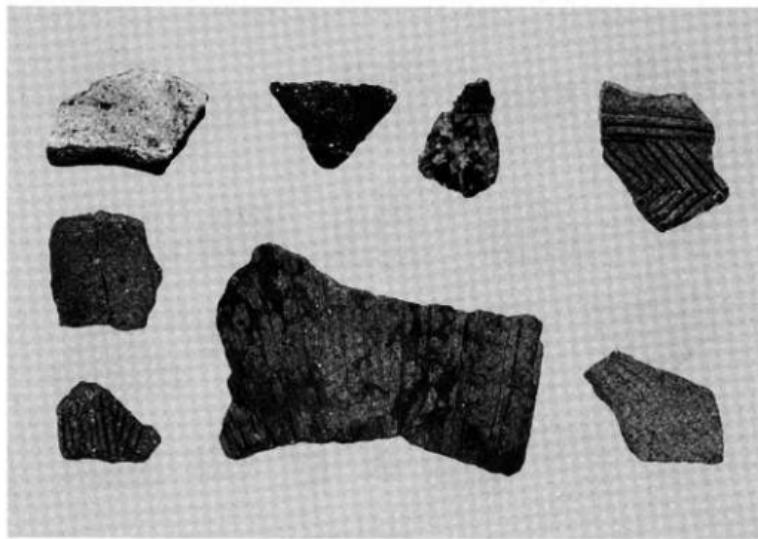
1 40号土坑出土土器(2)



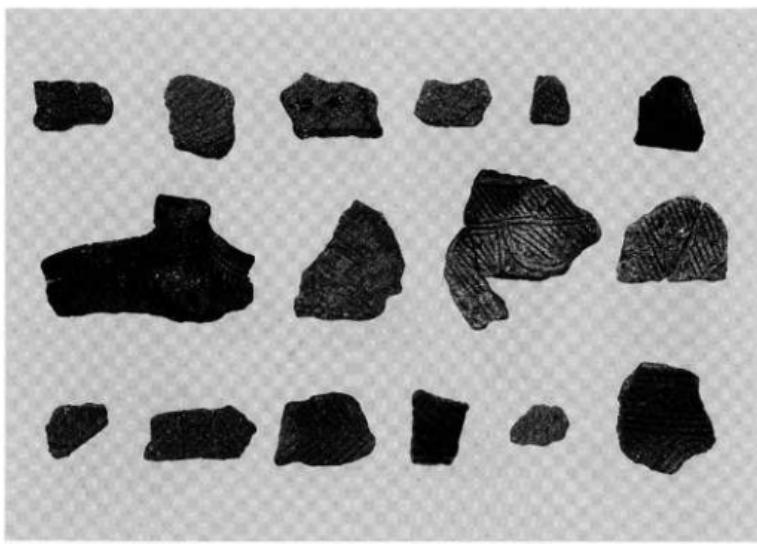
2 42号土坑出土土器



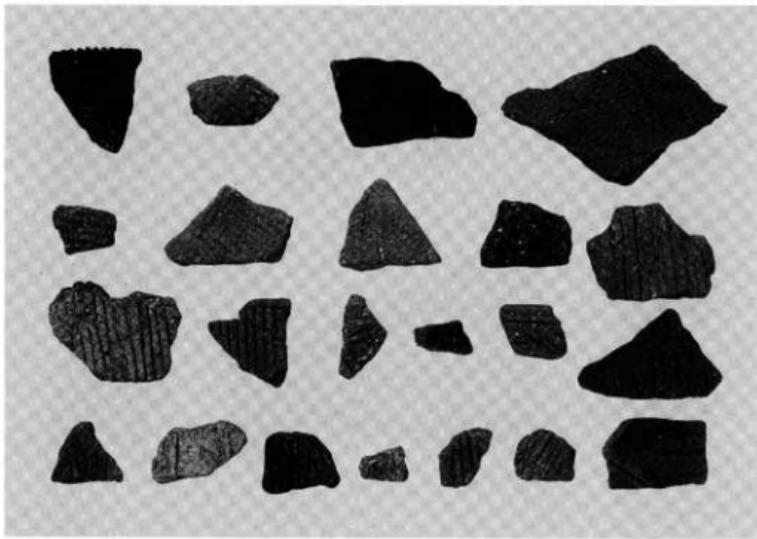
1 41·42·47·49号土坑出土土器



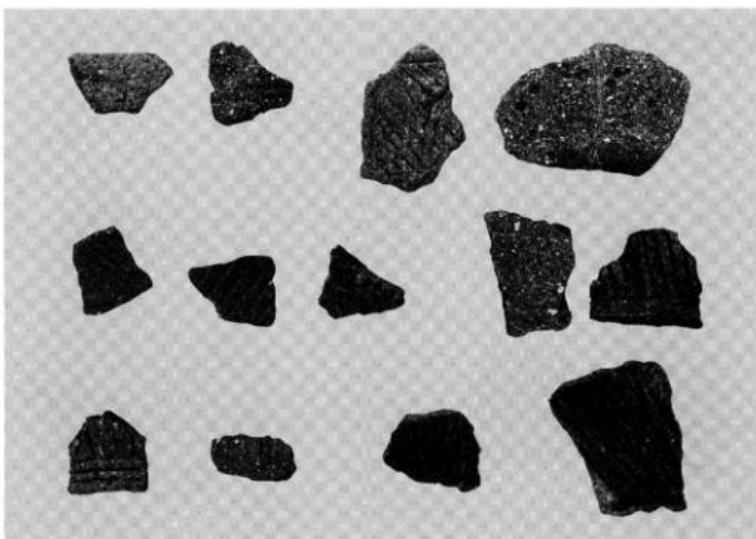
2 51·53·57·63·64·65号土坑出土土器



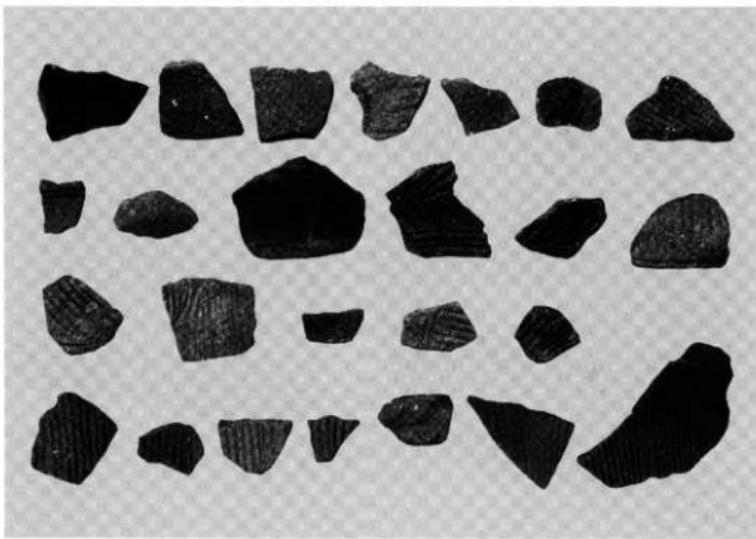
1 1号ロームマウンド出土土器



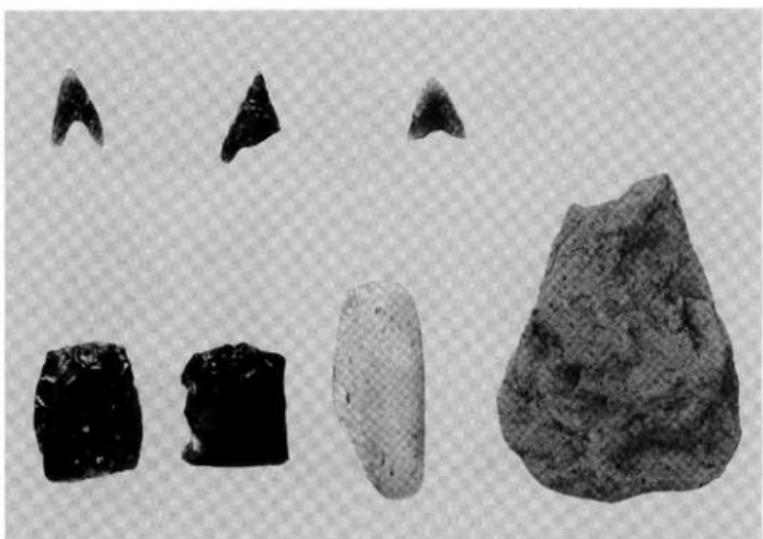
2 2号ロームマウンド・Aトレンチ出土土器



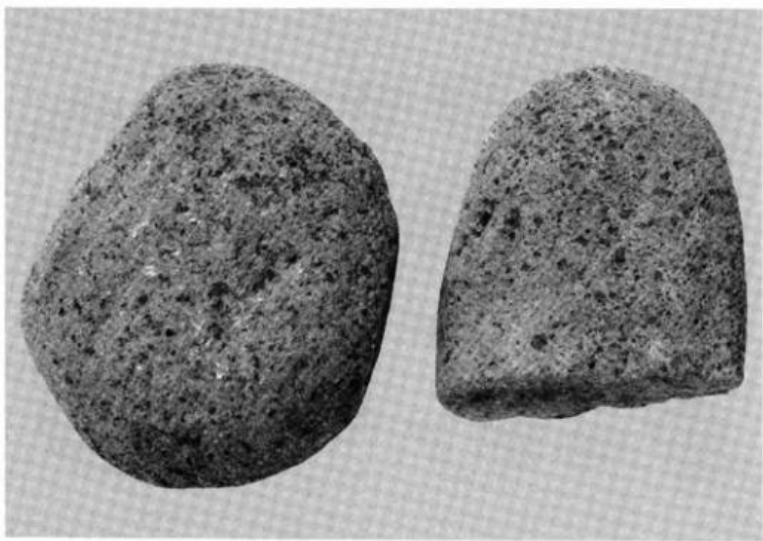
1 A・B・Cトレンチ出土土器



2 表採土器



1 綱文時代の石器(1) (約2/3)



2 綱文時代の石器(2) (約2/3)

---

## 上見遺跡

— 県営団地整備事業に伴う —  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

---

平成3年3月25日 印刷  
平成3年3月30日 発行

編集発行 長野県茅野市坂原2丁目6番地1号  
茅野市教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社

---

